公益社団法人日本植物園協会

平成 27 年度海外事情調査報告書



イギリス
ナショナル プラント コレクション

JABG
公益社団法人 日本植物園協会

表紙写真　*Astibe*（チダケサシ属）ナショナルコレクション
（2015年7月8日 マーウッドヒルガーデンズ　撮影：倉重祐二）

目次

日本でのナショナルコレクションの構築に向けて　倉重祐二　…… 1

20 年越しの夢を期待して　老川順子　…… 3

Ⅰ．調査概要

隊員名簿 …… 7

日程 …… 8

調査地 …… 10

Ⅱ．イギリスにおけるナショナルコレクションの実際

レディング大学における果樹コレクションに関する講義　佐々木陽平　…… 12

ナショナルコレクション・デボングループ会談　長澤亜紀子　…… 14

ナショナルコレクション・サリー会談　大木宜子　…… 21

Ⅲ．ナショナルコレクションホルダー視察

ハンプトンコートパレスフラワーショー　三津山咲子　…… 24

ハンプトンコートパレスガーデンズ　大木宜子　…… 28

王立キュー植物園　鈴木茂登子　…… 31

レディング大学植物園　佐々木陽平　…… 39

ホガース邸　ミニュチュア・ホスタコレクション　佐々木陽平　…… 41

サヴィルガーデン　大原隆明　…… 43

アレン邸　シャスタデージー・ブッドレアコレクション　高橋康夫　…… 49

マーウッドヒルガーデンにおけるナショナルコレクシン　冨田あすか　…… 56

パインコッテージプランツ　城山豊　…… 60

ハイネス邸　シクラメン　三津山咲子　…… 62

王立園芸協会　ローズムアガーデン　長澤亜紀子　…… 66

ベネッツウォーターガーデン　城山豊　…… 74

英国のヘメロカリス事情　ポーリー・マーズ邸他　小幡晃　…… 76

王立ウィズリーガーデン　宮内元子　…… 89

Ⅳ．個別テーマ

英国でナショナルコレクションホルダー活動が盛んであることを考える	田中俊弘	…… 96
英国調査行でわかったこと	鳥居恒夫	…… 99
サクラソウ園芸品種を保存するために	鳥居恒夫	…… 104
イギリスにおける *Bambusa* 属の栽培	田代武男	…… 106
植物園での盆栽展示	加藤昌一	…… 108
イギリスにおけるバラ栽培	鈴木茂登子	…… 119
イギリスにおけるロックガーデン－形態と展示法・植物の栽培法	三津山咲子	…… 128
キュー植物園の標本庫で閲覧した標本と園内で観察した植物	橋本光政	…… 137

参考資料

有用植物を保全する－日本版ナショナルコレクション構想 （日本植物園協会誌 50 号より転載）	倉重祐二	…… 143

日本でのナショナルコレクションの構築に向けて

平成 27 年度海外事情調査隊隊長

新潟県立植物園　倉重祐二

平成 27 年度海外事情調査は、イギリスにおいて 2015 年 7 月 4 日～ 7 月 12 日の 9 日間、18 名の隊員により実施された。本調査の目的は、イギリスの植物保全制度「ナショナルプラントコレクション」の活動状況を視察することで、現在植物園協会が進めている、日本で栽培される植物を保全するシステム（日本版ナショナルコレクション）の構築に資することである。

調査地は移動時間を考慮して、イギリス南部に限定し、調査時期に開花している植物のナショナルコレクションを保有する植物園、ナーセリー、個人等のさまざまなタイプのホルダーとした。また、ナショナルコレクションの運営団体であるプラントヘリテージの本部ならびにデボングループとの会談を、それぞれ王立園芸協会ウイズリーガーデンとローズムアガーデンで行った。隊員は、植物園やコレクションホルダー、講義や会談ごと、また個別のテーマを持って調査に臨んだ。

現地での調査を通じて、イギリスのナショナルコレクションの運営組織や体制、認定基準、保全の実際、情報公開、地域グループでの活動、コレクションホルダーの意識等の現状や問題点を知ることができた。

以下に、今回の調査を通じて私自身が感じた事項や日本でナショナルコレクションを構築する上で考慮すべき点をまとめた。

- 事業を推進、維持するための堅固な組織体制と豊富な運営資金、国民の理解が必要。
- イギリスのナショナルコレクションは、有用植物だけではなくイギリス国内で栽培されるすべての植物を対象にしている。絶滅危惧植物もナショナルコレクションの一部門として保全が進められている。
- 認定、コレクションの維持、公開にはコレクションホルダーや専門家等間のネットワークが重要。
- 植物体だけではなく、日本独自の植物の利用や園芸文化も合わせて保全すべき。
- 植物愛好団体はコレクションホルダーには含まれていない。
- コレクションホルダーによって保全に対する熱意が異なる。植物園よりも個人の方がホルダーとしての誇りを持ち、コレクションやデータ管理、公開や普及活動に積極的に取り組んでいる。個人のホルダーの社会的ステータスも高い。
- 認定されている植物は、園内に他の植物と混植されるなど、必ずしも系統だって保存されているわけではない。
- 本部は全体の活動を管理しているが、ホルダーの保有状況や普及活動を把握しているわけではない。実際の普及活動等は地域のグループやボランティアによって支えられている。
- 個人のコレクションの継続は難しく、イギリスにおいても橋渡しはうまく機能していない。失われたコレクションも数多い。

なお、参考までに巻末に日本植物園協会のナショナルコレクション委員会が設置されるまでの経緯と、日本における制度の構築やその問題点、将来の目指す姿をまとめた「有用植物を保全する－日本版ナショナルコレクション構想」（倉重，日本植物園協会誌 50 号）を転載した。

帰国後のナショナルコレクション委員会での検討により、ナショナルコレクションの目的を「日本植物園協会のナショナルコレクションは、野生種、栽培品種に関わらず、日本で栽培される、生きた文化財としての価値や遺伝子資源として貴重な植物を守り、後世に伝えていくことを目的とした植物コレクションの認定、保全の制度である。」とし、ナショナルコレクションに認定されるためには、「植物学的な分類群、利用、歴史的背景など、体系的にまとまりのあるテーマが必要となる」としたことを申し添える。

最後になるが、本調査は、イギリスでの 1 年間の準備、現地でのコーディネートや案内をしてくださった賛助会員の老川順子さんのご協力なしに実現しえなかったものである。また、イギリスでは多くの植物関係者のご支援とご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表する次第である。

なお、本調査の一部は、カメイ社会教育振興財団研究助成金によって実施された。

20 年越しの夢を期待して

賛助会員　老川順子

イギリスのナショナルコレクション制度について知ったのは、英国王立園芸協会（Royal Horticultural Society: RHS）の研修生として同協会が所有するウィズリーガーデンに滞在していた時である。今から 20 年以上も前になる。当時、これを運営する組織、ナショナル・カウンシル・フォー・ザ・コンサベーション・オブ・プランツ・アンド・ガーデン（NCCPG）の事務局はウィズリーの園内にあった。どこからかその名称を耳にして以来、ナショナルコレクションとはどういうものなのか、非常に興味深く、その仕組みを理解するために、事務局には頻繁に伺わせていただいた。また、全国のコレクションの情報をまとめたガイドブックを片手に、実際にコレクションを視察し、保有者とも接する機会を重ねていくにつれ、この制度の素晴らしさに魅了されると共に、園芸大国イギリスの凄さを実感していった。そして、いつの日か「ナショナルコレクションの日本版」ができないものかと、一人、夢に描いていた。

2012 年夏、日本植物園協会のある関係者の方から一通のメールをただいた。「今、日本の公立、私立の植物園は、指定管理者制度と不況の影響で酷い状況になっており、協会加盟園も減ってきています。より多くの人に植物や植物園に関心を持ってもらい、植物園の質の向上を図るためにも、日本にイギリスのナショナルコレクション制度のようなものができないかと考えています。（中略）協会の生物多様性保全委員会は、絶滅危惧種だけでなく特定植物のコレクションにも取り組むことになっており、当委員会の活動を後押しするためにも（後略）」。非常に心が揺らがされた。しかし結局、これにお応えするようなことは何もできないまま、このメールだけが残された。

今年度の海外視察先が正式にイギリスと確定し、テーマとしてナショナルコレクションが検討されているとの連絡をいただいた。2014 年 7 月であった。そして間もなく、その現地コーディネートの依頼を受けた。

この視察は、植物採集や自生地調査とは違い、制度のしくみや運営方法を学び、その成果を、我が国で応用するための基礎資料として活用することが期待されている。コーディネート役の最大の課題は、この目的を十分に達成すべく、調査内容と調査地の適切な選択であった。現在、イギリス国内には 600 以上ものナショナルコレクションが認定されており、そのガイドブックを見る限りでは、どれも魅力的で興味深い。しかし、実際のコレクションの現状や保有者の受け入れ態勢などは、この紙面上だけでは十分に把握しきれず、直接の問い合わせや現地訪問、また関係者のヒアリング調査などを行った。結果として、プラント・ヘリテージ（NCCPG が 2009 年に改名）との会談、および同組織の最大の PR イベントである RHS ハンプトンコートフラワーショウの展示見学、地域レベル（ナショナルコレクションの実践的な運営と管理は、地元地域レベルで行われており、現在、38 のプラント・ヘリテージ・地域グループがある）でもっとも規模が大きく活発なデボン地域グループとの会談を、

視察のハイライトにすることにした。そして、7月に見ごたえのある植物種または庭園であること、また、コレクションの目的および運営母体や方法など様々な例が組み込まれることなどを考慮し、実現的で効率の良いルートを考案した。さらに調査隊が全体としてまた個人として、多くの「出会い」と「繋がり」が持てるようにも配慮した。

行程が半ばを迎え、隊員の間でやや疲れが見られ始めた第４日目の朝、長時間のバス移動を利用して、本視察への参加の動機やナショナルコレクションの日本への導入に関する意見や考えを、隊員一人ひとりが述べた。急にマイクが回され、躊躇された方もいたであろうが、日中の視察中には得がたい隊員同志の意見交換および共有という貴重な機会であったと思う。個人的には、大変、勉強になり、また、後半の視察に対する気持ちや姿勢を改めるいい刺激となった。

今後、ナショナルコレクションを進めていく上で、参考となる点も多く指摘されたため、その内容を簡単にまとめておきたい。

- 植物、特に園芸種を収集し、保存する意味と価値を、より多くの人へ「よりわかりやすく」伝える必要がある。
- 保存の優先順位の決め、系統立てて、コレクションを進めることが必要であり、コレクションの教育、研究などへの利用も考慮すべきである。
- 個人や民間に至る広い分野と様々なレベルでのネットワークと連携体制を構築し、植物園はナショナルコレクションの「ハブ」になるべきである。
- 市民の共感を得るためにも、協会としての活動が期待される。各名誉会員の豊富な知識、経験、ネットワークなどを大いに生かしてほしい。
- 盆栽、真竹、古典品種などを含む日本独特の優れた園芸技術や植物種は、国内でもっと認識され、理解されるべきであり、ナショナルコレクションがそれを誘導する一手段になるのではないか。
- 栽培技術や植物同定知識の継承を含む人材育成の充実と、コレクションを共有し維持する「しくみ」が必要である。
- 文化として、また国さらには世界遺産として、日本の園芸植物の収集と保全を進めていくことを期待する。
- 遺伝子多様性の保存は野生種だけでなく、薬用植物を含む有用植物や園芸種においても重要であり、ナショナルコレクションはその実践である。

今回、訪問させていただいた植物園、庭園、個人の方々は、我々調査隊を温かく迎え、大変、ご熱心に、コレクションおよび園内のご説明をしてくださった。また、入園（見学）料の免除やお茶のサービスなど、特別なご配慮もしてくださった。特に、プラント・ヘリテージ・デボングループは、年度総会にて本視察計画について話し合い、組織として全面的にご協力くださった。RHS ローズムアガーデンでの会談や視察先の調整など、そのご支援は計り知れない。

約一年がかりで計画された今年度の視察調査は、現地の多くの方々のご支援、ご協力、そしてご厚意なしには実現しなかった。調査隊が、直接、お会いできたのは、まったくその一部にすぎない。記して感謝の意を示す。（略敬称）

Allen., A., Aoki, K., Barley, R., Bennetts, J., Birchall, C. and L., Carter, G. and J., Charlesworth, S., Dickie, J., Flanagan, M., Fulcher, D., Garbutt, I. and N., Gardiner, J., Hall, M., Headen, M., Hickson, M., Hogarth., J., Hutchinson, J., Hynes, J., Jones, B., Kirkham., T., Leguil, S., Maasz, P., Milliken, W., Moorcraft, H., Morris, M., Ordidge, M., Pharaoh, M., Pitman, T., Price, T., Pritchard, K., Quarteman S., Radscheit, M., Ritchie, J., Rowe, D., Simpson, D., Smith, B., Stephens, H., Stone, C., Twibell, J. and J., Webster, J., Wilford, R., Yamanaka, M., Volunteers at Plant Heritage

本視察調査が無事に終了し、かつて描いた夢の実現がまさに期待される。国外に基盤を置く個人会員として、今後、どのように協力ができるかを、今、真剣に考えているところである。

最後になるが、本視察の数か月後、サビルガーデンをご案内してくださったマーク・フラナガン史が急逝された。野生種から園芸種に至るまで、日本の植物へは非常に高い関心を持たれ、日本のナショナルコレクション制度の設立を大いに期待し、励ましてくださっていた。謹んで心からご冥福をお祈りする。

Ⅰ．調査概要

隊員名簿

隊長

倉重 祐二　　新潟県立植物園

副隊長

城山 豊　　名誉会員・兵庫県立淡路景観園芸学校

隊員（五十音順）

大木 宜子　　咲くやこの花館
大原 隆明　　富山県中央植物園・公益財団法人花と緑の銀行
小幡 晃　　東京都渋谷区・賛助会員
加藤 昌一　　神奈川県横浜市・賛助会員
佐々木 陽平　金沢大学医薬保健学域薬学類・創薬科学類附属薬用植物園
鈴木 茂登子　宇治市植物公園
高橋 康夫　　名誉会員
田代 武男　　千葉県四街道市・賛助会員
田中 俊弘　　名誉会員
鳥居 恒夫　　名誉会員
冨田 あすか　兵庫県芦屋市・賛助会員
橋本 光政　　兵庫県姫路市・賛助会員
長澤 亜紀子　安城産業文化公園デンパーク・公益財団法人安城都市農業振興協会
三津山 咲子　六甲高山植物園
宮内 元子　　渋谷区ふれあい植物センター

現地コーディネイトおよび案内

老川 順子　　賛助会員・イギリスサリー州



ウイズレーガーデンにて（2015 年 7 月 11 日）

前列左から田中、長澤、冨田、宮内、小幡、鳥居、佐々木、老川、中列左から三津山、大木、髙橋、田代、加藤、橋本、後列左から鈴木、城山、大原、Jim Gardiner、倉重 .

日程

月日	時間	場所	内容
7月4日	9:30	羽田空港	集合
	11:15		関西方面隊員と合流
	11:45		出発
	16:18	イギリス　ヒースロウ空港	到着
	17:36		老川氏と合流
	17:45		ホテルに移動（バス）
	18:45	サヴィルコートホテル	到着
	19:15		レストランにて軽食
	20:00		解散・ホテル周辺の植物観察
7月5日	7:30	サヴィルコートホテル	朝食
	8:30		集合
	8:46		日付間違いでバスが来なかったためタクシーに連絡
	9:05		出発（タクシー）
	9:54	ハンプトンコート	リバーサイドレストラン前到着
	10:20		ハンプトンコートパレスガーデンショー入場
	10:34		プラントヘリテージ展示見学
	12:00		自由見学
	15:30		ハンプトンコートパレスガーデン見学
	17:03		周辺庭園を馬車に乗って周遊
	17:30		バックヤード・ナショナルコレクション：ヒストリカルコレクション・ヘリオトロープ・ランタナ見学
	18:00		自由見学
	18:45		リバーサイドレストランにて夕食
	21:00		出発（バス）
	21:30	サヴィルコートホテル	到着
7月6日	6:45	サヴィルコートホテル	朝食
	8:25		出発（バス）
	9:10	キューガーデン	フッカー卿墓所見学・徒歩でキューガーデンに移動
	9:30		エリザベスゲート到着
	11:45		バックヤード温室・ナショナルコレクション：ヘリコニア見学
	14:15		図書館・標本室見学
	16:05		出発（バス）
	16:36	ウィンザー城下	到着・自由見学
	18:15		出発（タクシー）
	18:30	フォックス＆ハウンド	夕食
	20:45		出発（徒歩）
	21:00	サヴィルコートホテル	到着
7月7日	6:45	サヴィルコートホテル	朝食
	7:10		出発（バス）
	8:15	レディング大学	到着
	8:20		ナショナルコレクション果樹講義
	9:20		ナショナルコレクション：ジギタリス見学
	10:30		学内植物園見学
	11:05		出発（バス）
	11:30	ホガース邸	ナショナルコレクション：ホスタ見学・茶話会
	12:30		出発（バス）
	13:10	サヴィルガーデン	到着・昼食
	14:00		ナショナルコレクション：耐寒性シダ・シャクナゲ原種・落葉性ツツジ・マグノリア・マホニア・フジザクラ・カバノキ見学
	16:00		自由見学
	17:00		夕食会
	18:00		出発（徒歩）
	18:30	サヴィルコートホテル	到着

月日	時間	場所	内容
7月8日	6:30	サヴィルコートホテル	朝食
	7:00		チェックアウト・出発（バス）
	7:45	バス車内	意見交換会
	11:20	アレン邸	ナショナルコレクション：ブッドレア・シャスターデージー見学
	12:40		出発（バス）
	13:40	マーウッドヒルガーデンズ	到着・昼食
	14:45		ナショナルコレクション：アスチルベ見学
	15:30		自由見学
	16:00		ナショナルコレクション：ツルバギア見学
	16:30		出発（バス）
	17:45	パインコッテージプランツ	ナショナルコレクション：アガパンサス見学
	18:40		出発（バス）
	18:45	フォックス＆ハウンドホテル	到着・チェックイン
	20:00		夕食
7月9日	7:30	フォックス＆ハウンドホテル	朝食
	8:45		出発（バス）
	9:10	ハイネス邸	ナショナルコレクション：シクラメン見学
	10:50		出発（バス）
	11:15	ローズムアガーデン	到着
	11:30		ナショナルコレクション：ヒイラギ属、ミズキ属見学
	13:30		自由見学
	15:00		ナショナルコレクション：デボングループ会談
	16:30		自由見学
	18:00		出発（バス）
	18:45	フォックス＆ハウンドホテル	到着
	19:00		夕食
7月10日	7:15	フォックス＆ハウンドホテル	朝食
	8:05		チェックアウト・出発（バス）
	11:00	ベネット・ウォーター・ガーデンズ	ナショナルコレクション：スイレン見学
	11:30		自由見学・昼食
	13:30		出発（バス）
	15:15	マーズ邸	ナショナルコレクション：ヘメロカリス見学
	17:10		出発（バス）
	18:15	ウィンチェスターホテル	到着・チェックイン
	18:15	ウィンチェスター街中	大聖堂・市内見学
	19:00		レストランにて夕食
	21:45		出発（徒歩）
	22:00	ウィンチェスターホテル	到着
7月11日	7:00	ウィンチェスターホテル	朝食
	7:45		チェックアウト・出発（バス）
	8:55	ウィズレーガーデン	到着
	11:36		自由見学
	14:00		プラントヘリテージとの会談
	15:15		ウィズレーガーデンのナショナルコレクション説明
	15:20		軽食・懇親会
	16:00		出発（バス）
	16:30	ヒースロー空港	到着
	19:35		出発
7月12日	14:57	羽田空港	到着
	15:35		解散

調査地


スコットランド
イギリス
北アイルランド
アイルランド
イングランド
ウェールズ
エディンバラ
Edinburgh
グラスゴー
Glasgow
ダブリン
Dublin
マンチェスター
Manchester
リーズ
Leeds
シェフィールド
Sheffield
ニューカッスル
Newcastle upon Tyne
ダラム
Durham
ヨーク
York
リバプール
Liverpool
ブリストル
Bristol
カーディフ
Cardiff
バース
Bath
サウサンプトン
Southampton
ブライトン
Brighton
オックスフォード
Oxford
スウィンドン
Swindon
ノッティンガム
Nottingham
ピーターバラ
Peterborough
ノリッジ
Norwich
イプスウィッチ
Ipswich
プリマス
Plymouth
トーキー
Torquay
ペンザンス
Penzance
ベルファスト
Belfast
ロンドンデリー
Londonderry / Derry
ゴールウェー
Galway
コーク
Cork
リムリック
Limerick
ウォーターフォード
Waterford
ウェックスフォード
Wexford
キルケニー
Kilkenny
キルデア
Kildare
ウィックロー
Wicklow
ダンドーク
Dundalk
スライゴ
Sligo
マン島
Isle of Man
ブラックプール
Blackpool
ランカスター
Lancaster
ハダースフィールド
Huddersfield
ブラッドフォード
Bradford
ハル
Hull
スカボロー
Scarborough
ミドルスブラ
Middlesbrough
ダンディー
Dundee
アバディーン
Aberdeen
インヴァネス
Inverness
エルギン
Elgin
ストーク・オン・トレント
Stoke-on-Trent
ウルヴァーハンプトン
Wolverhampton
バーミンガム
Birmingham
コヴェントリー
Coventry
レスター
Leicester
ノーサンプトン
Northampton
ケンブリッジ
Cambridge
ノリッジ
Norwich
ピーターバラ
Peterborough
ルートン
Luton
ワトフォード
Watford
ロンドン
London
ブライトン
Brighton
ポーツマス
Portsmouth
サウサンプトン
Southampton
ウィンチェスター
Winchester
レディング
Reading
オックスフォード
Oxford
スウィンドン
Swindon
ブリストル
Bristol
バース
Bath
カーディフ
Cardiff
スウォンジー
Swansea
ニューポート
Newport
ブリッジェンド
Bridgend
バリー
Barry
ウェストン・スーパー・メア
Weston-super-Mare
トーントン
Taunton
エクセター
Exeter
プリマス
Plymouth
トーキー
Torquay
ブリックハム
Brixham
ニュートン・アボット
Newton Abbot
エクスマス
Exmouth
シドマス
Sidmouth
ボーンマス
Bournemouth
プール
Poole
ドーチェスター
Dorchester
ウェイマス
Weymouth
ヨービル
Yeovil
フルーム
Frome
ウェルズ
Wells
バース
Bath
ブリストル
Bristol
チェルトナム
Cheltenham
グロスター
Gloucester
ウースター
Worcester
ヘレフォード
Hereford
ニューポート
Newport
アバーガベニー
Abergavenny
ランディロ
Llandeilo
スウォンジー
Swansea
カーマーゼン
Carmarthen
ラネリー
Llanelli
ミルフォード・ヘイヴン
Milford Haven
ハバーフォードウェスト
Haverfordwest
ペンブローク
Pembroke
ブリストル海峡
Bristol Channel
ケルト海
Celtic Sea
ウェールズ
ウェールズ
イングランド
イングランド
スコットランド
スコットランド
北海
ドーバー海峡
イギリス海峡
ピーズヒル空港
Heathrow Airport
Savil Court Hotel
Winchester Hotel
Fox & Hounds Country Hotel
7/7ビディング大学
7/7ホガース邸
7/7ウインザー
7/5ハンプトンコートパレスガーデン
7/6キュー植物園
7/11ウィズリーガーデン
7/8マーウッドヒルガーデンズ
7/8アレン邸
7/9ロームアガーデン
7/9ハイネス邸
7/9バインコッテージプランツ
7/10マーズ邸
7/10ベケットウォーターガーデン

Ⅱ．イギリスにおけるナショナルコレクションの実際

レディング大学における果樹コレクションに関する講義

金沢大学・附属薬用植物園

佐々木陽平



図１　Ordidge 博士による講義．

2015 年 7 月 7 日、レディング大学（University of Reading）において、ナショナル果樹コレクションプロジェクトの Matthew Ordidge 博士（Research Fellow 兼 Scientific Curator）による講義を受けた（図１）。果樹に関するナショナルコレクションは英国南東部のケント州ブロックデール村にある農園に拠点が置かれており、これを「ブロックデール・コレクションズ」と称している。この農園は環境食糧農村地域省（DEFRA）の管轄下であるが、実際の管理運営はレディング大学とフルーツ・アドバイザリー・サービス・チーム社（FAST）が担当している。

果樹に関するナショナルコレクションの目的は、果樹の遺伝的多様性を保持すること、すなわち「生きた植物を育種することにより多様な作物を作り出し、広く役立つように貢献すること」である。

講義では「保全」と「多様性の拡大」に分けて解説を受けた。

「保全」について

果樹に関する保全は国際間で同意されており、1993 年に「生物多様性の保全」、2004 年に「食物と農業に関する植物遺伝子資源の取り扱い」が成立している。これにより原種だけではなく栽培品種の多様性保全も決められた。さらに欧州間での協力もある。

イギリスでの果樹のナショナルコレクションは DEFRA の管轄のもと、ブロックデールの農園で、遺伝子銀行として生きた植物を維持している。約 4,000 品種の果樹（tree fruit および bush fruit）を各 2 個体ずつ所有している。

果樹は基本的に自家受粉をしないので、他家受粉による種子由来の個体は非常に多様性に富んだものになる。そのため、ある特定の品種を保存しようとする場合、種子ではなく、生きた個体のクローン（栄養系）でなければならない。

ブロックデールの農園は元々 DEFRA の圃場であったが、今はレディング大学が研究管理を行っている。ブロックデールの代表的なコレクションはリンゴ 2,200 品種（観賞用を含む）、ナシ 540 品種、サクランボ 400 品種、ブッシュフルーツ（スグリ類）350 種、プラム 340 品種、その他（ヘーゼルナッツ、ブドウ、カリン）100 品種などである。全てのコレクションは維持、保全のために植物情報が記録されている。

記録項目は、大きさ、形、皮の色と質感、香り、花期、果期、利用方法、耐病性、分枝、低温要求性、保存方法、授粉の必要性、倍数性などである。味など一つの項目で見ても「おいしい」以外にもパイナップに似ているなどのできるだけ詳細な特徴を記録する。その特徴が品種名につけられることもある。

コレクションしている間に遺伝子の突然変異が起きることがある。個々の特徴を記載することで、もともとの形質を保っているのか、また変異した場合、それがいつ、どのように起きたかを確認することができる。当たり前の情報を記録することは非常に重要である。

「多様性の拡大」について

保全とともに特徴的な形質を有する品種を新たにコレクションしている。ブロックデール農園の管理はフルーツ・アドバイザリー・サービス・チーム社（FAST）が担当しているが、管理方法は一般の果樹園と同じ方法である。どの品種をコレクションにするかの判断はレディング大学がしている。

判断の指標は、栽培しやすい、利用しやすいなどの基準で決められる。品種名も混乱しないものを付ける。記録は欧州の品種登録用の基準フォームに準じている。現状の記録に加え過去の文献情報も調べて記載している。新たな情報として DNA 解析情報も追加する。

レディング大学が関与している大きな特徴として、専門の、特に DNA 解析の研究者がそろっていることである。例えば DNA 解析技術により、新しい苗木を作った場合は親株と DNA 配列の違いを確認することができる。これまで遺伝子の多様性は抽象的な面があったが、DNA 解析により視覚的にすることができる。今後はさらに遺伝子の多様性にフォーカスを当てたい。

現在、大学ではこれらの情報をデータベースにまとめ、誰でも閲覧可能にしている。欧州間とも共同で運営している。

最後に、純粋な遺伝子を絶やさないためには、約 10 年毎に株を更新していく必要がある。そのための技術も必要である。ここで作出された品種は、必要な手続きを踏むことによって、農家、学校、研究者に提供している。この活動は DEFRA、レディング大学、FAST、そしてブロックデール・コレクションのチャリティー団体が協力して行っている。

以上、果樹ナショナルコレクションの特性と意義を知ることができた。現地の見学を伴わない講義ではあったが、後日見学したウィズリーガーデンの果樹園でその様子を窺い知ることができた。

ナショナルコレクション・デボングループ会談

安城産業文化公園デンパーク

長澤亜紀子

1．はじめに

ナショナルコレクションを統括する組織であるプラントヘリテージ（Plant Heritage=NCCPG: National Council for the Conservation of Plants and Gardens）は、イギリス国内 38 地域のグループの活動により成り立っている。その中でもデボングループは最大規模の約 400 人の会員が所属し、40 以上のナショナルコレクションを所有する活発な活動を行うグループのひとつである（表１）。

2015 年 7 月 9 日 15：00 ～ 17：00、RHS ローズムアガーデン内のイベントビルディングにおいて、デボングループのコレクションホルダーとナショナルコレクションの取り組みや、現状などの意見交換をした。参加人数は約 40 名。うちデボングループからは 11 種類のホルダー 15 名（表２）と関係者若干名、植物園協会員 18 名であった。

会場内にはデボングループが所有する 40 以上のナショナルコレクションのうち、15 の種類についての説明パネルがずらりとならんでおり、会談を盛り立てた（図１）。

イギリスといえばアフタヌーンティーが有名だが、特にデボン州特産のクロテッドクリームを使った様式は「デボンクリームティー」と呼ばれる。手作りのデボンクリームティーをいただきながら、和気あいあいとした雰囲気のなかでの意見交換会となった（図２，３）。



図１　美しく仕上げられたパネルや書籍など．



図２　デボングループの方が用意してくれた、デボンクリームティー．

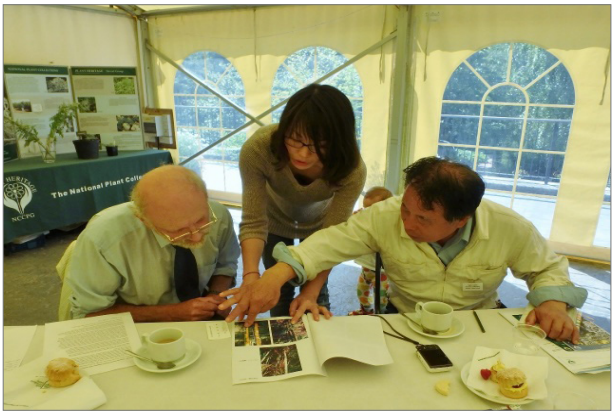


図３　竹類のコレクションについて尋ねる佐竹隊員（右）。中央はウェブスター夫人の香奈さん．

表１　デボングループのコレクションリスト．

Agapanthus (Pine Cottage cvs.)	*Jovibarba heuffelii* cvs.
Allium schoenoprasum & *tuberosum*	*Jovibarba* ssp.
Alnus	*Leucanthemum x superbum (Chrysanthemum maximum)*
Altermisia	*Lupinus* (Westcountry Lupin cvs.)
Astilbe	*Melissa*
Azara	*Mentha*
Betula	*Monarda*
Buddleja davidii cvs. & hybrids	*Nepeta*
Buddleja spp.	*Nerine sarniensis* cvs.
Carya	*Nothofagus*
Cornus (excl. *persicum* cvs.)	*Phlomis*
Cyclamen (excl. *persicum* cvs.)	*Pittosporum*
Dierama spp.	*Primula sieboldii* Japanese cvs.
Eucryphia	*Quercus*
Fuchsia (hardy spp. & cvs.)	*Rhodohypoxis* & *x Rhodoxis*
Gentiana autumn flowering	*Ruscus*
Hesperantha coccinea cvs. *(Schizostylis)*	*Scadoxus*
Hosta (modern hybrids)	*Sempervium* cvs.
Ilex	*Semperbium* spp.
Iris ensata	*Tulbaghia* spp. & subsp.
Iris fulva, pseudacorus, versicolor, virginica & *laevigata* cvs.	*Veltheimia bracteata* and forms

表２　参加者名簿．

Chris Birchal		National Collection Holder: *Rhodohypoxis* & *x Rhodoxis*
Lorraine Birchall		National Collection Holder: *Rhodohypoxis* & *x Rhodoxis*
Glen Carter		National Collection Holder: *Iris fulva, pseudacorus, versicolor, virginica* & *laevigata*
John Carter	Vice President Plant Heritage Devon Group	National Collection Holder: *Iris fulva, pseudacorus, versicolor, virginica* & *laevigata*
Michael Hickson	Vice President Plant Heritage Devon Group	
Jonathan Hutchinson		National Collection Holder: *Scadoxus, Veltheimia bracteata* and forms
Jo Hynes		National Collection Holder: *Cyclamen* (excl. *persicum* cvs.)
Penny Jones		National Collection Holder: *Primula sieboldii* Japanese cvs.
Malcolm Pharaoh		National Collection Holder: *Astilbe, Iris ensata, Tulbaghia* spp. & subsp.
Diane Rowe	Vice President Plant Heritage Devon Group	National Collection Holder: *Dierama* spp.
Beth Smith		National Collection Holder: *Phlomis*
Vcaroline Stone	Secretary Plant Heritage Devon Group	National Collection Holder: Double primroses: *Primula vulgaris* hybrids and cultivars
Dr John Twibell	Chairman Plant Heritage Devon Group	National Collection Holder: *Artemisia*
Jonathan Webster	Vice Chair Plant Heritage Plant Conservation Committee Curator RHS Rosemoor	National Collection Holder: *Cornus* (excl. *C. florida*), *Ilex*

2．会談および意見交換

運営委員長であるトゥイベル博士のあいさつの後、14 名のコレクションホルダーからそれぞれ自己紹介があった。参加者は 7 つのテーブルに分かれて（最後はバラバラ）、植物の品種や栽培についての話を交えながらナショナルコレクションについての意見交換を行った（図４，５）。



図４　コレクションホルダーの自己紹介．

デボングループについて

運営委員長のジョン・トゥイベル博士のあいさつ

デボン州はイギリスのなかでも多様な土壌や気候を有し、多くの種類の植物が古くから行き交う場所であるため、栽培品種の育種技術も発達した。それは 1830 年代に世界中でプラントハンティングを行っていた、ヴィーチ商会によるところが大きい。

デボングループは 1982 年、古い栽培品種を保存していくことを目的に設立され（プラントヘリテージは 1979 年に創設）、1989 年にはイギリスで最大のグループとなった。今日でもデボングループは 400 人以上の会員と、40 以上のナショナルコレクションを保有する最大規模の歴史あるグループである。グループ独自のニュースレターも年 3 回発行している。

グループはさらに 3 つの地域グループ（東部、北部、南西部）により形成されており、それぞれの地域での活動を行っている。デボングループが年間で行うプラントヘリテージのイベント（ランチ、フェアー、オープンガーデンなど）は合計で 20 回以上にもおよぶ。こういったイベントやオープンガーデンなどにより、ナショナルコレクションについての情報が広く知れ渡り、またそこでの収益が会を支えている。さらにグループではナショナルコレクションホルダーへの助成金援助なども行っている（図 6，7）。

デボングループの現状

秘書のキャロライン・ストーン氏

規模の大きなデボングループではイベントに参加する会員は、グループ全体の 1 割ほどにとどまっている。これは所属しているだけの会員がほとんどだが、園芸植物の保全を理解して会費によって支援していると考えることもできる（プラントヘリテージの年会費は 30 ポンド）。



図５　意見交換の様子．



図６　デボングループの歴史を綴った本を紹介するトゥイベル博士．



図７　ニュースレター。右部分が表紙で、左部分は会の使命が明記された裏表紙．

コレクションホルダーの情報

（1）ロドヒポキシス（*Rhodohypoxis*）、×ロドキシス（× *Rhodoxis*）：バーチャル夫妻

ロドヒポキシスの野生種と、×ロドキシスの交配種、約 140 品種のコレクションを 25 年以上にわたり収集、保有し、新品種を作出してきた。夫妻は Tale Valley Nursery という農園を経営し、2007 年にナショナルコレクションホルダーに認定された。近年､区別のつかない新品種の流通が増えているため、正確な栽培品種を保存していくのが課題だと話していた（図８）。

（2）水生アヤメ類栽培品種（*Iris fluva, I. pseudacorus, I. virginica, I. laevigata*）：カーター夫妻

近年、王立園芸協会（RHS）のローズムアガーデンに水生アヤメ類のコレクションを寄贈した。Rowden Gardens というナーセリーを 1985 年から経営し、2001 年にナショナルコレクションホルダーに認定された。現在カーター氏は、デボングループの名誉会長職に就いている（種類については RHS ローズムア・ガーデンの項参照）。

（3）スカドクサス属（*Scadoxus*）：ジョナサン・ハッチンソン氏

南アフリカ原産の球根類のなかでも、花も葉も楽しめるスカドクサスを中心に収集する。スカドクサスは野生種 8 種を含む 45 系統を所有している。自生地へ野生種を探しに行き、マイクロプロパゲーションなどによる特別な交配種も作出し活動的。ローズムアガーデンの庭園リーダーでもある。

色々な話を聞いたなかで、日本にはクンシラン協会があるが、スカドクサスのコレクターや愛好会はあるのかと気にしていたのが印象的であった（図９）。

（4）シクラメン属（*Cyclamen*）：ジョー・ハイネス氏

1980 年代初期にシクラメンの収集をはじめ、現在は 22 種の野生種と交配種を管理する（コレクションの詳細は p. 62 参照）（図 10）。



図８　ロドヒポキシスのパネルと花の展示．



図９　スカドクサスのパネルと植物 (右) ．



図 10　シクラメンのパネル。説明も詳しい．



図 11　サクラソウについて意見交換する鳥居隊員（左）、大木隊員（中）、ペニーさん（右）.



図 12　アスチルベのパネル。園とコレクションの紹介もある.



図 13　フロミス（左）、サクラソウ（中）、ディエラマ（右）の紹介パネルと切り花.

（5）サクラソウの栽培品種（*Primula sieboldii* Japanese cvs.）：ペニー・ジョーンズ氏

イギリスではプリムラではオーリキュラが絶大的な人気を誇るが、ペニーさんは日本のサクラソウ栽培品種にひかれ、多くのイギリス人にその魅力を知ってもらうため活動している。

会談の最初から最後まで、鳥居隊員と熱心に意見交換をされていた。品評会でサクラソウを出品した際に賞を逃したが、その理由は花が下向きであり失敗作だと思われたから。サクラソウの花とは下向きに咲くものだということを熱心に説明し、今では理解してもらえた。少しずつ人気も出ている。ペニーさんは八重咲きの品種に興味があり、豪華な花に美意識を持っているようだ。鳥居隊員はサクラソウの八重咲きは固定度合が低いため、日本では興味を持ってもらえないということを説明された（図 11）。

（6）アスチルベ属（*Astilbe*）、ハナショウブ（*Iris ensata*）、ツルバギア属（*Tulbaghia*）：マルコム・ファラオ氏

ファラオ氏の勤めていた Marwood Hill Gardens には 40 年前、12 品種のアスチルベしかなかったが、将来に向けた品種保存を目的として収集を進めた結果、ホルダーに認定された。ドイツ人の育種家が日本や中国から野生種 4 種を導入し、それをもとに数多くの栽培品種が誕生した。今では 170 品種のコレクションを保有する（詳細は p. 56 参照）（図 12）。

（7）ディエラマ属（*Dierama*）：ディアン・ロウ氏

南アフリカに約 44 種の野生種があり、観察や比較、同定のため、可能な限りそれぞれの種の複数の異なる系統を収集している。ディアンさんはデボングループに 3 名いる名誉会長の一人でもある。この日は素敵なディエラマの切り花を見せてくれた（図 13）。

（8）フロミス属（*Phlomis*）：ベス・スミス氏

イギリスのガーデンにおいて多用されるフロミス。ホルダーのベスさんは、コレクションの魅力を伝えるため写真入りのカードを配布するなど、一生懸命宣伝する様子が印象的であった（図 13）。

（9）八重咲きプリムラ交配種（*Primula vulgaris*_hyb.）：キャロライン・ストーン氏

デボングループ秘書のキャロラインさんのコレクションは八重咲きのプリムラ。現在 85 品種を保有し、もっとも古いものは 400 年前の品種であるということに驚かされた。ホルダーに認定されたのは昨年。デボングループの秘書を務め、グループの事務局として熱心に活動する。

（10）ヨモギ属（*Artemisia*）：ジョン・トゥイベル博士

1980 年代初期にヨモギ属の収集をはじめ、1987 年にナショナルコレクションに認定された。花は地味だが葉の香りに魅力を持ったそうだ。1999 年には科学的なコレクションとして認められ、現在ではおよそ 400 系統のコレクションを保有する。デボングループの運営委員長。

ヨモギ属はデボングループ内でも、その地味さからあまり話題に上がらないコレクションのようだが、今回多くの日本メンバーと会話を交わしていた。食材としてのヨモギについて、草餅の作り方やヨモギが使われる理由などを説明した隊員からは、博士は日本の食文化に深く根ざしている点に興味を示していたということを教えてくれた。キタダケヨモギの栽培法に困っていた博士の相談に乗った隊員もいた（図 14，15）。

（11）ミズキ属（*Cornus*）、モチノキ属（*Ilex*）：ジョナサン・ウェブスター氏

詳細はコレクションホルダーである RHS ローズムアガーデンの報告（p. 66）を参照。



図 14　アルテミシアのパネルとヨモギの展示．



図 15　アルテミシア栽培について意見交換中．

3．所感

2 時間ほどの意見交換はあっという間に時間が過ぎた。会話のきっかけとして、植物の栽培についての質問を持ちかけてしまうと、興味深い話が次々と飛び出し、ナショナルコレクション保全の話題など聞き忘れてしまうほど、楽しい時間を過ごした。どのホルダーも誇りを持ち、植物の魅力を熱く語っている姿が印象的であり、両グループの交友も深まったと思う。

コレクションホルダーとして多くの人に植物の魅力を広く知ってもらうため、オープンガーデンやイベントへの出品なども積極的にしているようで、その情熱と行動力には脱帽した。情報と植物を公開し、より多くの人々が知識を共有することで保存につなげる、これこそがイギリスならではの栽培品種の保全・保護なのだということを強く感じた。

日本はどちらかといえば閉鎖的なコレクターが多く、また栽培技術面などの継承も仲間内に限られている印象を受ける。気づけば時すでに遅しという園芸植物も多い。イギリスのように、植物そのものの魅力や正確な情報を外へ向けて発信する熱心なコレクターが日本にも根付くといいが、なかなかそうもいかないのが実情であろう。また、コレクターの高齢化という課題も残されている。イギリスも同じ問題を抱えているようだが、日本の状況はさらに深刻である。以上から、日本の植物園が有用植物・園芸植物のコレクションを取りまとめるシステムの構築は急務であると感じた。一方で時代を担う子供の教育も合わせて考えなければならない。

日本におけるナショナルコレクションを考えるためにも、今回の会談は色々と考えさせられた有意義なものとなった。

なお、本会談の様子はデボングループのホームページにも掲載された。

http://www.plantheritagedevon.org.uk/news/item/108-the-association-of-japanese-botanic-gardens-vist

ナショナルコレクション・サリー会談

咲くやこの花館

大木宜子

今回の海外事情調査の主な目的はイギリスで行われているナショナルコレクション（National Plant Collection：以下 NPC と略記）を視察することであった。これは栽培植物の保全活動をイギリスとアイルランドで行っているプラントヘリテージ（Plant Heritage）という団体の取組の一つである。

ナショナルコレクションとは個人または組織が管理する特定の植物コレクションのことを指し、明確に決められたテーマの植物を記録（document）、発展（develop）、保存（conserve）し、包括的なコレクションを将来のために残していく取組である。

今回の調査は、二日目に訪れたハンプトンコートフラワーショーのプラントヘリテージの展示場所でそれぞれ保全管理と植物保全を担当しているマーシー・モリスさんとソフィ・イレグィルさんによる説明を受けることから始まった。そして調査最終日のサリー会談で改めてナショナルコレクションの取組についてお二人にお話しを伺う事ができた（図１，２）。サリー会談は質疑応答方式で行われた。この会談の中で最も重要と思われ、また印象に残ったいくつかの点を以下にまとめた。



図１　サリー会談 の様子.



図２　プラントヘリテージのモリスさん（右端）とイレグィルさん（右２番目）.

NPC の基準の重要性

誰でもナショナルコレクションを持って、コレクションホルダー（collection holder）になることは可能だが、様々な規則がある。まずプラントヘリテージの会員になる必要があり、コレクションの一般公開が義務でもある。そしてナショナルコレクションに登録されるためには植物保全委員会（Plant Conservation Committee）によって定められた基準を満たさなければならない。この基準は取組の複雑化をさけるため、どのケースにも適用され、例外はない。最初に応募者が植物とテーマを選ぶ必要がある。テーマは歴史的（historical）、園芸的（horticultural）と分類的（reference）に分けられている。新しい基準が 2014 年 1 月に導入されてから、テーマを明瞭に決めることがさらに重要視されるようになった。登録のために大量の植物を収集したが、基準を満たすことができずに登録ができないという事態も、正式な登録の前にテーマを決めておくことによって防ぐことができる。また、明確なテーマを選べるようになったことで、植物を置くスペースが限られた場合でも小さなナショナルコレクションを持つことが可能になった。正式な登録には時間がかかるが、基準はナショナルコレクションの基礎にあたるため、この取組では最も重要な部分であることが分かった。

コレクションホルダーが植物を管理できなくなった場合

コレクションホルダーの多くが高齢であると同時に、明確な解決策がないため、これは取組の中でも大きな問題の一つである。管理できなくなった時にコレクションをどうするか決めておくのはホルダーの責任であるため、提案することはできるものの、プラントヘリテージだけで勝手に判断することはできない。基本的にはコレクションを管理できる植物園、コレクター、ナーサリーなどをホルダーが探して、同意を得てしておく必要がある。また、樹木など移動が困難なコレクションもあるため、普段の管理方法も非常に重要になってくる。親族などに譲り渡されることもあるが、管理がきちんと継続されない場合も少なくない。管理することが困難なためコレクションが売却されてしまうこともあるが、多くは市場価値がないため、貴重な植物が安値で取引され、消滅してしまう危険性がある。そして、植物園で保管されているナショナルコレクションだから保全が保障されているとは限らない現状がある。例えば植物園の園長が愛好する植物のコレクションを在職中に始めても、園長が変わった後に必ずしも管理がきちんと継続されるわけではないからだ。これは難しい問題ではあるが、いかにナショナルコレクションを保全していくかはこの取組の目的と深く関わるため、適切な解決策が求められる。

連携の難しさ

ナショナルコレクションの登録を目指す時に重要な役割を果たすのが、プラントヘリテージの地域グループから指名されたコーディネーター（National Collection Coordinators）である。彼らは登録に向けて初期の段階からコレクションホルダーのサポートをし、プラントヘリテージに報告するため、ホルダーとプラントヘリテージは連携ができている。その一方でホルダーと地域グループ間の繋がりは弱く、この取組の課題の一つである。地域グループはボランティアが主体になって、チャリティーイベントを企画するなどの活動をしている。人数が多くて活発なグループもあればそうでないグル―プもあるなど、地域によって差がある。植物が好きで参加する人ももちろんいるが、社交やグループに参加することを目的としてボランティアする人も少なくはない。従って、同じ地域のプラントヘリテージの会員でありながら、コレクションホルダーと地域グループ間の繋がりが弱い、または全くない場合もある。同じ目的を持ち、それに向かって連携して今後の活動をさらに広めていくには改善が必要である。

ナショナルコレクションは貴重な栽培植物を保全していくためには欠かせない取組であり、重要性は高い。その一方で問題点もあるため、この取組を継続そして拡大していくためには、これまで述べた課題を改善していく必要があることも分かった。

Ⅲ. ナショナルコレクションホルダー視察

ハンプトンコートパレスフラワーショー

六甲高山植物園

三津山咲子

フラワーショーの概要

7月5日のショーの最終日に訪れた。最後には展示品の植物も売るということで、25周年記念の看板が掲げられたゲートを入ってすぐから、熱気に満ちて人があふれていた（図1）。会場に入ってすぐのところは、Plant Villageと名づけられ、ナーセリーの苗の販売のテントがずらりと並んでおり（図2）、テントの前にはそれぞれ凝ったディスプレイをしていた。会場で貸し出している、購入した植物を運ぶためのプラスチック製の大きなカートにたくさんの植物を入れてゴロゴロひいているのが印象に残った（図3）。

会場は大きく3つの区域に分かれていた。1つ目はGLOWゾーンで、Plant Heritage（ナショナルコレクションをまとめる組織）とFloral Marquee（ナーセリーや団体等）の大テントでの展示があり、植物を育てる楽しみをよびさましていた。

2つ目はINSPIREゾーンで、園芸の新しいアイデアを見せていた。自転車置き場の植栽（図4）や、ごみ箱の周りを美しく植栽する方法など、真似をしたいアイデアがいっぱいだった。RHSが推進している学校の庭づくりの一環で、かかしのコンテストがあり、巨大なかかしの周りにかわいいかかしが飾られていた（図5）。子供のころから園芸に親しむようにいろいろな方法をとっているのだろう。バラの祭りと名づけられたテントの中は、満開のバラの展示で匂いもよく華やかだった。ショーガーデンもいくつもあり、植物の使い方やデザインのアイデアを熱心に見ている人が多かった（図6）。ガーデングッズもあらゆるものが販売されていた。

3つ目はFEASTゾーンで、果物やハーブや野菜の苗の販売や食べ物の販売、キッチンガーデンや畑のディスプレイがあった。



図1　ゲート．



図2　苗の販売のテント．



図３　植物を入れるカート．



図５　かかし．



図４　自転車置き場の植栽．



図６　ショーガーデン．

Plant Heritage のブース

このショーを訪れたのは、イギリス事情調査の初日だった。今回の調査の目的であるナショナルコレクションのあらましを知るため Plant　Heritage のブースで、職員から説明を受けた。ナショナルコレクションは、Plant　Heritage によって運営されており、前身の NCCPG（National Council for the Conservation of Plants and Gardens）から 2009 年に名前を変更している。

Plant　Heritage の本部はウィズリーガーデンにあり、地域ごとに事務所がある。ナショナルコレクションに認定されるのは原種ばかりではなく園芸品種もあり、今ではナショナルコレクションでしか見ることのできなくなった希少園芸品種も多い。植物を文化遺産としてとらえ、その保全に努めている。運営資金の 40％は 4,000 人の会員の会費でまかなっている。ナショナルコレクションには、審査に合格しないと認定されないなどの説明を受けて、出展しているナショナルコレクションを案内してもらった（図７）。

後日、自宅にも訪問したジョナサン・ホガースさんは、初めての展示で、金メダルと Plant Heritage の中の最優秀展示賞を受賞して大喜びの様子だった（図８）。彼の小型およびミニチュア系ギボウシ属のコレクションが 2 年前にナショナルコレクションとして認定されたばかりだった。展示は、鉢植えと自生地風に苔と石を使ったものを組み合わせていた。土の配合なども書いた写真入りの栽培法も展示していた。このコーナーは大人気とのことだった。苗の販売もあった（図９）。

ブースの中には、ほかにも *Calendula*（キンセンカ属）、*Hypericum*（オトギリソウ属）、*Lobelia*（ミゾカクシ属）や *Streptocarpus*（ストレプトカーパス属）や *Mandevilla*（マンデビラ属）などのナショナルコレクションを展示していて、それぞれのコレクションホルダーが説明していた。個人の趣味家もいれば、育種家、ナーセリーの従業員、またはブ

リストル動物園というのもあった。ナショナルコレクションに認定されるのは、植物園や研究機関のような組織ばかりではなく、またアマチュアも多いことが分かった。栽培技術については、彼らのほうが上であることも多いからだろう。皆一様に、コレクションしている植物に対する熱い思いを語っていた。新品種をつくる苦労やその植物の特徴や栽培法、収集法、素晴らしさを、いきいきと話していたのが印象的だった。

また、種子を販売しているコーナーもあった。種子の販売は、組織を運営するための重要な資金源になっているとのことだった。



図７　Plant Heritage の職員との記念撮影（高橋康夫撮影）.



図８　ジョナサン・ホガースさん .



図９　小型ギボウシの展示 .

Floral Marquee　（植物展示大テント）

広大なテントの中で、100 近くのナーセリーが展示と販売をしていた（図 10）。趣向を凝らした展示は、購買意欲をそそった。大型の *Allium*（ネギ属）をずらりと並べたものなど、大がかりな展示だった。皆、熱心に見て欲しい植物を物色していた。高山植物（図 11）やロックガーデン向きの植物あり、盆栽あり、サラセニアあり、シャクナゲありとあらゆる好みにこたえられるよう、多種の植物であふれていた（図 12）。新品種やまだ名前のついてない植物もあった。

イギリスのナーセリーめぐりをするには、かなりの日数がかかるだろうが、このような機会に選りすぐりの 100 近くのナーセリーめぐりが一度にできるということは、夢のようだった。この場所だけで 1 日ゆっくり見てまわりたかった。

1 週間のショーの間には、かなりの植物が販売されるだろう。



図 10　Floral Marquee ではナーセリーによる展示が行われていた .



図 11　高山植物の展示．



図 12　*Rhodohypoxis*（アッツザクラ属）の展示．

所感

飲食のブースもたくさんあり、来場者は芝生の上で食べたり飲んだりしながらのんびりと思い思いに過ごしていた（図 13，14）。25 周年の記念のフラワーショーということもあり、全体的に祝祭ムードが強かった。高齢者が多いのは、日本の園芸事情と同じだと思った。ショーの終わりころには持ちきれないほどの植物を買って満足して帰っている人をたくさん見た（図 15）。持ちきれない人は、若いポーターに駐車場まで運んでもらっていた。

イギリスでも園芸人口の減少や高齢化を憂えていたが、日本よりは園芸に対する思いが強く、ナショナルコレクションの推進をはじめ、園芸に携わっている人や栽培している植物の層が厚いと感じた。園芸を愛する人のための祭典は、活気に満ちあふれ、皆が心から楽しんでいる様子が伝わった。



図 13　会場の様子．



図 15　たくさん植物を買って帰る人たち．



図 14　のんびり過ごす人．

ハンプトンコートパレスガーデンズ

咲くやこの花館

大木宜子



図１　オランダ式庭園のトピアリー．



図２　ローワーオランジェリー．

７月５日、調査二日目の午後はハンプトンコートパレスガーデンズ（Hampton Court Palace Gardens）を Tree and Wildlife Officer のニコラス・ガーバットさんが案内してくれた。総面積が約 332 ヘクタールと広いため、ナショナルコレクション（National Plant Collection）を中心とした見学になった。園名の通りここは旧王宮であったため、ウィリアム３世やメアリー２世など、王族と深い関わりがある場所である。

見学は宮殿の南側にあるプリヴィガーデン（Privy Garden）から始まった。ここは元々ヘンリー８世のためのプライベートガーデンとして 1530 ～ 1538 年の間に作られた。時代の流れと共に姿を変えてきた庭園だが、1986 年にあった火災の被害を契機に、ウィリアム３世の時代（1702 年）のデザインに戻された。このオランダ式庭園のトピアリーが印象的だった（図１）。

引き続き宮殿の南側を進み、ローワーオランジェリー（Lower Orangery）へ移動した。ここもプリヴィガーデンと同様に時代と共に姿を変えてきた場所である（図２）。1689 年から共同統治者になったウィリアム３世とメアリー２世は様々な物を収集することが趣味だったが、特に異国の植物が好きだったメアリー２世は世界中の植物をコレクションし、南側にある庭の中でも最も暖かいローワーオランジェリーを保管場所として選んで３棟の温室を建てた。温室はメアリー２世の死後、ウィリアム３世によって解体され、18 世紀初期に後に美術館として使われるようになるローワーオランジェリーが再建された。メアリー２世が収集した植物は年々少なくなり、第一次世界大戦のころに消滅してしまったが、プリヴィガーデンの再建をきっかけに収集が始められた。現在はメアリー２世の熱帯植物コレクション（Queen Mary II Exotics Collection; 215 species）としてナショナルコレクションに指定さ



図３　メアリー２世の熱帯植物コレクション．



図４　鉢のレプリカ．



図５　グレートヴァイン．

れ、ローワーオランジェリーの外庭に展示されている。展示植物は季節ごとに変わり、使っている鉢も、メアリー２世が植物の展示のためにわざわざ作らせた鉢のレプリカを使用するなど、300 年前の景色を再現している（図３，４）。

次はハンプトンコートパレスガーデンズの中でも多くの観光客が訪れるグレートヴァイン（Great Vine）を見に行った（図５）。このブドウの樹は世界で最も古く、大きいつる性植物だと言われており、大きさに関しては、ギネス世界記録にも認定されている。ブドウの苗は 1768 年頃に「万能庭師」ブラウン（‘capability’ Brown）によって植えられたとされる。つるは温室の中にあるが、根は屋外に伸びており、他の植物との水や栄養の競争を避けるため、何も植栽されていない（図６）。昔は王族のために育てられ収穫されていたブドウだが、現在は夏の終わりから秋の始めにかけて収穫され、来園した観光客に販売されている。

最後にバックヤードを見学した。バックヤードには、ナショナルコレクションのメアリー２世の熱帯植物コレクション（図７）、ムラサキ科のヘリオトロープ（*Heliotropium*：野生種２、栽培品種 27）、クマツヅラ科のランタナ（*Lantana*：野生種１、栽培品種 37）に加えてボーダーガーデンに使われる植物などが管理されていた。諸説はあるが、ハンプトンコートパレスガーデンズのボーダーガーデンは世界で最も長いとも言われている。ナショナルコレクションを中心とした見学ではあったが、イギリスの庭が最善な時期に訪れることができたので、美しい景色も堪能できた（図８）。



図６　屋外にあるグレートヴァインの根．



図７　メアリー２世の熱帯植物コレクションのナショナルコレクション認定ラベル.



図８　世界一長いとされるボーダーガーデン．

王立キュー植物園

宇治市植物公園

鈴木茂登子

はじめに

2015 年の海外事情調査はイギリスにおけるナショナルコレクションの調査を目的とし、16 箇所のガーデンやナーセリー、大学などの視察を行った。

イギリスにおける植物遺伝資源の保存者であるナショナルコレクションホルダー（特定の植物をコレクションして保持している個人または営利、非営利団体）の実態や、それを組織している団体（プラントヘリテージ）の活動を知ることで、日本における植物遺伝資源の保存を検討するうえで有意義な機会となった。

英国王立キュー植物園を訪ね、園芸部のディレクターであるリチャード・バーリン氏に園内を案内していただいた。

園の保有しているナショナルコレクションは視察することはできなかったため、ここでは最先端の植物多様性の研究と保全を行っているバックヤードと標本室について報告する。



図１　エリザベスゲート．



図２　園内案内図．

１．英国王立キュー植物園の施設

英国王立キュー植物園はロンドン郊外、テムズ川沿いの南西部に位置し、120 ヘクタールある敷地には 1 万 4000 本の樹木が植栽されている。植物数は約 4 万種、乾燥標本約 700 万種を保有し、この場所に来れば世界の 10 分の 1 の植物を堪能することができる。

園内では、最古の建造物であるキューパレス（図 3）やヴィクトリア朝時代の最先端技術を駆使して出来上がった温室パームハウス（図 4）、訪問時は工事中であったがテンペレートハウス（図 5）が有名である。

パームハウスには主にヤシ類をはじめ熱帯性の気候に生育する植物が集められており、熱帯雨林の環境が保たれている（図 6）。テンペレートハウスはパームハウスの 2 倍以上の大きさを誇る温室であり、主に温帯気候で生育する植物を収集しており、世界最大のチリヤシ (*Jubaea chilensis*) を観賞することができる。

また、園内には上記以外にも温室が存在する。1 つは 10 種類の異なる気候帯に自生している植物を散策しながら楽しむことができるプリンセス・オブ・ウェールズ・コンサーバトリーである（図 7）。コンピューターで環境が制御されている温室内ではスマトラ島に自生するショクダイオオコンニャク (*Amorphophallus titanum*）や世界一のランのコレクションが展示されている。2 つ目はキュー植物園を語る中で欠かすことのできないオオオニバス（*Victoria amazonica*）やさまざまなスイレンが植栽されているウォーターリリーハウスである。3 つ目は高山植物を展示しているデイヴィーズアルパインハウスである（図 8）。野外には、ロックガーデン（図 9）やバンブーガーデン、ローズガーデン（図 10）、グラスガーデン（図 11）、シャクナゲの谷、分類園（図 12) などのさまざまなガーデンがあり、季節に応じて美しく咲き誇り、人々を魅了する。木の高さほどの上空を人が歩ける展望台（Rhizotron and Xstrata Treetop Walkway）もあり、そこではまるで鳥になった気分を体感できる。

他にも、高さ 50 メートル近くある中国様式建築物のパゴダ（図 13）、日本庭園の中にある京都西本願寺勅使門のレプリカ（図 14）、美術館、博物館、図書館、標本室、実験室、遊具施設や教育施設などなどがあり、植物を介してなにかアクションを起こしたいときは、個人も家族連れも、老いも若きもすべての人が満足できる場所となっている。



図４　パームハウス．



図３　キューパレス．



図５　テンペレートハウス．



図６　パームハウスのヤシ類．



図７　プリンセス・オブ・ウェールズ・コンサーバトリー．

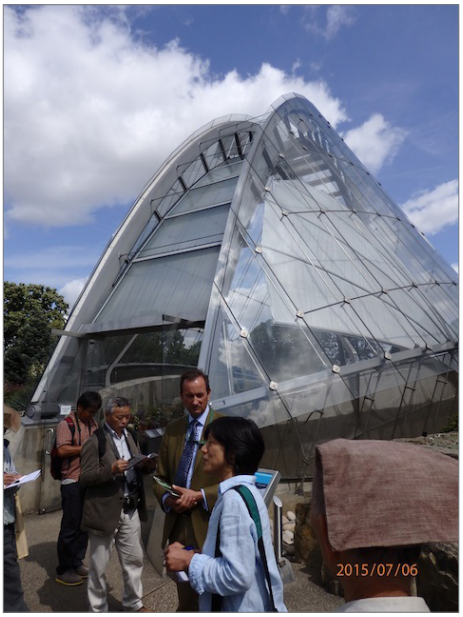


図８　デイヴィーズアルパインハウス．



図９　ロックガーデン．



図 10　ローズガーデン．



図 11　グラスガーデン．



図 12　分類園．



図 13　中国様式のパゴダ．



図 14　京都西本願寺勅使門のレプリカ．

2．キュー植物園の置かれている状況

園で就労する職員は姉妹園を合わせて約 700 人おり、本園には約 500 人が勤務している。そのうち、約 150 人が研究員である。但し、国からの大幅な予算削減があり研究員の人数は以前の半数になったと伺った（図 15）。

そのような予算削減の影響は園内の植栽にも見ることができた。通常は一年草で彩られる Broad Walk であるが、「一年草花壇」は年に 2 回（春、秋）の植替えが生じるため、宿根草をメインとする「ボーダー花壇」に植栽デザインを変更していた。

分類園においても、敷地の半分を野菜畑に変更し、ここで収穫した野菜を使って、英国で人気のある料理番組の収録を行うという。個人的にはとても驚いたが、この効果は大きくとても好評であると仰っていた（図 16）。

また、ロイヤルパレスの近くではイベントで使用するコンサート会場の設営も行っていた（図 17）。リチャード氏によると入園者数を増やすためにコンサートなどのイベントやさまざまな集客企画をおこない、キュー植物園の普及活動を行っているという。園の存続のためには、より多くの市民に利用していただき、市民の理解を得て、予算を獲得する必要がある。

「他園でも同じことをしているところがあるので集客は大変です。広報活動に力を入れている。」と仰っており「芝生が傷むのですが」とつぶやいておられた。

世界の植物園をリードするキュー植物園でさえ、日本の植物園と問題と同じ問題を抱えている現状を真摯に受け止め、植物園としての本筋をおさえながらも次世代につなげるためには今までの概念から脱却する勇気も必要であると感じた。



図 15　リチャード氏から説明を受ける．



図 16　敷地の半分を野菜畑に変えた分類園 .



図 17　コンサート会場の設営 .

3．バックヤード

キュー植物園では、44,000 種の植物を保全、研究、管理している。案内されたバックヤードには、熱帯性の植物、温帯性の植物など 21 種類の環境が異なった植物が保存、管理されている (図 18)。特にランは世界一の保有数をほこり、バックヤード内でも 5 部屋はランで占められている（図 19)。各部屋の扉には部屋内の気候帯や栽培環境等の情報が書かれたラベルが表示されており、部屋ごとに適した植物が管理されている（図 20)。廊下も室内もすべて衛生的で管理が行き届いている印象を受けた。

ラン室ではコモロ諸島の固有種で、すでに現地では絶滅しているラン (*Bulbophyllum coriophorum*) を例にあげてどのように保全をしているのかを教えていただいた（図 21)。キュー植物園では、種子保存だけでなく、できる限り生きたままで個体を維持していると伺った。生きた個体を維持することで、現地とは異なった環境での栽培方法をはじめ、植物の状態を記録することが可能となり、栽培のマニュアル化にとても重要である。さらに、このような活動を一般の方に知っていただくという目的もある。このように統合的に保存していくことが保全には重要であると教えていただいた。

廊下ではアロエ・スザンナエ (*Aloe suzannae*) を見せていただいた（図 22)。マダガスカル島の固有種で長年標本でしか存在を確認していなかったが、島を調査したところ 5 個体のみ生存が確認できた。現在はキュー植物園で増殖し保存を行っている。ポリネーターなど環境条件の問題はあるが、ゆくゆくは現地に復帰させるよう試みている。

別の部屋では温帯性の植物を管理しているレベッカ氏にセントヘレナ島の固有種であるアオイ科の常緑低木である *Trochetiopsis ebenus* を増殖、管理しているところを見せていただいた。増殖前は絶滅危惧種であったこの種も今では現地に植え戻されている。当初は現地より挿し穂の状態でキュー植物園に送られてきた。そこから園内で繁殖と開花させ、その後種子を採取することに成功した。その種子から苗木を作り現地へ復帰させた（図 23)。レベッカ氏は遺伝子の多様性を保存することとは歴史を維持することであり、このような活動を植物園で行うことはとても大切であると言っていた。

実際に植物園でされている保全活動を視察し、まさに現在進行形である状態を肌で感じた。未来につながる資源をいつか、だれかがではなく今繋げていかなくてはいけない事に焦りを感じた。限られた時間の中で保全の効率化、組織化の構築がいそがれる。「覆水盆に返らず」を多くの方に実感していただく必要があると感じた。



図 18　バックヤード温室 .



図 21　ランの保全について説明を受ける .



図 19　ランの栽培室 .



図 22　アロエ・スザンナエの説明を受ける .

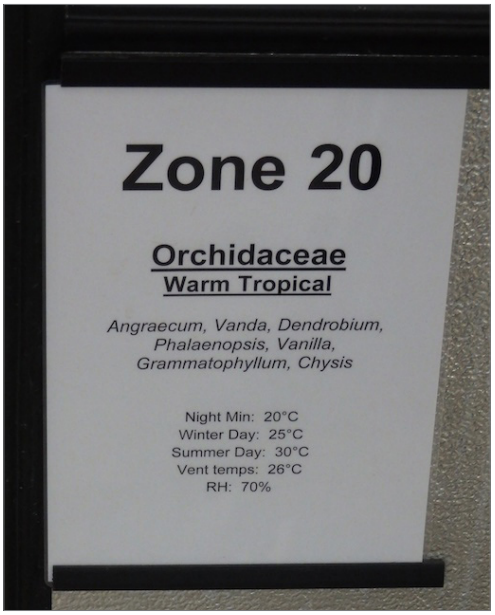


図 20　栽培環境が書かれたラベル .



図 23　セントヘレナ島の固有種 *Trochetiopsis ebenus* .

4．バーバリウム

キュー植物園は約 700 万点の乾燥植物標本（内タイプ標本は 30 万点）を保有している。また標本以外にも有用植物を利用した製品などを含む関連資料や木片などの資料も保持している。イギリスでは有用植物学が学問として成り立っており、製品などの関連資料からは植物がどのように利用されるのかを知ることができる（図 24）。

最初に案内された標本室は建築当初から使用している建物で 3 階立ての吹き抜けになっており、階をつなぐ螺旋階段はパームハウスにあるものと同じ構造である（図 25）。当時はガス燈が照明であったため、できるだけ使用しないようにガラスを多く取り入れた造りになっている。余談ではあるが、刑務所と同じ造りだそうだ。

植物は科ごとに整理されており、見学した棟ではキク科とマメ科が管理されていた。毎年増加する標本にあわせて標本室も増築される。収容量から計算して約 30 年ごとに計画されている。増築されるごとに棟は改良が加えられ、3 階が 4 階になり、最も高い棚まで手が届きやすくなった。1830 年からは収納扉は金属製になり少しずつ変化している。

また、標本室では標本につく虫等の表示も行っている（図 26）。 管理者の理解を助けるためである。虫による被害や保存による劣化を防ぐために室内の温度管理を行っている。さらに、防虫対策として標本の冷却処理を行っている。-20℃の冷蔵庫に 3 日～ 4 日置くことで害虫を駆除する。AGP Ⅲの分類体系を取り入れた際に同時に全標本の冷却処理も行ったそうである。3 年の月日を費やしたと仰っていた。DNA 検査を行う研究所も併設され、保有している標本画像のデジタル化を早急に進め、整理を行うことが当面の課題である。



図 24　植物を材料とした製品について説明を受ける．



図 25　標本室の内部．



図 26　標本につく害虫の展示．

おわりに

イギリスが世界中から植物を収集したことには、1600 年代よりヨーロッパが行っていた植民地争いが背景にある。植民地化した国からは経済効果の高い植物（香辛料など）が発見されることが多く、その利用が多大な利益を自国にもたらしていた。その後、英蘭戦争に勝ったイギリスは、スペインやポルトガルが占めていた植民地化の主導権をにぎることとなり、経済効果の高い植物を探しに海外へ進出をしていった。この時代が、大英帝国の大航海時代である。この時ゴムノキのプランテーション化などでもたらされた利益は産業革命の原動力となり、カカオやコーヒー、バナナに砂糖、そして茶なども海外を開拓して得たものである。

さらに冷涼で貧相な植生しか持たないイギリスの土地が豊かな植生を人々に熱望させたことも大きな要因である。海外の目新しい植物を自国に導入させることはイギリスの国民を喜ばせた。そしてその最先端の技術を駆使してできた温室がパームハウスやテンペレートハウスである。

しかし、キュー植物園が他国では成しえなかった植物交換ネットワークを作り、植物を研究する機関を設立できたのは、ジョゼフ・バンクスをはじめ、初代園長ウイリアム・フッカーや 2 代目園長のジョセフ・フッカー、多くの研究者、さらに階級や国を超えて植物学に情熱を注いだ者がいたからに他ならない。この業績の積み重ねが今日の膨大な量の標本や保有植物に結果として現れている。どんな植物でも新しい薬品の開発や、製品の開発などに利用できるかもしれない未知の可能性を持っている。生物多様性の重要性はそこにあり、長い年月の中で蓄積された記録は私達の未来を救うかもしれない、欠くことのできない宝となっている。

キュー植物園が植物を収集し続ける目的は当初の目的とは変容したが、世界に担う役割はとても大きい。

見せていただいたさまざまな標本の中にはダーウィン氏が採集したものや、牧野富太郎氏の採集品もあった（図 27，28）。今もかわらない方法で標本の作製は受け継がれているが、保全にあたってはより多くの情報を残す必要がある。GPS 機能を利用した場所の書記やより多い採取時の情報などである。集められた標本は随時デジタル化され、その情報は世界中の誰もが利用し閲覧することができる。新しい植物の同定にはこの膨大な資料を照らし合わせて行っている。

今もキュー植物園は植物界の最先端を走り、リードしていることを実感した。

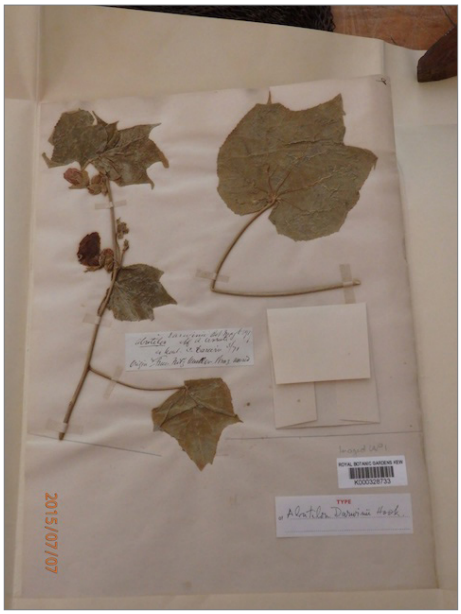


図 27　ダーウィン採集標本 .



図 28　牧野富太郎採集標本 .

レディング大学植物園

金沢大学・附属薬用植物園

佐々木陽平

レディング大学キャンパス内の植物園を見学する機会を得た。ナショナルコレクションのうち、ジギタリス（*Digitalis*）を担当している。



図１　植物園入り口．



図２　植物園地図．

沿革

レディング大学は 250 エーカーにも及ぶ総合大学である。そのうち 12 エーカーが植物園である（図１，２）。1979 年に担当教授が造園した、英国内 12 箇所の大学植物園の１つである。ミニュチュア・キューガーデンと言われたほど充実していた。当初は分類学研究目的に植物を収集していたが、その後、園芸学部ができ、園芸・造園目的にも植物を収集するようになった。このような経緯のもと、ジギタリス属植物を多品種保有していたことから、ジギタリスの種子を集めてほしいと協力された。これがナショナルコレクションとしての開始である。園の管理は専属職員１名とボランティア１名が担当している。

コレクションについて

ナショナルコレクションはラベルで色がわかるよう区別している（図３，４）。ナショナルコレクションは専属職員１名が管理している。複数名だと責任も分散し、維持できないため、１名に責任を持たせることが重要である。ジギタリスのコレクションを交雑から防ぎ、純粋に保つために 交雑が可能な種類はそれぞれ 300 m 離れたところに栽培している。一方、交雑しないことが明らかな、例えば英国自生種は近くに栽培している。ナッシュ・バッキンガーという地域グループが何年かに一度、しっかり管理されているか審査にきている。

意義

大学植物園としてナショナルコレクションを維持することは労力ばかりかかり、何か利点があるのか疑問であった。当然､彼らもそれを認識しており｢一般の植物園では、強力なネットワークがない限りナショナルコレクションの維持は難しいであろう。レディング大学でも維持は負担であることも事実である｡」と述べていた。しかしそれ以上に「大学植物園でナショナルコレクションを保有していることの利点は大きい。ナショナルコレクションを保有しているという魅力は大学内の人が考える以上のものである。すなわちナショナルコレクションを保有している植物園、ナショナルコレクションを保持する運営能力がある植物園という箔がついて判断される。レディング大学にはジギタリスのような魅力があるコレクションがあってよかった｡」と述べるほどのメリットがあることも事実であるようだ。日本の大学植物園でもメリットが投資する労力をうわまる形にすることが重要であることを考えさせられた。



図３　*Digitalis ferruginea* subsp. *ferruginea*．



図４　ジギタリス以外にも様々な植物が栽培されている．

ホガース邸　ミニュチュア・ホスタコレクション

金沢大学・附属薬用植物園

佐々木陽平



図１　ホガース邸正面から．



図２　ホガース邸のコレクション．

ホガース氏の私邸に訪問し、保有するホスタ・コレクションを見学する機会を得た。ホガース氏からはハンプトンコートでのフラワーショーでの プラントヘリテージ（Plant Heritage）コーナーでも詳細な説明を受けている。ここではホガース夫妻により、コレクションのホスタが認定されるに至る経緯などを調査することができた。

ホガース邸は表向きからは想像もできなかったが、裏庭に至までの通路、そして裏庭に所狭しとコレクションの鉢が並べられていた（図１，２）。

ホガース氏は約１年半前にナショナルコレクションに認定された。切っ掛けはホスタの別のコレクターの推薦によるものであった。ところが、その女性はホスタを地植えしていたが、ホガース氏は鉢植えという違いがあり、これが登録に時間を要する原因となった。

ナショナルコレクションに認定されるためには多くの基準がある。ところがホガース氏の鉢植えはその基準に適合しないものであった。そこでナショナルコレクションの認定基準をホガース氏の鉢植えが適合できるように変更できないか交渉し、１年を要した。ホガース氏が所有するホスタ・コレクションは約 200 種あるが、このうち 120 種を登録した（ここで「種」とは品種と野生種を合わせたもの）。

ナショナルコレクションの基準を変更することは難しい。その変更が他のコレクションにも影響を与えるためであり、他のコレクターと調整も必要である。ホガース氏の認定までの１年はこの調整期間であった。ナショナルコレクションとして登録された場合、特に個人の登録者の場合、そのコレクションを



図３　ホガース夫妻とホスタコレクション．

一般公開しなければならない、または一般公開ではなくても問い合わせがあった場合、公開しなければならないという取り決めがある。入園料に関する取り決めはなく、無料公開の人もいれば入園料をとってその収入を寄付する人もいる。

途中で雨が降り出し、ホガース邸に招き入れられた。手作りケーキをご馳走になった。

個人コレクターは様々な経緯で認定されているが、いずれも趣味の延長で運営している（図３）。このような形態が持続的に、また次の世代に上手に引き継いで行くことが重要であると考えさせられた。

サヴィルガーデン　The Savill Garden

富山県中央植物園

大原隆明

1. 来歴・概要

サヴィルガーデンはバークシャー州ウィンザー（ロンドンの西方約 30km）に位置し、エリザベス女王の公邸のひとつであるウィンザー城を取り囲む広大なウィンザー・グレートパーク（Windsor Great Park）の一角を占める広さ約 35 エーカー（14ha）の庭園である。1931 年にエリック・サヴィル卿（Sir Eric Savil）が作庭したことに端を発し、現在は王室が所有し、ロイヤル・ランドスケープ（The Loyal Landscape）が近隣のヴァリー・ガーデン（The Valley Gardens）などと共に管理を行っている。園内には見頃となる季節や環境などのテーマ別に分けられた多くのエリアがあり、世界中から収集された様々な植物が植栽されている（図 1）。最近では 2011 年のウィリアム王子の婚礼でここから多くの花を提供したことでも話題となった。

今回の調査では、サヴィルガーデンやヴァリーガーデンおよび周辺森林地域の管理総責任者であるマーク・フラナガン氏（Mark Flanagan）氏と、サヴィルガーデンの責任者であるハーベイ・ステフェン（Harvey Stephen）氏に案内いただいた（図 2）。



図 1　園内地図（ガイドブックから抜粋）.



図 2　案内いただいたマーク・フラナガン氏（左）とハーベイ・ステフェン氏（右）.

2. 管理および植栽の特徴

管理に携わる全スタッフは 15 名と少数であり、道路舗装やコンピューターのメンテナンスなど一部外注部分以外はほぼ全てを直営で管理しているとのことであった。同地の夏の最高気温は平均 22 ～ 23℃、冬の最低気温は平均－ 3℃で、年間雨量は 600 mmと冷涼少雨な気候であり、基本的には砂質土であり水はけが良すぎるために堆肥の投入や散水が欠かせないとのことであったが、実際に調査時にも園内の各所でスプリンクラーによる散水が行われていた。温度や湿度、土壌水分量、光などが異なる多様な環境ができるように設計されているのが大きな特徴であり、その多様性ゆえに多くの種類を植栽できるとのことであったが、植栽に当たっては、花色のみならず、葉色やテクスチャーなどにも配慮した組み合わせを重視しているとのことであった。

また、園内にはヨーロッパナラ（*Quercus robur*）をはじめとする巨樹が多いのも特徴的であった（図３）。これらの管理に当たっては最新の研究成果や技術を取り入れて、剪定などはあまり行わずにできるだけ自然の状態を活かしてサポートしているとのことであった。



図３　ヨーロッパナラの巨木．

3. ナショナルコレクション

サヴィルガーデンは近隣のヴァリーガーデンと共に、耐寒性のあるシダ植物（Hardy ferns）、カバノキ属 2 種（*Betula albosinensis, B. utilis*）の栽培品種、モクレン属（*Magnolia*）、ヒイラギナンテン属（*Mahonia*）、マメザクラ（*Prunus incisa*）、アザレア・グランデールハイブリッド（*Rhododendron*: Glenn Dale azaleas）、ツツジ属の原種（*Rhododendron* spp.）、ナナカマド属ナナカマド節（*Sorbus* subgenus *Sorbus* sect. *Sorbus*）のコレクションホルダーとして認定されている。これらの多くはサヴィルガーデンとヴァリーガーデンに分けて植栽されており、全てを見るにはヴァリーガーデンも見る必要があるが、今回は日程の都合上訪れることはできなかった。サヴィルガーデンではこれらの植物はナショナルコレクションとしてまとめられているのではなく、植栽材料としてそれぞれの植物の生育に適した場所に、ばらばらに植栽されていた。これは、多様な環境を意識して造成されているこの園ならではの強みであるとのことであった。今回の調査では時間の関係上、サヴィルガーデン内にあるすべてのナショナルコレクションを見ることはできなかったものの、マメザクラを中心に調査することができた。

1）常緑のシダ植物



図４　耐寒性のシダ類のナショナルコレクション.

一部がヴァリーガーデンにある以外はほとんどがサヴィルガーデンにあり、そのほとんどは「隠れた庭園」（The Hidden Garden）エリアの木陰に植栽されていた。計 385 分類群があるとのことで、*Polystichum setiferum* や *Dyoptetris filix-mas* などのヨーロッパ産を中心としたシダ類の野生種や栽培品種が良好な状態で生育していた（図４）。

2）*Betula albosinensis* の栽培品種



図５　*Betula albosinensis*‘Red Panda’.

サヴィルガーデンとヴァリーガーデンの両方に分けて植栽されているが、新たに導入したものはヴァリーガーデンの「カバノキ芝地」（Birch Lawn）エリアでみられる。計 12 品種があるとのことであったが、今回はサヴィルガーデン入口付近の芝地内に植栽された‘レッド・パンダ’（Red Panda）のみを見ることができた。芝生の中に単木状で植えられていたが、周囲にはノウサギの食害から保護するためのネットによる囲いが設置され、きちんと保護されている様子が伺われた（図５）。

3）マメザクラ



図６　*Prunus incisa*‘Mikinori’.

分類群と栽培品種を合わせて 21 種類があるが、サヴィルガーデンには 7 品種があり、残りはヴァリーガーデンに植栽されているとのことであった。サヴィルガーデンではその紅葉を観賞するためか、Autumn Wood（秋の森）エリアに植えられていた。コレクションの内容は‘アバンダンス’（Abundance）、‘ベニオミ’（Beniomi）、‘ミキノリ’（Mikinori）、‘オモイノヤマ’（Omoinoyama）、‘プラエコックス’（Praecox）、‘セレネ’（Selene）および‘ザ・ブライド’（The Bride）であり、これらの大半はベルギーのカラムタウト樹木園から導入したものとの説明を受けた。このうち、‘オモイノヤマ’は国内でも流通のある‘オモイノママ’のミススペリングの可能性が高いが、残り 6 品種は日本には導入されていない海外での作出品種と考えられるものであった。栽培個体数は 1 個体のみのものもあったが、数個体（2 ～ 5）植えられているものもあった。サヴィルガーデンでは接木による増殖も行っており、バックヤードには予備個体が保存されているとのことであったが、海外の他所での接木と同じくかなり高い位置で台木に接がれており、基部から出ている葉の特徴からは台木にはセイヨウミザクラの若木が使用されていると推測された。また、上述の *Betula albosinensis* と同様、植えられてから日が浅いと考えられる個体ではノウサギ防除用のネット囲

いが設置されており、丁寧に管理されていることが見受けられた（図６）。

なお、上述の品種のうちの‘プラエコックス’は二季咲き性で興味深いものとの説明があったが、葉を見ると鋸歯や毛の状態から純粋なマメザクラではなく、マメザクラとエドヒガンの交雑に起源し‘シキザクラ’や‘ジュウガツザクラ’などの二季咲き性品種が多く含まれるコヒガン（*Prunus* × *subhirtella*）に属するものと考えられるものであった（図７）。その旨は案内していただいた両氏には伝えたが、帰国後にインターネット等で調査してもこの品種はマメザクラの一品種と扱うサイトしか見当たらなかった。イギリスではかなりサクラ類の人気は高いとのことであったが、分類学的な取り扱いは未だ日本以上に混乱が生じている様子が伺われた。



図７　*Prunus incisa*‘Praecox’の葉．

4. 主なエリア

園内は広く、今回の時間内には全てを回ることは不可能であったが、フラナガン氏とステフェン氏に案内いただきながら、園内の主要部分を見ることができた。そのうち主なエリアの概要は以下のとおりであった。

１）The Hidden Garden（隠れた庭園）



図８　The Hidden Garden．

樹木が茂り影を落とす中に作られた部分で、草本植物を用いた植栽がパッチ状に配置されていた。上述の耐寒性のあるシダ類のナショナルコレクションのほか、ギボウシ属（*Hosta*）やメタカラコウ属（*Ligularia*）、チダケサシ属（*Astilbe*）などの半日陰や湿度を好む植物が美しく植栽されていた（図８）。ハナショウブなどの日本産の植物も多く、ケンポナシなどのマイナーな樹木も植栽されていた。マルタゴン系の栽培品種をはじめとするユリ類も多く、特に壮大な姿で開花していたヒマラヤウバユリ *Cardiochrinum giganteum* は圧巻であった。

2）The Dry Garden（乾燥地の庭園）



図９　The Dry Garden．

上述の The Hidden Garden とすぐ隣接しているにもかかわらず、そことは対照的に明るく乾いた地中海的な環境が作られたエリア。地中海地域のほか、ニュージーランドや南アフリカなど、耐寒性があるのに加え夏に潅水の必要がない地域の植物が植栽されていた。このエリアは、将来的に気候変動などによりイギリスが温暖・乾燥化した場合にも対応できることを見越して設計されたとの説明があり、気候変動に対する一般の意識が低い 1970 年代に既にこのような目的で造成されたことに驚いた。主な植栽植物は大型植物ではイトラン属（*Yucca*）、シャゼンムラサキ属（*Echium*）やモウズイカ属（*Verbascum*）、小型草本としてはハゴロモソウ属（*Alchemilla*）、トウダイグサ属（*Euphorbia*）やフウロソウ属（*Geranium*）などが目立ったが（図９）、中にはキボタン *Paeonia lutea* なども使われていたのが意外であった。また、イネ科やカヤツリグサ科などのグラス類を多用しているのも特徴で、全体としてアメリカ西部のプレイリー的な景観を生み出すとともに他の植物の引き立て役として機能しているとのことであったが、スティパ・ギガンテア（*Stipa gigantea*）などはそれ自体が壮大で美しく存在感を放っていた。なお、このエリアのコンセプトがヨーロッパの庭園デザインに与えたインパクトは大きく、各地の庭園に影響を与えた経緯があるとのことであった。

3）The Azalea Walks（ツツジ類の小道）

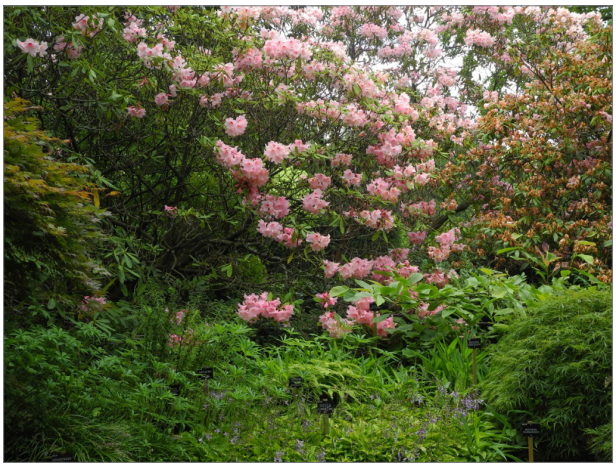


図 10　The Azalea Walk．

ツツジ属を多く植えた樹木園的なエリアで、開園当初の雰囲気を残す。ナショナルコレクションに認定されているシャクナゲの原種の一部も植栽されていた。見頃は春とのことだが、来園時にも開花している種類があり美観を呈していた（図 10）。前面の植え込みにはギボウシ属やツクバネソウ属（*Paris*）、中でも大型のテンナンショウ属（*Arisaema*）の一種は開花期で奇観を呈していた。

4）Herbaceous Borders（草本のボーダー花壇）



図 11　Herbaceous Borders．

ボーダー花壇はイギリス人にもっとも人気がある花壇様式だが、ここでも人気のあるエリアの一つ。宿根草と一年草を用いて７月下旬から８月の真夏に見頃となるように設計されており、最盛期には黄色→オレンジ色→赤→濃紅という暖色のグラデーションの流れを効果的に見せる点に最も留意し

てデザインされているとのことであった。ヘレニウム属の栽培品種（*Helenium* 'Pipsqueak'）やツキヌキオグルマ（*Silphium perfoliatum*）、シオザキソウ（*Tagetes minuta*）のような草丈の高いキク科の植物や、ヘメロカリス類（*Hemerocallis*）、トリトマ類（*Kniphofia*）が多用されていたが、リシマキア・キリアータ‘ファイヤークラッカー’（*Lysimachia ciliata* 'Firecracker'）や、野菜として知られるヤマホウレンソウ（*Atriplex hortensis*）などの赤色〜紫色の葉をもつ植物が効果的に使われていた。訪問時はまだ見頃には早く一部の植物が開花している状態であったが（図 11）、アルストロメリア‘フレイミング・スター’（*Alstroemeria* 'Flaming Star'）の鮮やかなオレンジ色の花は印象的で、この花壇内でも人気の高い自信の品種とのことだった。

5）The Rose Garden（バラ園）



図 12　The Rose Garden .

バラはイングランドの国花であり、国内外から人を呼ぶ上でもっとも重要な植物と考えられている。1950 年代に造られたサヴィルガーデンのバラ園は古典的でありきたりなものであったが、7 年前に庭園全体の長期管理プランを策定した際に改修を決定し、2010 年に新たなバラ園としてエリザベス女王を迎えてオープニングセレモニーが行われた。このバラ園はイギリスの著名なガーデンデザイナーであるアンドリュー・ウィルソン（Andrew Wilson）氏のデザインによるもので、巴形に植栽された園を中心部に張り出した展望橋から見下ろすという斬新なコンセプトで造られている（図 12）。バラは約 2,500 個体で、強香性のものを中心に約 20 品種が使用されているとのことだったが、イギリスらしく‘スカボロー・フェア’（Scaborough Fair）や‘グレイス’（Grace）といったデビッド・オースチン（David Austin）氏の育成した品種が目立った。また、植栽の境界や縁にはイトススキの一品種である‘ファーナー・オステン’（*Miscanthus sinensis* 'Ferner Osten'）が多用されていたが、これがデザイン上重要な役割を果たしているとの説明があった。なお、管理は専門の職員が 1 人で担当しているとのことであり、苦労が偲ばれた。

6）Summer Wood（夏の森）



図 13 Summer Wood .

夏に見頃を迎える森林性の植物を配したエリア。ここは 3 年前からリニューアルを行い、今夏に新装オープンしたところで、園内にも「Released this Summer」と題した大きな看板が掲げられてアピールしている様子が見受けられた (図 13)。案内者からは、年月を経ることで魅力を増す部分がある一方で、流行の変遷などで人気が凋落する部分もあり、常にニーズに照らし合わせながら作り直しをしていくことも重要だとの説明があった。今回のリニューアルでは夏も長期間に渡って花が楽しめるように、AGM を受賞したアジサイの栽培品種を中心にしたデザインに改装されており、アジサイの生長に従って今後の魅力が増すことが期待された。

アレン邸　シャスタデージー・ブッドレアコレクション

名誉会員

高橋康夫

1．調査概要

1）　日時　2015 年 7 月 8 日
2）　調査エリア　　Dulverton
3）　調査場所　アレン邸
4）　保持者　Mrs Anita Allen
5）　調査植物　　フジウツギ（*Buddleja* L.）およびマーガレット（*Leucanthemum* x *superbum*）（*Chrysanthemum maximum*）

2．調査状況

調査地に向かう車窓に展開される風景は牧草地が連なり、牧場が点在する緩やかな丘陵地である（図1）。風が強い場所で、風力発電用の巨大なプロペラが何台も設置されている。狭い道をひた走りに走りやっとたどり着いたアレン邸は、牧場と牧草地で囲まれた一軒家で、1,000 年を超えるストーンハウスである（図 2，3）。所有する土地の面積は 200 エーカー（約 80ha）で牧場や農家の屋根を葺く萱場があるなど、大変広い農場であった。

氷雨の中、個人ナショナルコレクションホルダーのアニタ・アレンさんに丁寧に説明をして頂く（図 4，5）。アニタさんは大学では自然科学を専攻。学位は植物学でそれを植物の栽培に生かしている。アニタさんは 17 年前にこの地に引っ越してきたが、その当時の庭は今の形ではなかった。周囲の環境に合わせて庭を造ったという。ジキタリス、ルピナスなどを配植した自然風の庭が広がり、草花が咲き乱れていた（図 6）。主庭の脇を越えて奥に入ると美しい庭が広がる。アニタさんが一人で築き上げた庭で、作庭前は水が腰まで浸かる沼地であったが、「こ



図1　アレン邸周辺の牧歌的風景．



図2　ナショナルコレクションホルダー表示．



図3　アレン邸全景.

こは素晴らしい庭になる」というイメージが浮かび、困難な整備環境ではあったが、ブルドーザーで整地し湧水場所を探してせせらぎを取り入れた庭を築造した（図７）。

築造に際しては、庭の完成時の風景をイメージしてデザインをした。昔の故郷を思わせる風景は、無理をして造っていない庭なので懐かしく感じられるのではないかと感想をもらされた。すなわち出来すぎた庭（造りすぎた）ではないということのようだ。庭にはブッドレアがさりげなく植栽されていた（図８）。



図６　アレン邸の花壇．



図４　アレン邸における隊員たちの調査状況．



図７　沼を改造した庭．



図５　アニタ・アレンさんを囲んで．



図８　ブッドレア．

1）コレクション保持状況

①保持数

90 種類のシャスタデージー（図 9–12）と 89 種類のブッドレアのコレクションを保持。

②コレクションのきっかけ

植物への興味は子供のころからあり、家が貧しくてお小遣いをもらえなかったので、自宅に生えているマーガレットを切って花束にして市場へ出荷していたのがスタート。ブッドレアは香りが良く蝶がたくさん来るので若いころから好きであった。

現在のコレクションの中には引っ越し前に集めた品種を移植したものもある。

③ナショナルコレクション認定

1980 年代に認定された。シャスタデージーをたくさん保持していたことが周囲から認められ申請をアドバイスされた。当時、プラントヘリテージはまだ小さな組織で、支部が無かったので、本部の事務局長が直接来園して認定した。

④記録保存

・保持しているすべての種類を写真記録及び押し花標本にして保存（図 13–16）。
・標本の保管は家庭用の除湿器を使用している。自分なりに乾燥状態などを工夫しながら自宅で保存している。
・1980 年代は標本も残すべきと言われていたが、現在はその決まりはないようであるが、やはり資料として写真記録、標本として残すべきである。

⑤栽培管理

・1 年のうち 6 か月は息子と一緒に毎日庭の管理を行っている。
・現在市場にたくさん出回っている品種は交配により出現しているが、元の強さを失っているものが多い。庭の環境に順化する品種を栽培している。
・系統立てて栽培しているが、枯れそうなものは除去し、株分けで増やしている。
・翌年同じものが生育していることを確認し、系統栽培が継続されていることを確かめている。
・繁殖は、自家受粉すると元の形質が変化してしまうため株分けによる栄養繁殖を行っている。
・時期は冬が厳しいので春の早いうちに株分けする。
・新品種を作出するための交配を行っている。
・新品種を 3 種類作出し、オランダで販売している。シャスターコートシリーズ。
・庭で生育している植物は性質が強い個体で生育が旺盛であり、病気とか害虫はつかない。
・一般的に出回っている品種は病気、害虫に弱いので、そのような品種は栽培しない。
・ナメクジとカタツムリの被害があり、忌避剤を撒いて対応している（図 17）。
・ノウサギが出没するので、樹木にはウサギ除けを設置している。
・花が黄色のデージーは病害虫や気候変動に対して弱くすぐ枯れる。そもそもシャスタデージーの花の黄色は認めがたい。シャスタデージーの名前の謂れはカリフォルニアの万年雪を頂くシャスタ山にちなんでいるからである。雪の山なので白い花であるべきであり、やはり白い花が良い。

⑥後継者
・子息は農場経営者であるが、彼が後継者になることを期待している。

⑦コレクションの楽しみ
　コレクションの楽しみ方は数を集めることやあらゆる種類を集めることなどもあるが、アニタさんはひとつのベッドに同じ仲間を集めるのではなく、他の植物と組み合わせて植栽している。組み合わせがうまくいくとその美しさが出ることがある。どの植物と組み合わせをするとどのように美しくなるかを発見するのが楽しみだという。例えばルピナスと組み合わせた時のデージーは美しさが際立ち、家をバックにしたときはデージーはもちろんだが家も美しく見える。

2）コレクションの課題

①息子に期待しているが確実な後継者が確定していない。
②自宅で写真、標本を保管しているが、湿度管理など十分行えるか問題点がある。
③なぜ、シャスタ・デージーを保存するのかという、コレクションする理由が定かではなかった。また、ブッドレアを保存する理由（貴重種、歴史性、栽培困難、消滅）を十分確認できなかった。
④保存を個人に頼りすぎており、補助金など支援体制も不十分である。



図9　*L*．x *superbum* ’Shapcott Summer Clouds’.



図 10　*L*．x *superbum* ’Christine Hagemann’.

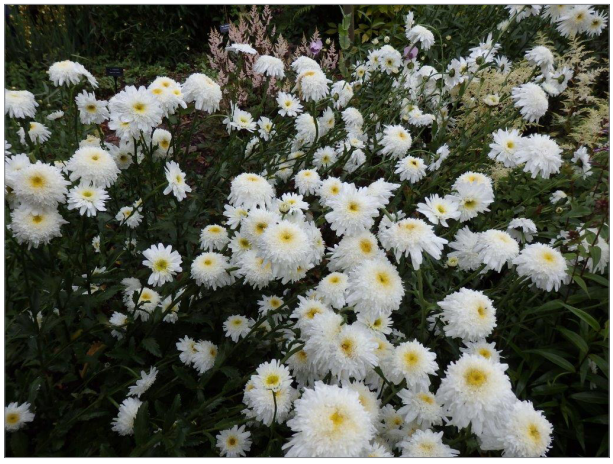


図 11　*L*．x *superbum* ’Jennifer Read’.



図 12　黄色いシャスタ・デージー *L*．x *superbum* ’Goldrush’.

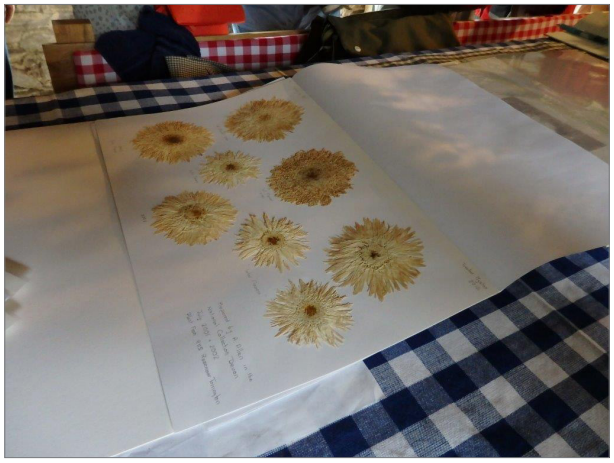


図 13　シャスタ・デージーの標本 .



図 14　シャスタ・デージーの標本 .



図 15　シャスタ・デージーの記録写真 .



図 16　ブッドレアの記録写真 .



図 17　カタツムリとナメクジと忌避剤 .

3．所感

1）ナショナルコレクションの課題

①認定基準

アレン邸で認定されているシャスタ・デージーとブッドレアは何を基準に認定されたのか不明であった。貴重品種、歴史的品種、希少品種なのか明確に設定されているのか十分な説明が無く確認できなかった。日本でナショナルコレクション制度を実施する場合、その認定基準を明確にする必要がある。例えば文化財指定における基準（ア～キ）を参考に植物（江戸園芸の変化朝顔や江戸キリシマツツジなど）に置き換えて検討してみる意義はあるのではないか。

ア　歴史的変遷を示すもの
イ　時代的特色を示すもの
ウ　地域的特色を示すもの
エ　技術的特色を示すもの
オ　生活様式の特色を示すもの
カ　技術の発生又は成立を示すもの
キ　技術の変遷の過程を示すもの

②保護育成

認定した品種を誰がどのように保存管理していくのか。責任はだれにあるのか。また、保持者が保持しきれなくなった場合どうするのかという保存方法が確立されていない。ナショナルコレクションに認定しておきながら、その行く末があいまいであると、保持者が持ちきれなくなった場合、その時点で失われてしまう可能性が高い。成り行き任せの他者への斡旋では、貴重な品種が失われる可能性を否定できない。最後の最後になった時にコレクションの存続を保証する制度が不可欠であると考えるべきではないだろうか。継続的栽培管理を保証する制度が確立されないと、ナショナルコレクションを単に認定したに過ぎず、認定した責任が放棄される可能性がある。

③資料保存

認定した品種の記録保存を確実に実施する必要がある。栽培中に枯損など失われる可能性もあり、また同定する際になくてはならないものなので、記録保存のマニュアルが必要となる。また保存環境のしっかりした施設が必要である。

④後継者育成

貴重な植物を継続的に育成管理するには手間がかかるものであり、情熱を持った人材が無くてはならない。しかし、ナショナルコレクションの植物は収入源にならないし、支出がかさむ場合が多い。品種を保護するにはボランタリー的貢献が求められるので、割の合わない植物保存には後継者が育たない可能性が高い。後継者育成はあらゆる分野で喫緊の課題であるが、ナショナルコレクションホルダーにおいても同様である。

2）風土的課題

今回調査した場所はどこも敷地が広く、植物を育てる環境が整っている。また、イエローブックなどの私庭公開制度があり、庭を造ることに敬意を表するシステムとなっており、園芸の伝統が息づいている。なお、特筆すべきことは、イギリスの気候的な要因で日本に比べて雑草が繁茂しないことが、草花花壇を維持管理する上で非常に大きなメリットとなる。見た目にも美しく草取りに手間が掛からないということは、草取りに多大な労力を掛けなければならない日本における花壇管理と大きく異なる点である。

4．参考

1）シャスタデージー（英名：Shasta daisy）

アメリカの育種家バーバンク（L. Burbank）が、*Chrysanthemum maximum* をもととし、フランスギ（*C. lacustre*）、および純白にするために導入したと考えられている日本のハマギク（*C. nipponicum*）などを親として交配、作出したと伝えられているが、交配に用いられた種には不明確な点が多い。牧野富太郎は 1929 年に本種にたいして、「*C. Burbankii* Makino」の学名を与えた。

高さ 60㎝ほどで開花する耐寒性のある宿根草。名はカリフォルニアの万年雪をいただくシャスタ山にちなむ。

2）作出者

ルーサー・バーバンク（Luther Burbank：1849 ～ 1926）

アメリカの植物学者・園芸家・育種家。多くの植物の品種改良を行った。およそ 3,000 種の改良品種と、1,000 種の新品種を生み出した。代表的なものは、シャスタ・デージー、とげのないサボテン、バーバンク種のジャガイモなどである。

3）シャスタ山

シャスタ山（英語 : Mount Shasta）はアメリカのカスケード山脈南部にある火山。標高は 4,317m。古来よりこの地方に住むアメリカ先住民の聖なる山とされ、現在の山の名前はその部族のひとつシャスタ族に由来する。山頂は氷河と万年雪を戴く秀麗な火山。

4）ブッドレア

フジウツギ属（*Buddleja* L.）。落葉または常緑の低木または小高木。約 100 種あり、南北アメリカ、アジア、アフリカに分布する。日本にはフジウツギ（*B. japonica*）とコフジウツギ（*B. curviflora*）が自生する。種の形容語は、本種を発見したフランス人宣教師で植物学者のアダム・バドル（Adam Buddle：1660―1715）の名前に由来する。広く植栽され親しまれているのはフサフジウツギ *B. davidii* Franch.）で、園芸界でブッドレアというと本種とその園芸品種を指す。アラン邸に植栽されていたものはこの種である。円錐状に咲く花には甘い香りと蜜があり、チョウやハチが良く集まって来ることから「バタフライブッシュ（Butterfly bush）」という英名がある。日本には明治時代中期に渡来したとされる。

マーウッドヒルガーデンにおけるナショナルコレクション

賛助会員

冨田あすか



図１　チケット販売小屋．

イギリスデボン州の北部のマーウッドヒルガーデンに到着し、駐車場から少し歩いたところに小さな人ひとり入れるだけの小屋が建っていた（図１）。とてもナショナルコレクションを３つも有しているには質素で、疑わしいほどであった。細い園路を抜け、かわいらしいカフェのその下にメインの庭が広がっていた（図２）。

マーウッドヒルガーデンは 1950 年代にジミー・スマート博士によって造られた個人の庭である。北デボンの谷間にあるぬかるんだ農地や、川を造成し、3 つの大きな池を中心とした 20 エーカーの壮大な庭園を完成させた（図３）。

現在のマーウッドヒルは３種のナショナルコレクションを所有している。

もともと所有していたアスチルベは 10 種類ほどで、40 年前のプラントヘリテージ発足時にコレクションの充実を依頼され、現在の 120 種類まで増やしてきた（図４）。イギリス国内にアスチルベのナショナルコレクションは３か所あり、情報、個体の交換を行うことができるそうだ。

主にガーデンで使われている種類は決まっており、残りは非公開の栽培施設で保存管理されているよう

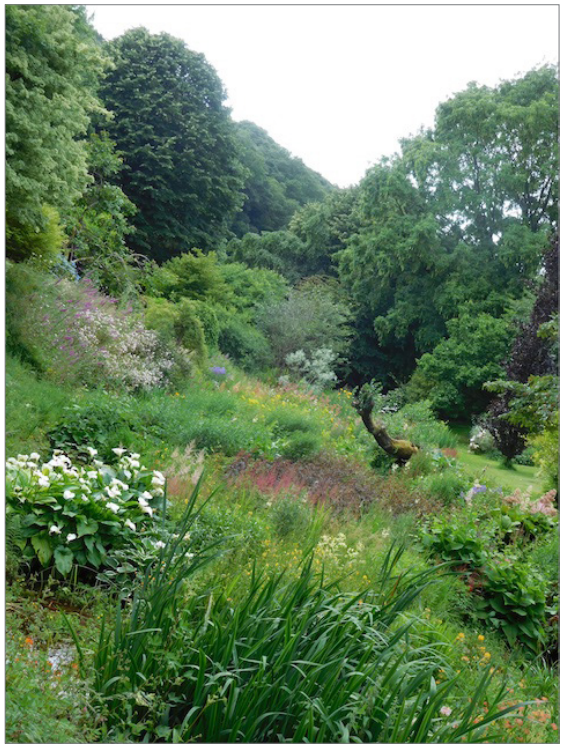


図２　入口からは想像できない規模のメインの庭．

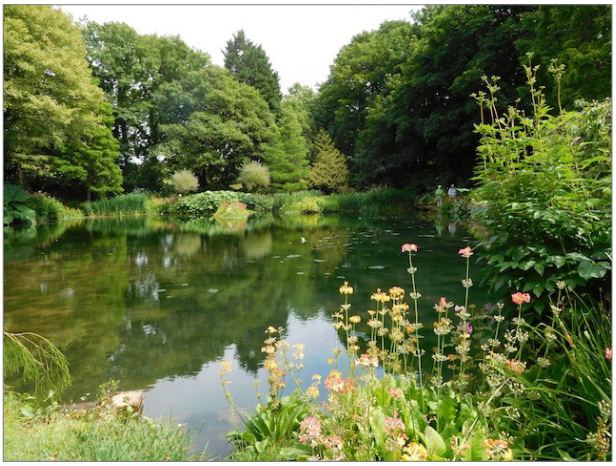


図３　池を中心とした庭園．

だった。アスチルベのコレクションはすべてデータ化されており、世界中からそのデータを閲覧することができる（http://www.astilbecollection.co.uk/history.html）世界中の人にアスチルベを正しく理解してほしいという熱い思いが込められているサイトだ。

地の利を生かして育てられている植物がアスチルベ以外にも、もう１つある。スマート博士が未来のためにヨーロッパ中から集めてきたという花菖蒲だ。

花菖蒲はすべて、ガーデン内での保存されており、日本と違い、株が大きくなりすぎることがないので、２～３年に一回の株分けをする必要もない。ただ、土に栄養がないので肥料を定期的に与え、冬場には水を抜くそうだ。一見品種別の管理がされていないように見えるのだが、品種の保存は別にしてあるので、園内での交配は心配していないとのことだった（図５）。

ガーデンに見本植物として植えられ、公開されているアスチルベや、花菖蒲と違い、公開されていないナショナルコレクションもある。

ツルバキアはもともとのホルダーが外国に引っ越ししてしまったことを期にマーウッドヒルに譲渡されたものだという。初年度は管理方法の間違いからいくつかの株を失ってしまった。結果としてガーデンに植えることができなくなり、公開せずに、栽培温室でのみの管理となった。原産国と全く環境の違うデボンでいかに種を維持していくか常に挑戦だ。現在は２種の原種と亜種で満足しているが、国内のツルバキアのナショナルホルダーは交配もしており、ツルバキアも数や種類が増えれば鉢植えにして公開したいとおしゃっていた（図６，７）。

ナショナルコレクションになっているアスチルベ



図４　アスチルベのナショナルコレクション．

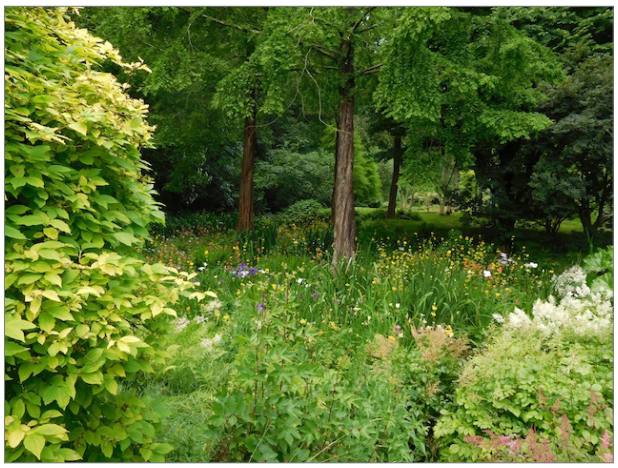


図５　花菖蒲．

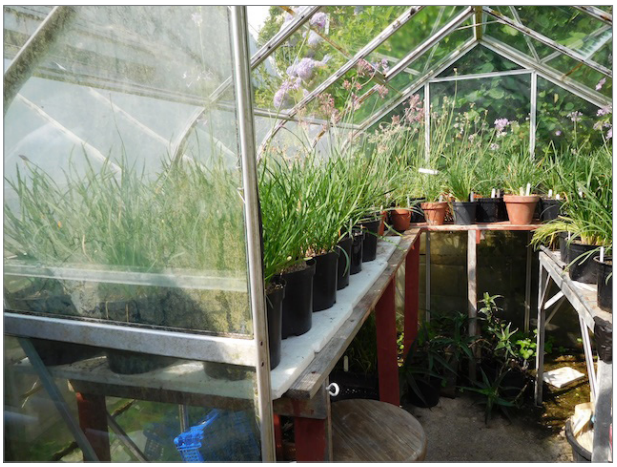


図６　ツルバキアの栽培状況　．



図７　ツルバキアのナショナルコレクションラベル．

の花壇は美しく、コレクションの美しさを最大に引き出しているガーデンになっていた。アスチルベを知り尽くしたマーウッドヒルのガーデナーだからこそできる草丈、開花期、色の合わせであった。

意外だったのが、ナショナルコレクションだからといって、どこかに隔離して保管しているのではなく、あくまでガーデンの植栽植物として扱われていたことだ。

素晴らしいアスチルベの庭があり、ナショナルコレクションを他に２つも保有するのに、ガーデンのパンフレットの表紙には他の植物が使われていた。後日、なぜアスチルベをパンフレットの表紙にしないのか、ヘッドガーデナーをされていたマルコムさんにお伺いしたところ、「ナショナルコレクションはイギリスの、またデボン州、マーウッドヒルの宝である。来園するお客さんにはそれ以外の植物も見てもらいたいからだけど、来年考えてはみるよ。」との答えが返ってきた。言葉の裏にガーデン全体の自信がおおいに感じられた。

確かにガーデンは見所が多く、３つの池がそれぞれ別の印象を与えるように作られており、多くの人が楽しめるようになっていた（図８，９）。私たちが訪れている間にも、多くの来園者が思い思いの場所で庭を楽しんでいた。とても２人のフルタイムスッタフと４～５人のボランティアでまかなっているようにはみえなかった。

今回マルコムさんにお話しをお伺いしていてアスチルベへの情熱の強さに圧巻されてしまった。HP で閲覧できるようになっているアスチルベのコレクションファイルはもともとマルコムさんの手造りのプラントカードが元になっており、HP で見るよりもさらに詳しい情報が記されていた（図 10）。また、ツルバキアを公開すべく増殖させる方法を模索し続けている姿に頭が下がる思いであった。

多くのナショナルホルダーの方にお会いして、共通して感じたのは皆さんの強い情熱だった。ナショナルコレクションはこれらの人々の熱意によって支えられていることは間違いないであろう。その反面、コレクションホルダーが引退すると、情熱ごと継続、維持することは難しいと感じた。コレクションの引き継ぎは個人ではかなり難しいと思われ、地域のホルダーの協力がどこまでできるかが、保存の可否にかかわってくるだろう。

今回の調査でナショナルコレクションの維持の難しさと、情熱の素晴らしさを肌で感じることができた。種の保存の大切さもそうだが、好きなものを守りたいという情熱がすべてのものに優っているようだった。この情熱こそが日本のナショナルコレクションの成功を左右するものだといえるだろう。

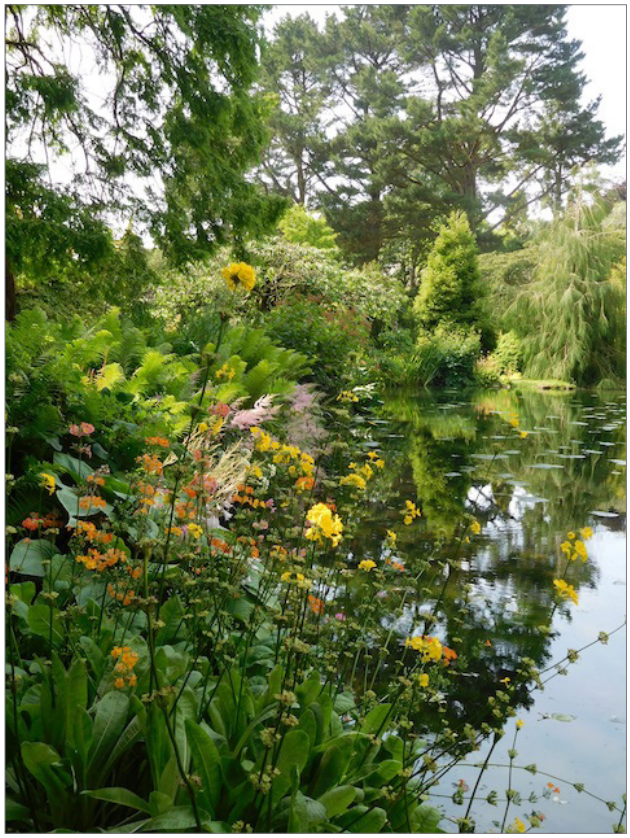


図８　池の景観．



図９　宿根草花壇．

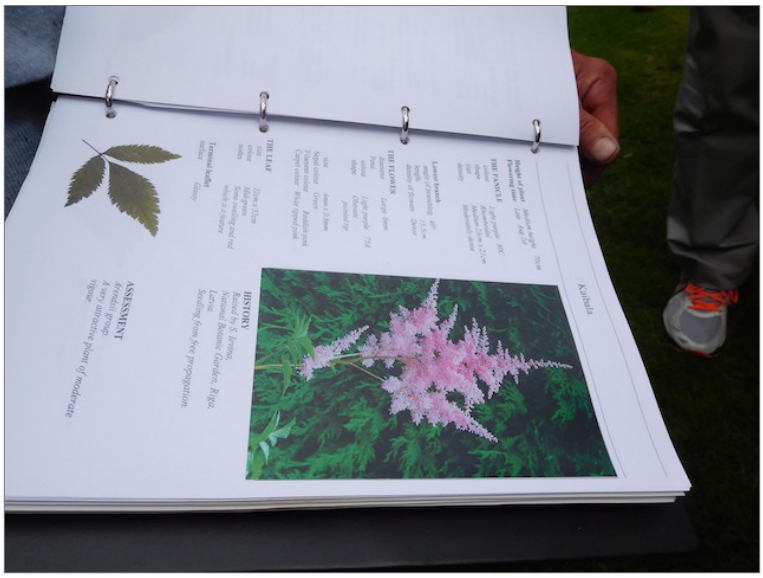


図 10　アスチルベのプラントカード．

パインコッテージプランツ

Pine Cottage Plants

名誉会員
兵庫県立大学緑環境景観マネジメント研究科
城山 豊

パインコッテージプランツは、イギリスのデボン州のほぼ中央のエッグスフォードにある小さなナーセリーである。自らアガパンサスの育種を行い、オリジナルの園芸品種を中心に販売するアガパンサス専門のナーセリーである。Richard Fulcher 夫妻が経営している。

Fulcher 氏は、若い頃スコットランドのある庭園で働いていたころにアガパンサスに出会ったそうだ。その後、農業園芸学校の講師の仕事があり、ここデボンにやってきた。そして、学校でもアガパンサスを栽培していたが、アガパンサスにどんどん惹かれてゆき、将来アガパンサスのナーセリーをしたいと思うようになったという。12 年間学校で働き、その後、20 年前にこのナーセリーを始めた。

当時、イギリスでは、アガパンサスはあまり知られておらず、取り扱っている業者も少なかった。このため、地元のフラワーショーを始め、チェルシーやハンプトンコートのフラワーショーにも出展し、アガパンサスでは、初めてのコレクションホルダーとなった。今では、アガパンサスの知名度も上がり、現在 4 つのコレクションホルダーが存在する。以前は、500 程度の品種を持っていたが、自分で作出した品種に集中するために、他のナショナルコレクションホルダーに譲って現在は 100 品種程だそうだ。小型の品種の育成が現在の目標である。訪問したのは 7 月 8 日であったが、残念なことにアガパンサスの開花時期には少し早く、開花しているものはわずかであった（図 1）。なお、アガパンサスは、実生から約 3 年で開花するとのことである。販売はメ



図 1　アガパンサスのコレクションの一つ．



図 2　住まいのコーテッジハウスの表側．

ールオーダが中心であるが、ヨーロッパ以外には検疫の関係で送らない。カラーのパンフレットも作成している。

ここで、特筆すべきは Fulcher 氏の住まいである。ナーセリーの名前であるパインコッテージプランツのとおり、彼はコッテージハウスに住んでいる。この自宅も案内していただいた。驚いたのは、この庭である。表は何の変哲も無い煉瓦作りの長屋である（図 2）。写真の太陽光発電のパネルのある所までが Fulcher 氏の住まいで、その横は隣人の住まいである（図 3）。ところが裏へ回ると驚きである。少し大げさな表現だが、楽園が目の前に現れた印象である。住まいはあまり広いとは思えないが、一方、庭は驚くほど広い。建物の前には、美しく管理された芝生を中心に、宿根草、低木を組み合わせ美しく植栽されている。しかし、まだまだ奥に道が続く（図 4 の手で指す方向）、多様な種類の植物が栽培されていた。このところの彼にお気に入りは、ロードデンドロンだそうだ。

これが、「あのコッテージガーデンなのか！」サビル・ガーデンやウィズレーガーデンで見たボーダー花壇は巨大でなかなか日本では取り入れることは難しいと思ったが、このコッテージガーデンなら、日本でも製作可能である。日本でのイングリッシュガーデンブームの対象となったガーデンの源流がコッテージガーデンだと言われているが、Fulcher 氏の庭を拝見して、このことが納得できた。今回訪れた個人のコレクションホルダーの庭はそれぞれ素晴らしく、行く先々で「こんな庭のある家に住んでみたい」という言葉が会員の口からもれてきたが、Fulcher 氏の庭はまさにそのとおりで、日本ではコレクションと美しい庭が共存しているケースをあまり見ることがないが、今回の英国の調査対象ではコレクションも素晴らしいが、また、その庭も本当に美しく、素晴らしいことが印象に残った。

パインコッテージプランツ ホームページ
http://www.pcplants.co.uk/



図３　裏へまわると驚くほど美しい庭が広がる．



図４　あの茂みの奥にまだ庭が広がっている．

ハイネス邸　シクラメン

六甲高山植物園

三津山咲子



図１　ジョー・ハイネスさん．



図２　庭．

１．ナショナルコレクション

25 年前にロンドンからデボン州の農地に引っ越して牛の農家をしていたジョー・ハイネスさん（図１）は、原種シクラメン 22 種とそれらの亜種や品種を保有している。4 年前にリタイアして、現在は牛の世話は別の人に任せている。シクラメン属には 23 種があるが、そのうちソマリアに自生しているソマレンセ（*Cyclamen somelense*）のみ保有していない。ソマリアに行くのは困難なので、現在収集可能な原種をすべてコレクションしていることになる。

1980 年代からナショナルコレクションに興味を持ち、収集を始める。一般の人でもコレクションホルダーになれることを知り、講義を受け、2 年間に渡って審査を受けた。原種シクラメンに魅力を感じたのは、夏以外はどの季節にも咲く種があるから。ナショナルコレクションに認定されたことがステータスになっている。

種子は、オランダのナーセリーやシクラメン協会から得ている。

年 4 日一般に公開していて、公開日には 4 ポンドの見学料をとる。そこで得たお金はすべてイギリス政府によって予算が削られた、死を目前にした人のケアの活動をしている団体に寄付している。寄付するために庭を管理、公開している面もあるし、ハイネスさん自身も一般公開することに魅力を感じている。早春の公開日には、昼だけで 250 人の来園者があった。9 月から 3 月の見学には、事前予約が必要である。



図３　家と庭．

2．庭の概要

庭づくりは、デボン州に引っ越してきた頃からしている。ご主人は仕事をしているので、基本的にはジョーさん一人で管理している。広さは１エーカー（約 4,047㎡）。１年を通していつでも楽しめるよう工夫してつくっている。耐寒性のある原種シクラメン以外にもスノードロップ（*Galanthus*）とヘレボルス（*Helleborus*）をたくさん収集していて、プリムラにも興味がある。

扉を開けて庭の中に入ると、石を積んだ階段を上がったところに手入れされた芝生があり、芝生を取り囲むように色とりどりの花が植栽されていた（図２，３）。入った瞬間、感嘆の声があがった。ゲラニウムやジギタリス、カンパニュラなど、色合わせもセンスがよく、雑草もなくすみずみまで手入れが行き届いていた。芝刈りも週１回はするそうだ。芝生を抜けると、柳の並木道になり、両脇にプリムラが植栽されていた（図４）。どの部分を見ても絵になるような庭だった。

柳の並木道を過ぎるとアルパインハウスがあった（図５）。原種シクラメンやレウィシア（*Lewisia*）、ヘパティカ（*Hepatica* ミスミソウ属）などの鉢が砂を敷いたベッドに埋められていた（図６）。ヘパティカはシクラメンと栽培法が似ているとのことだった。銀色のラベルが洒落ていた。熟したシクラメンの種子があり、割って見せてくれた（図７）。種子はとりまきすることが多いとのことだった。地面や鉢にまいたり、人にあげたり、シクラメン協会に種子を提供して交換したりもする。種をまくのが好きだと言われた。シクラメン・ヘデリフォリウム（*C. hederifolium*）は、15 年の大株のものもあった。ここには、ナショナルコレクションのプレートが掲げられていた（図８）。

松やシャクナゲなどの木陰の樹林帯があり、早春には一面にシクラメンやスノードロップやヘレボルスが咲くそうだ。早春の光景を想像しながら歩くと、もう１つアルパインハウスがあり、原種シクラメンのコレクションがあった。天井にはブドウのつるをシェードがわりに張っていて、おやつに食べると言われた（図９）。

冬の作業が大事とも言われた。ナショナルコレクションのシクラメンは、アルパインハウスの中の鉢と、庭に植栽されていた。

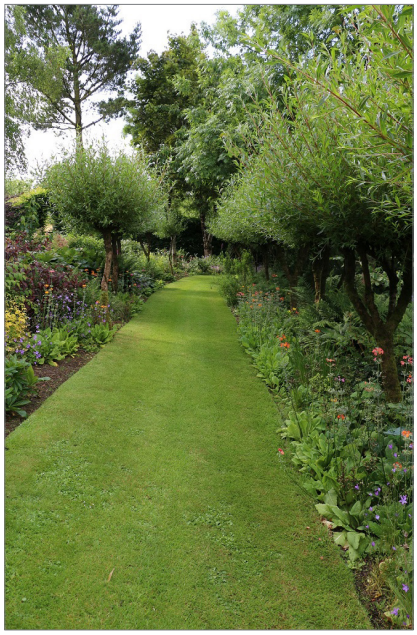


図４　柳の並木道．



図５　アルパインハウス．



図６　砂を敷いたベッドに埋められたシクラメン・コルチカム．



図7　シクラメンの種子.



図8　ナショナルコレクションのプレート.



図9　ブドウのつるを張ったアルパインハウス.

3．納屋でのスライドによる解説

石造りの納屋でスライドを見ながら、説明を聞いた（図 10）。紅茶とお菓子のふるまいもあった。庭を見学に来た人にふるまうそうだ。水に浸したシクラメンの種子も置いてあった（図 11）。名前、種子の入手先、年月日、ナンバー、自生地の環境、その種の特徴などを細かく記録したファイルも置いてあった。

スライドは、原種シクラメンの自生地を訪れた時の様子や、特徴のある葉のタイプ、庭を作る過程の記録だった。自生地では開発や自然環境の変化、盗掘などで数が減っているそうだ。シクラメン・ペルシカム（*C. percicum*）はイスラエルでは雑草なので、抜かれるとのことだった。

何もないところから、ショベルカーで耕し、つるはしで石を取り、その石を積み上げて、階段やレイズドベッドを作る様子が丹念に記録されていた。少しずつ庭ができあがり、現在のかたちになっていった。早春のシクラメンやスノードロップが満開の様子も映し出された。

4．所感

スライドでは、今は成人している子どもが幼い時の写真もあった。まだ完成していない庭で遊ぶ子どもたち。ご主人は一つ一つ石を積み上げていた。原種シクラメンに興味を持ち始めて、シクラメンが家族の花になった。自生地の勉強を兼ねて、家族旅行はトルコ、ギリシャ、イタリア、イスラエル、最近ではフランスと原種シクラメンを追う旅が続いた。ナショナルコレクションに認定されたことで、ジョーさんの庭づくりや植物への情熱はより一層強くなったのだろう。

洗練され計算しつくされた庭は、愛情と丹精を込めてつくりあげたものだった。そこには、家族の歴史があり、植物と人との関係の一つの幸せな完成形を見た。



図 10　納屋でのスライド .



図 11　水に浸したシクラメンの種子 .

王立園芸協会　ローズムアガーデン

Royal Horticultural Society's Garden Rosemoor

安城産業文化公園デンパーク

長澤亜紀子

イギリス南部、デボン州の北部の美しい林に囲まれた RHS(英国王立園芸協会) の所有園。ウィズリーガーデンの分園として、植物園ではなく植物を楽しむための庭園 (ガーデン) という位置づけに基づいて運営される。面積は 26ha（65 エーカー）。

その起源は、珍しい植物に高い関心のあったアン・パルマー婦人（のちにアン・ベリー婦人）が手がけた 3ha の個人庭園。牧草地だった 13ha なども合わせて、1988 年 RHS に寄贈された。以来、RHS の南西地方における拠点として、めざましい勢いで開発と造成が進められた（図１）。

園内には観賞価値の高い植物を使用したテーマ性のある数々の花壇や見本園が広がり、2014 年にはイギリス国内で最も美しい庭園として評価された。図書館やガーデンショップ、レストランなども併設する（図２）。（ホームページ http://www.rhs.org.uk/gardens/rosemoor）

今回はキュレーターのジョナサン・ウェブスター氏と庭園チームリーダーのジョナサン・ハッチンソン氏に案内をしていただいた（図３）。



図１　ローズムア ガーデンマップ .



図２　園内で使用される植物も販売されているガーデンショップ．



図３　ジョナサン・ウェブスター氏（左）とジョナサン・ハッチンソン氏（右）．

１．園内エリア

（１）フォーマル ガーデン

2.7ha の整形式庭園。イチイやブナ、ツゲ、ヒイラギなどを使った生垣により仕切られたガーデンルーム方式で、それぞれテーマに沿ったインパクトのあるガーデンを演出。200 品種、2000 株を誇るローズガーデンやロングボーダーなどがある。

クィーンマザーズローズガーデン
Queen Mother's Rose Garden

ハイブリッド・ティーやフロリバンダ、クライミングなど 60 品種以上のバラが咲き誇る。宿根草と混植することで、バラをより引き立てる（図４）。

シュラブローズガーデン Shrub Rose Garden

美しく、香り高い花が特徴であるシュラブローズ 130 品種が咲き誇る。夕方にはあたり一面にバラの香りが漂っていた（図５）。

ロングボーダー　The Long Border

直線の園路沿いの両側が幅 4m × 150m の大規模なボーダー花壇。背景はイチイやブナを用いた生垣 (高さ約 2.4m)。色彩豊かな一・二年草、球根、宿根草でインパクトのある花壇を表現している。長期間観賞できるフォリッジプランツ（観葉植物）や低木や花木を効果的に使っていた（図６）。

ポタジェ　Potager

ポタジェは装飾的なキッチンガーデン。野菜やハーブを用い、高さや色、かたちを考えて植えれば、観賞用のガーデンとなる。多品種で作られたポタジェは素晴らしかった（図７）。

ホットガーデン　Hot Garden

強い色彩をテーマにしたガーデンで、赤やオレンジ、黄色の花と、黄金色や紫色の葉を組み合わせてできている。色の対比を上手く用いたことで、強烈な印象を与える。花と葉の色合わせが絶妙であった（図８，９）。

チャンピオンツリー　Champion Tree

イギリスでは州や地域ごとなど、注目すべき巨樹をチャンピオン・ツリーとして認定している。ローズムアにあるのは巨大なシダレローソンヒノキ (*Chamaecyparis lawsoniana* 'Imbricata Pendula') （図 10）。



図４　クィーンマザーズローズガーデン．



図５　シュラブローズガーデン．



図６　ロングボーダー．



図７　紫葉のケールが他の野菜を引き立てているポタジェ．



図８　ホットガーデン　植物、空、地面の色が絶妙な組み合わせである．



図９　ホットガーデン　鮮烈な色の対比を楽しめる．



図 10　ローズムア ガーデンのチャンピオンツリー．

（2）ストリーム フィールド

レディ・アン・アーボレータムから湖にかけて、季節ごとの流れを表現したエリア。湖は 1990 年に園の西端より水を引いて造成され、庭園のための貯水池となっている。

ボッグガーデン＆レイク　Bog Garden & Lake

スイレンなどが生息する大きな湖のほとりは湿地となっており、南米産のグンネラ・マニカタ (*Gunnera manicata*) やポンテデリア (*Pontederia cordata* cv.) などの湿生植物が植栽されている（図 11，12）。

メドー　Meadow Habitat

第 2 次大戦によって 95％が失われたとされる、イギリス野生植物の草原を再生させた場所。夏の終わりに刈り取りとすき込みをすることで、種類豊かな草原へと変化する様子を伝える（図 13）。

ロック・ガリー　Rock Gully

レディアンガーデンへ向かう途中、地下道を抜けると突如現れるロックガーデン。小さな滝とシダやギボウシなど、日陰を好む植物が落ち着いた雰囲気を作る（図 14）。



図 11　湖と湿地 .



図 13　夏の主役はセントウレア・スカビオサ (*Centaurea scabiosa*)、春はスイセンなどの球根類が楽しめるメドー .



図 12　湖の周囲はシラカバやヤマボウシなどの樹木が背景を作る .

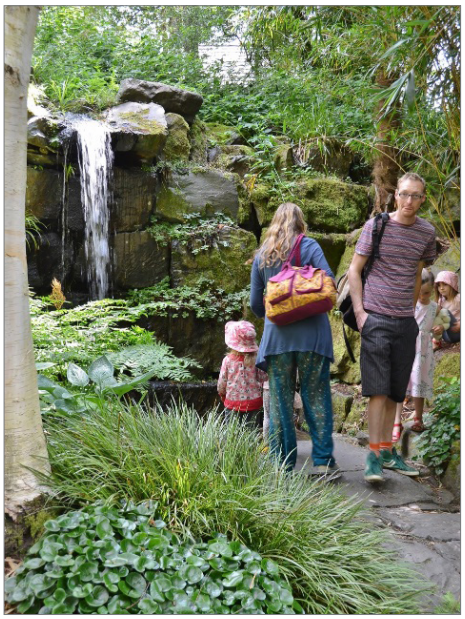


図 14　ロック・ガリーでは小さな滝が人気 .

（3）レディアン ガーデン

1990 年の開園のために造成された新しいエリアとは対照的に、このアン婦人の庭は半世紀以上前に植栽されたエリア。ローズムアガーデンの原点ともいえる場所である。

エキゾチックガーデン　Exotic Garden

比較的耐寒性のある熱帯 ~ 亜熱帯植物を使ったガーデン。バショウ (*Musa basjoo*) やカミヤツデ (*Tetrapanax papyriferus*)、ユーフォルビア・スティギアナ (*Euphorbia stygiana*) など植栽されていたが、小ぢんまりとした印象を受けた（図 15）。

ストーンガーデン Stone Garden

アン婦人の母親が 1932 年に作った、一番古いガーデンのうちのひとつである。石のベンチやトラフに植わったサラセニアや多肉植物も面白いが、ショウジョウシダレなど日本のカエデの類も際立っていた（図 16）。

チェリーガーデン　Cherry Garden

サクラの園芸品種を植栽した庭園。アン婦人に植物の魅力を教え、親友でもあったコリングウッド・イングラム氏（1881-1981）の協力を得てできた。イングラム氏は、日本のサクラ品種コレクターであり、育種家としても有名（図 17，18）。



図 15　エキゾチックガーデン .



図 17　イングラム氏が 1965 年に植栽したサクラ ‘クルサル’（*Prunus* `Kursar’）.

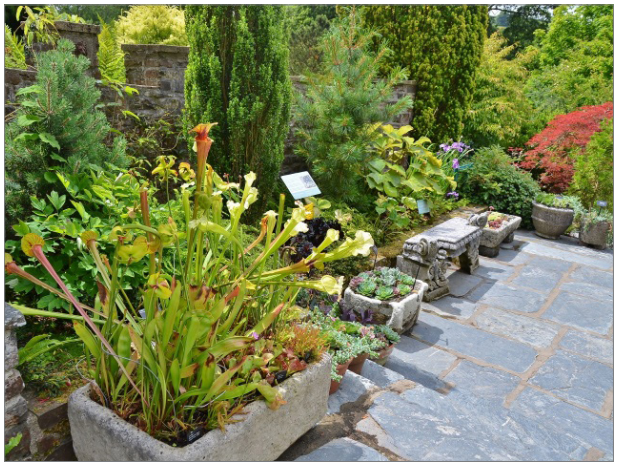


図 16　ストーンガーデン　オリエンタル風だったこの場所は少しずつ変化しているようだ .



図 18　サクラ ‘クルサル’ とイングラム氏、アン婦人についての説明パネル.

（4）アーボレータ　Arboreta

アン婦人の収集した樹木が植栽されているエリア。庭園的な部分と見本園的な部分に分かれている。

レディ・アン・アーボレータム
Lady Anne's Arboretum

アン婦人が 1970 年代の中ごろにかけて植栽した樹木園。樹木はアンが収集した種子からの実生によるもので、その由来はすべて記録に残っているそうだ（図 19）。

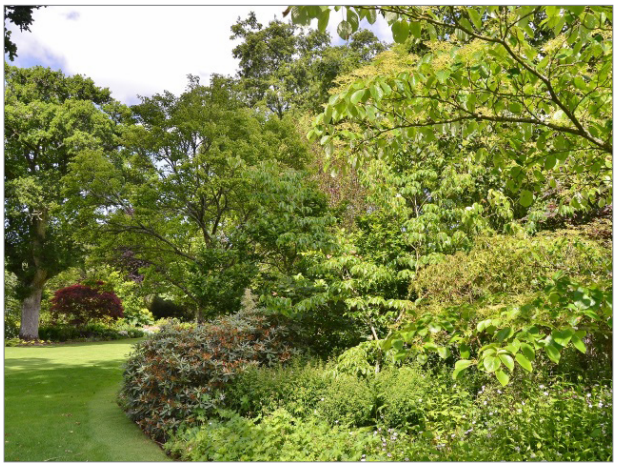


図 19　樹木園では、低木、中高木をうまく組み合わせてあり、多くの種類が楽しめる．

2．ナショナルコレクション（ミズキ属、モチノキ属ほか）

ローズムア・ガーデンが保有するナショナルコレクションはミズキ属（*Cornus*）とモチノキ属（*Ilex*）である。現在は、園のキュレーターでプラント・ヘリテージの副議長でもある、ジョナサン・ウェブスター氏が取りまとめている。いずれも園内の栽培適地を選定し、植栽するスタイルである。近年、ジョン・カーター夫妻より、寄贈された水生のアヤメ属（*Iris*）コレクションも園で保有している。

（1）ミズキ属　野生種 32 種、園芸品種 74 品種を保有

ミズキ属は種によってさまざまな観賞効果があるため、園の植栽に貢献している。シラタマミズキ（*Cornus alba* cvs.）のように若枝が赤や黄色に色づく特徴のある種類は、冬のガーデンには欠かせない（図 20）。早咲きのセイヨウサンシュユ（*C. mas* cvs.）、カラフルな苞のヤマボウシ（*C. kousa* cvs.）、斑入など綺麗な葉を持つコルヌス・アルテルニフォリア（*C. alternifolia* cvs.）（図 21）、秋の紅葉が綺麗なハナミズキ（*C. florida* cvs.）、イチゴのような果実をつけるコルヌス ' ポルロック '（*C.* 'Porlock'）など多彩である。

（2）モチノキ属　耐寒性のある野生種 49 種、栽培品種 135 品種を保有

セイヨウヒイラギの仲間として、とげのある葉と赤い実がクリスマスの飾りとしてなじみ深く、また冬のガーデンを彩る植物として知られるが、その多くは耐寒性に問題がある。ローズムアでは耐寒性があり、観賞価値の高い、小型品種をコレクションしている。モチノキ属は葉の形や、模様（斑）、実の色や付き方など多彩で、小型であれば多くの種類を保有できるというメリットがある（図 22，23）。

（3）水生アヤメ類

デボン州のジョン・カーター夫妻は、水生のアヤメ類のコレクションホルダーである。高齢になってきたため、危険分散も兼ねてローズムアに寄贈した。種類としてはイリス・フルバ（*Iris fluva* cvs.）、キショウブ（*I. pseudacorus* cvs.）、イリス・バーシカラー（*I. versicolor* cvs.）、イリス・バージニカ（*I. virginica* cvs.）、カキツバタ（*I. laevigata* cvs.）、ハナショウブ（*I. ensata* cvs.）の交配種などで、花は 3 月から 7 月が見ごろとなる。将来的にはローズムアがコレクションホルダーとなる可能性が大きい（図 24）。



図 20 黄金葉のシラタマミズキ（*Cornus alba* ‘Aurea’）は明るい葉色と冬の黄色い枝の両方が楽しめる.



図 23　イレックス・×コエネアナ（*Ilex* × *koehneana*）。栗のような葉と多くついた実が特徴 .



図 21　綺麗な斑入葉のコルヌス・アルテルニフォリア ‘アルゲンテア’（*C. alternifolia* ’Argentea’）は存在感も抜群.



図 24　アッパーボッグガーデンで開花するハナショウブやギボウシ.



図 22　モチノキ属のナショナルコレクションについてのパネル。葉と実にこだわって収集していることを伝える .

3． 所感

RHS が運営するローズムア・ガーデンは、植物園ではなく植物を楽しむための庭園 (ガーデン) という位置づけであるが、ほとんどの植物にはラベルが取り付けられており、また各エリアのアピールポイントについてのパネルも整備され、植物を学ぶ場としてもかなりレベルの高い展示であった。さすが園芸大国イギリスである。

特筆すべき点として、もともとローズムアの土壌は重粘土で水はけが非常に悪かったので、ここまでの庭園を作り上げるには排水や土壌改良に多大な苦労を払い、それは今も続いているとのこと。園の管理体制は、管理責任者（キュレーター）1 名、植物記録スタッフ 2 名、庭園スタッフ 20 名、研修生 3 名、ガーデンボランティア 50 名、その他のボランティア 30 名であり、いかに気候の良いイギリスでも、26ha の庭園を美しく管理するにはこのくらいの人手がかかるということなのであろう。

またナショナルコレクションについては、ローズムアの土地や気候に合わせたコレクションの形態をとっていたのが印象的である。広大な土地を生かしたダイナミックなミズキ属の植栽は、園内のいたる所でアクセントとして活躍している。小型なモチノキ属の園芸品種コレクションは、ちょっとしたスペースでも多品種を見せることが可能ということを実証しており、とても参考になった。園として無理なく有効活用できる植物コレクションを持つということも今後は必要だと考える。

ベネッツウォーターガーデン

Bennetts Water Gardens

名誉会員
兵庫県立大学緑環境景観マネジメント研究科
城山 豊

ベネッツウォーターガーデンは、イングランドのドーセット州にあるイギリス海峡に面した海辺の観光地ウェイマスに位置している。この辺りは、ジュラシックコーストと呼ばれる場所で、「古い場所で2億5000万年前に形成された地層が露出している。ここには、中生代にあたる三畳紀、ジュラ紀、白亜紀にできた地層が存在し、この地層が断崖を形成している」（ウィキペディアによる）。ユネスコの世界遺産にも登録されている地域でもある。

ガーデンは8エーカー（3.24ha）の面積があり、有料の民間の庭園である。入園料は大人8.5ポンド、子供4.25ポンドで、15人以上で団体割引がある。3月29日から9月30日の午前10時から午後5時まで開園している。土曜日は休園である。モネの池をイメージさせる木製の緑色の「ジャパニーズブリッジ」が池にかかっているが、園全体にモネの絵をイメージさせる脚色がしてある（図1）。イギリスでも日本同様「スイレンといえばモネ」という認識があるのかもしれない。中にはレストランがあり、私達はここで昼食をとった。2003年に、ガゼボを作ったそうだが、ウェディングでの利用を経営的に重視している様子がホームページの構成から見て取れた。

園内を案内し、質問に答えてくれたのは、ジェームズ・ベネット氏（図2）、彼は創設者であるノーマン・ベネット氏の孫で、現在は彼と彼の両親の3人でガーデンを経営している。ノーマン氏が戦後にロンドンからやってきて、レンガ用土の採取跡地を見てひらめいたそうだ。「ここでスイレンを育てよう」。この地域は、レンガ用のよい土がとれ、その採取のため50mまで堀られているところもあり、



図1　モネの絵をイメージさせるベネッツウォーターガーデン．

地下水が湧きだしている所もあった。これらの地形と地下水を利用してウォーターガーデンの製作を思いついたというわけである。現在も池の水は地下水を利用しているとのことである。池は全部で8個あり、高い位置にある池から低い池に水は流れ、一番最後の池がもっとも深く、中央部は3mの水深がある。オバーフローした水は、川に流している。

ナショナルコレクション対象となっているスイレンは、園芸種132、野生種8で合わせて140種類である。園芸品種はモネの時代の古い品種がほとんどで、耐寒性品種のみである。New Lily Pondという名前の池があり、ここには新しい品種が植えられていたが、残念なことに名札がつけられているものは少なかった。ただ、世界的に新しい品種がどんどん作出されている状況からすると新しい品種はさほ

ど多くないという印象である。このガーデンは、創設者のノーマン氏が力を入れて収集を行っていたそうだ。彼はまた国際スイレン協会の創設メンバーの一人であるとのことでもあった。他のコレクションホルダー同様、コレクションをしていた本人がなくなると後継者がいる場合でも同様の水準で維持することは難しいと思われた。イギリスでのスイレンは、20 年前はもっと人気があり、コレクションホルダーも 6 あったが、現在は 3 に減っている。

コレクションしているスイレンの栽培は、池の中で育てているもののみで、バックヤードはない。スイレンには写真のような（図 3）名札がつけられているが、中には札が見当たらない物もあった。野生種は捜してみたが、１つしか見つけられなかった。スイレンは直接池に植えられており、殖えすぎたものを取り除くという管理方法で維持しているという。また、1992 年には、`ウェイモス・レッド'という品種を育成したということなので、育種も行っているようである。スイレンは、屋外で栽培していれば、交雑し種子ができることもある。特に、野生種はよく結実する。基本的にスイレン品種の維持は根茎による栄養繁殖で行われるが、突然変異による枝変わりがでないとも限らない。屋外の池のみでの品種の維持は難しいと思われた。

スイレンの生育は旺盛で、大きな花が咲いていたが、施肥はしていないとのことである。土が肥沃であるということと自然の植物や動物から供給される養分のみであるとのこと。適地での栽培と考えられる。また、葉の状態はあまりよくない。これは虫害によるものと考えられるが、アップで写真を撮ると葉がきたないことが気になった。ただ、藻類や水草の除去を行った場合もその中に含まれる虫などの生き物が逃げて池に戻れるようにしばらく池のそばに放置するよう指導を受けているということだったので、自然環境に配慮し薬剤散布を控えていることも考えられる。

池の中にあるスイレンの品種チェックは、陸上の植物よりも困難である。コレクションの検査が 2 年に 1 回あるそうだが、審査官は一体どうやって行っているのか気になったので尋ねてみた。「調べには来るけれど、スイレンに詳しいわけではないので、こちらの説明を信用してくれるよ（若干ニュアンスが異なるかもしれないが）」ということであった。それはそうだろう、スイレンに限らず、コレクションホルダー以上にその植物に詳しい人がそういるとは思えない。質の保証はコレクションホルダーに任せざるを得ないと考えるのが妥当と思われた。



図２　ジェームズ・ベネット氏と日本風の橋．

このガーデンのパンフレットやホームページには、Plant Heritage や National Collection の名称やマークがよく出てくる。Plant Heritage がコレクションの質の保証として PR に使用されている印象を受けた。もちろん Plant Heritage's website へのリンクも張られている。Plant Heritage から認定を受けている機関が増えれば増えるほど Plant Heritage の知名度はあがり、Plant Heritage の権威も増していき、認定されることの価値も増加する。両者はそのような関係にあるのではないかと思われた。



図３　スイレンと名札．

ベネッツウォーターガーデン ホームページ
http://www.bennettswatergardens.com

英国のヘメロカリス事情

ポーリー・マーズ邸他

賛助会員
東京都建設局東部公園緑地事務所工事課
動物園整備担当課長　　小幡　晃

1．はじめに

ヘメロカリスとは、ノカンゾウ、ヤブカンゾウ、ニッコウキスゲなどワスレグサ属（*Hemerocalis*）の野生種または園芸品種を指す。野生種のワスレグサ属植物の分布域は、極東アジア地域ではあるが、アメリカで品種改良が盛んに行われ、野生種からは想像もできないほど派手で多彩な品種が生み出され、その品種数は３万と言われている（図１，2）。

今回の調査旅行９日間で、行く先々何処でもヘメロカリスが上手に植栽利用され、園芸ショップでは、ヘメロカリスの展示販売のコーナーをわざわざ設けており、英国でのヘメロカリス熱を見る思いがした。これが、英国のナショナルコレクションに位置づけられる理由の一つなのだろう。このため、本稿ではポーリー・マーズ邸のヘメロカリスに留まらず「英国のヘメロカリス事情」として報告する。

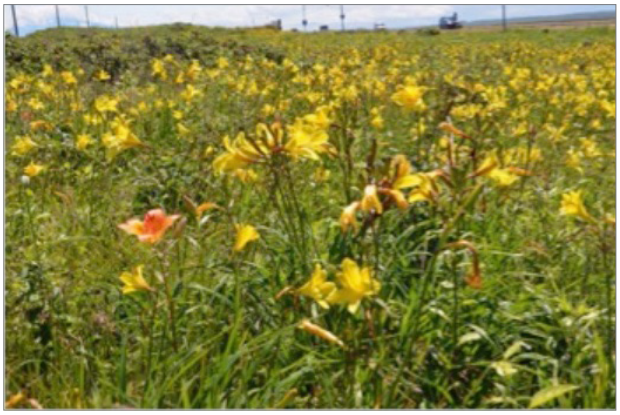


図１　濤沸湖岸の砂丘に群生するエゾキスゲ（鈴木三男前東北大学植物園長が、本年８月７日に撮影した写真を借用）．



図２　巨大輪化し派手な色彩となった品種の１例．

2．各訪問先のヘメロカリス庭園利用

各訪問先ではヘメロカリスを庭園で巧みに利用していた。各訪問先につき写真１枚を紹介する。



図３　サビルコートホテルにて．

7月４日（土）
サビルコートホテル
これから４泊するホテルに夕刻到着。夕食を摂る庭の一角にヘメロカリスが植えられていた（図 3）。



図４　ハンプトンコートパレスにて.

7月5日（日）
① ハンプトンコートパレス
　城の正門を入った庭の生垣の根占として、植栽されていた（図 4）。そのほか、ハンプトンコートガーデン周囲を囲むレンガ塀に沿ったボーダーガーデンにも使われていた。
② プラントヘリテージの特設テント
　ブルックフィールド・プラント（Brookfield Plant）という園芸業者が、ナショナルコレクションホルダーとして、テント中心にブースを構えていた。ヘメロカリス種苗を展示即売もしていた。後段にて詳述する。



図５　キュー植物園にて .

7月6日（月）
キュー植物園
　植込み地には多用されていたが、園芸種ということだろうか、種名板の付いていたものは見当たらなかった。キュー植物園の象徴パームハウス前庭の池に映える１事例を掲げる（図 5）。



図６　レディング大学植物園にて .

7月7日（火）
① レディング大学植物園
　同大学には、ハリスガーデン（Harris Garden）という植物園があり、予定外ではあったが調査した。ここでも、宿根草花壇材料として多用されていた（図 6）。



図７　ジョナサン・ホガース邸にて .

② ジョナサン・ホガース邸
　ホスタのナショナルコレクションホルダーの圃場にも、ヘメロカリスは植栽されていた（図 7）。



図８　ウィンザー・サビルガーデンにて．

③ ウィンザー・サビルガーデン、バリーガーデン
　谷合のやや陰地の宿根草花壇に上手に使われていた（図 8）。



図 10　マーウッドヒルガーデンにて．

② マーウッドヒルガーデン
　アスチルベをナショナルコレクションとし、園内花壇等に盛んに使われている。アスチルベと取合わせた花壇は見事だった（図 10）。



図９　アニタ・アレン邸にて．

7 月 8 日（水）
① アニタ・アレン邸
　マーガレットとブッドレアをナショナルコレクションとするここでも、ヘメロカリスがガーデンに活用されている。写真は、マーガレット（白）、ルピナス（青）にクリーム色のヘメロカリスを混植した植込み（図 9）。



図 11 パインコッテーッジプランツにて．

③ パインコッテージプランツ
　アガパンサスがナショナルコレクションの個人園芸家の圃場兼庭園にもヘメロカリスが各所に植え込まれていた。芝生園路のコーナーにアルストロメリア等と混植し印象的に演出している（図 11）。



図 12　ジョー・ハイネス邸にて．

7 月 9 日（木）
① ジョー・ハイネス邸
　シクラメンをナショナルコレクションとするハイネス邸は、ガーデンもなかなかのものだ。ヘメロカリスと他の宿根草が巧みに取合わせている。外花被片外側に褐色の筋が入る野生種に近い花の黄色ヘメロカリスに青いセージ、ゲラニウム、白いイングリッシュローズ、白いクレマチス等を取合わせていた（図 12）。



図 13　ローズムア・ガーデンにて．

② ローズムア・ガーデン
　英国王立園芸協会の所有の庭園だけあって、広大な敷地全てを完璧に設えており、その美しさは息詰まるほどであった。ボーダー花壇、植込み等各所にヘメロカリスは利用されていた。写真はアルストロメリア等と巧みに取合わせた花壇（図 13）。



図 14　ベネット・ウォーター・ガーデンにて．

7 月 10 日（金）
① ベネット・ウォーター・ガーデンズ
　スイレンのナショナルコレクションを持つベネット・ウォーター・ガーデンズにもヘメロカリスは使われている。写真は、入り口前庭の植込み地。ペチュニア等とアレンジされていた（図 14）。
② ポーリー・マーズ邸
　今回の調査の眼目であるポーリー・マーズ邸については後段にて詳述する。



図 15　ウィズリーのグラスガーデンにて．

7 月 11 日（土）
ウィズリーガーデン
　ローズムア・ガーデンと同様に英国王立園芸協会の所有のガーデン。ことヘメロカリスを取り上げても紹介しきれないほど多品種が多様に利用されていた。全てをご紹介はできないので、グラスガーデンの中での一例だけを紹介する。グラスガーデンの一種独特な爽快さはイネ科植物特有の細長い葉が醸している。ヘメロカリスの細長い葉はこの爽快さを阻害することなく、うまく取り合わすことが出来る（図 15）。

3．ヘメロカリスの展示販売

英国におけるヘメロカリスの普及の様子は以上の通りである。需要があるから当然供給も手厚くなる。訪問した庭園付随の園芸ショップでは、ヘメロカリスは特別な取扱いがなされ、ヘメロカリスの特設コーナーが設けられている。

1）ローズムア・ガーデンの園芸ショップ

「Harbaceous plants」、「Climbing roses」、「Bush」などの区分ごとの陳列をする中に、大きくヘメロカリスのコーナーが設けられている（図 16）。ヘメロカリスは品種名等が記載された銘板と商品が対照できるように並べられており、銘板には、品種名、栽培特性などが記載されている（図 17，18，19）。

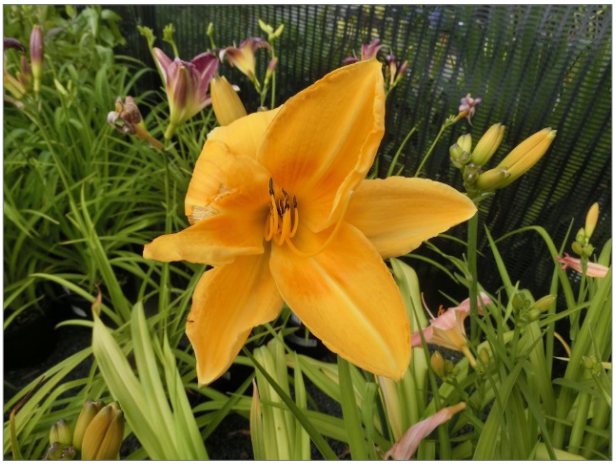


図 16　区分の表示．



図 18　銘板．


図 17　ヘメロカリスコーナー．


図 19　図 18 の銘板との対照商品．

2）ウィズリーガーデンの園芸ショップ

ローズムア・ガーデンと同じ、英国王立園芸協会が経営しているので、陳列方法は同様であるが、さらに売場面積、取扱い品目数が多いと見えて、上記区分の他、アルファベット順に配列されている（図20）。ヘメロカリスコーナーはローズムアよりさらに広い。大きな独立した看板まで掲げている（図21）。銘板と商品が対照して陳列してある（図 22, 23, 24）。



図 22　銘板 .



図 20　区分及びアルファベット表示 .



図 23　図 22 の対照商品 .



図 21　ヘメロカリスコーナー .



図 24　図 22 の価格ラベル .

4．ナショナルコレクションホルダーのヘメロカリス

調査対象のナショナルコレクションはポーリー・マーズ邸のヘメロカリスだが、ハンプトンコートフラワーショウのプラントヘリテージの特設テントにブルックフィールド・プランツ（Brookfield Plants）という園芸業者が、ヘメロカリスのナショナル・コレクションホルダーとして、テントの中心にブースを構えていたので併せて記述する。

1）ブルックフィールド・プランツ（Brookfield Plants）

プラントヘリテージの特設テントの中央、最も目立つところにブースを確保できるのは、ヘメロカリスが広く栽培され、英国内に普及していることであり、この業者がプラントヘリテージの中で有力と言うことだろう（図 25，26）。

この業者の概要やヘメロカリスの園芸利用的解説等を要領よくまとめた看板が掲出されていた（図 27）。ヘメロカリス及びそのナショナルコレクションについてまとまった情報が得られるので、拾い読みの訳を付ける。



図 25　テント中央を占めるヘメロカリスのブース．



図 26　ナショナルコレクションホルダーの表示．



図 27　ブースに掲出された看板．

① ヘメロカリスの植物ナショナルコレクション（図 28）
　王立園芸協会ガーデン・メリット (優秀品種) 賞（AGM）取得の園芸品種。2015 年3月ブルックフィールド・プランツのポール・ハリスに対し授与されたもの
○ 優秀品種賞（AGM）とは
　・受賞対象の植物の特性
　・賞はどうやって決められるの？
　・どの品種が AGM なの



図 28　ブースに掲出された看板 .

② ヘメロカリス（デイリリー）（図 29）
○ どんな植物なの？
○ 名前の由来は？
○ どこが原産地なの？
○ どんな色彩と花形があるの？
　公式に花形分類体系があり、それらは丸形（Round）、蜘蛛形（Spider）、二重形 (Double)、変奇形（Unusual form）である。
○ 栽培
　・植付け：春または初秋
　・花期：6、7、8 月
　・草丈：概ね 30 インチ、12 ～ 60 インチの範囲



図 29　ブースに掲出された看板 .

③ ヘメロカリス（図 30）
○ なぜ、ヘメロカリスを栽培するの？
　他の宿根草がダメになる夏中、花を絶やさず咲き続け、印象的なディスプレイを見せてくれるから。混植ボーダー花壇に大変よく合わせやすく、手間いらずだから。
○ ヘメロカリスは食べられるの？
○ 実生から育てられるの？
○ 病害虫で悩まされるの？
　ヘメロカリス瘤ブヨ（Gall Midge）はつぼみを膨れ上がらせ、変形させる。1989 年イングランド南東部で初めて記録され、以来国中に広がってきている
○ 瘤ブヨは制御できるの？



図 30　ブースに掲出された看板 .

④ ブルックフィールド・プランツ（図 31）

○　ケント州アッシュフォード所在

○　ホスタとヘメロカリスの専門業者

○　2015 年専門栽培家賞受賞、2014 年チェルシー等 10 か所のフラワーショウで金メダル受賞 英国ホスタ・ヘメロカリス協会（BHHS）の目指すところは、以下の通り。

・ホスタとヘメロカリスの知見を増やすこと
・ホスタとヘメロカリスの面白さや良さを増進させること
・ホスタとヘメロカリスの歴史を守ること



図 31　ルックフィールド・プランツの紹介．

2) ポーリー・マーズ邸

ポーリー女史が夫とともに、ニューフォレスの郊外の地でガーデニングを続けること30 年（図 32）。ここ 18 年間はヘメロカリスを栽培し、直近のカウントでは 1,500 品種が庭や圃場に植わっている。

女史の好みは、蜘蛛形（Spider）や変奇形（Unusual form）で、これらが、2004 年に認定されたナショナルコレクションを構成している。


図 32　ヘメロカリスとポーリー女史．

① エントランスおよび前庭のヘメロカリス

ポーリーのデイリリーと大書し、自信ありげな看板（写真 33）を掲げた入り口を入ると英国田舎暮らし風の自宅が見えてくる（写真 34）。圃場へと続く庭にもヘメロカリスが使われている（写真 35）。

② 圃場

面積は 1 エーカー（4,050㎡）でさほど広くはない。夫婦で管理するにはこれぐらいが限度かと思われる。見てもあまりわからないが、花色別に色分けをして畝を作っているとのことだった（図 36）。



図 33　入り口看板．



図 34　ポリー・マーズ邸 .



図 36　圃場 .



図 35　庭園のヘメロカリス .

③ ナショナル・コレクション等聴き取り内容

○ 現在 1,800 品種を収集し、そのうち 600 品種がナショナル・コレクションに認定されている。それらは、蜘蛛形 (Spider) と変奇形（Unusual form）である。

○ 此処でガーデニングを始めて 30 年経つ。ヘメロカリスを始めてからは 18 年経つ。

○ アメリカや欧州から品種を取り寄せているが、独自に育種もしている。交配は 7 月頃に行う。実生して 7 年目に開花し、それらを選抜して品種名を付けている。

○ 圃場は 1 エーカーあり、色別に畝を作っている。

○ ヘメロカリスは蕾が次々出るし、花は食べられる。

○ 2 月に地上部を刈り取り、株の大きいものはカタログに搭載する。3 月に大きい株は株分けを行う。残りはそのままにしておく。一度にはできないのと、圃場のディスプレーも必要だから。8 月に地上部を刈り取る。水やりはしない。9 月に鶏糞を施肥する。化成肥料は使わない。

○ ヘメロカリスに病害虫被害はない。

○ 品種管理のためのラベルは付けない。中には高価な品種もあるからである。圃場を図面化し畝と品種を記載した植栽位置台帳を作り、品種管理を行っている（図 37）。

○ 作業は、主人と私が行っている。

○ ヘメロカリスに手のかからない冬の間の仕事は、本業の公認会計士だ。年度末である 1 月はその仕事で結構忙しい。

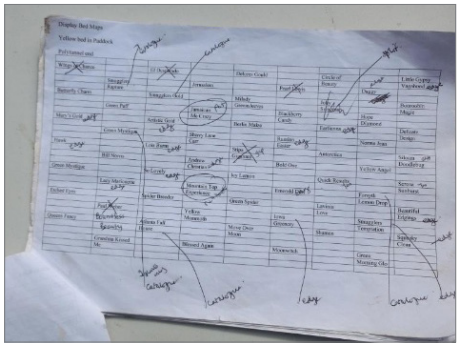


図 37　植栽位置台帳 .

④ 蜘蛛形（Spider）、変奇形（Unusual form）ヘメロカリスとは

ブルックフィールド・プランツのブースにあったヘメロカリスについての解説看板の記載に、ヘメロカリスは花形による公式分類があり、それらは丸形（Round）、蜘蛛形（Spider）、二重形(Double)、変奇形（Unusual form）とされ、写真も対照され、よくわかる。ポーリー・マーズ女史は、特に蜘蛛形（Spider）と変奇形（Unusual form）にご執心で、彼女のナショナルコレクションはこの2形の品種のようである。蜘蛛形はササガニユリ（ヒメノカリス）（ササガニ《笹蟹》とは蜘蛛の古語）の花を思えば、理解もできるが、変奇形はどうもわからない。女史に訊いても、「花弁の長さが幅の4倍以上で云々」とか要領を得ない。我々の怪訝そうな様子を見るや女子は、自宅から1枚の横断幕を出してきた（図38）。2013年のプラントヘリテージ創立35周年記念行事に使ったようで、蜘蛛形と変奇形の解説である。

さらに、変奇形の細区分である、捩じり摘まみ折られ形（Crispate）、縮み（Pinching）、懸崖（Cascade）へら形（Spatulate）の説明書と図を出してきた。

こんな特別なものを作ったのは、この2形はヘメロカリスを趣味とする人には理解でききても、門外漢にはやはり理解しがたいからなのだろう。解らないのは何も我々ばかりではないのだ。その植物を趣味にする人にしかわからない、独特の価値、評価視点があるのは、何と万年青や春蘭等日本の伝統園芸植物と同じではないか。ユーラシア大陸を挟む両島国に共通の傾向があるのは、実に面白い。

ⅰ．横断幕

以下、この横断幕の部分訳を付ける。

ヘメロカリス（デイリリー）―蜘蛛形と変奇形とは

○ 分類―蜘蛛形と変奇形のデイリリーはより平開しより長く、幅狭い花弁が特徴である。そしてその花弁は、巻き縮れ（crispate）（捻じれ(quill)、縮み（pinch）、屈曲（curl））、懸崖（cascade）そしてへら状（spatulate）がある。さらに新しい品種のいくつかは、これらの特徴のいくつかまたは全てを複合させた花容を見せる。それらは、咲き進むにつれ目に見えて変化する。

○ 蜘蛛形（Spider）（図39）
幅の最低4倍以上ある長さの花弁を持つ形

○ 懸崖（Cascade）（図40）
花弁の先が反り返り、ねじれる

○ 捩じり摘まみ折られ形（Crispate）（図41）
捻じれる、縮む、屈曲する（curl）、巻き縮れる（crispate）

○ へら形（Spatulate）（図42）
幅広の部分があり、先端は丸い

ⅱ．説明書と図版

コレクターの常で、自分の得意分野のことを聞かれると話が止まらなくなる。

横断幕に加え、ダメを押すように説明書（図43）と図版（図44）を出してきた。ブルックフィールド・プランツの看板も含め、ヘメロカリスの花形、特に変奇形について、大分錯綜してきたので、全てを総合した表を作った（表1）。

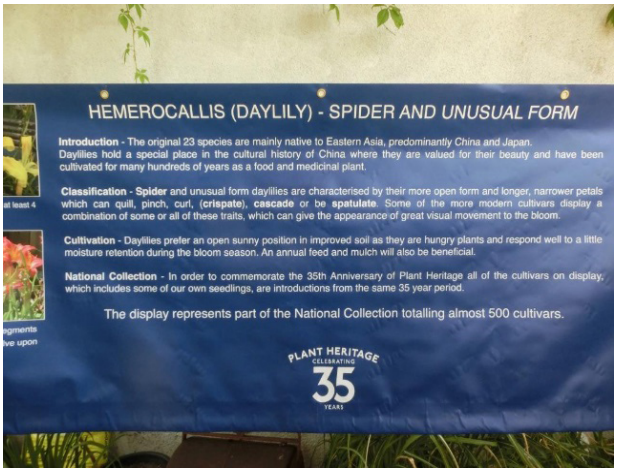


図38　プラント・ヘリテージ創立35周年記念横断幕.

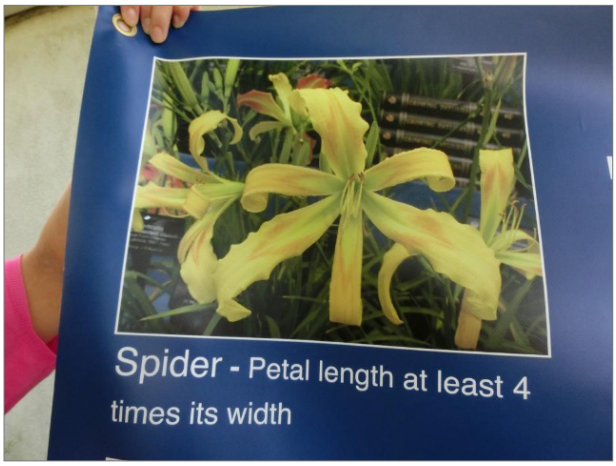


図39　蜘蛛型.

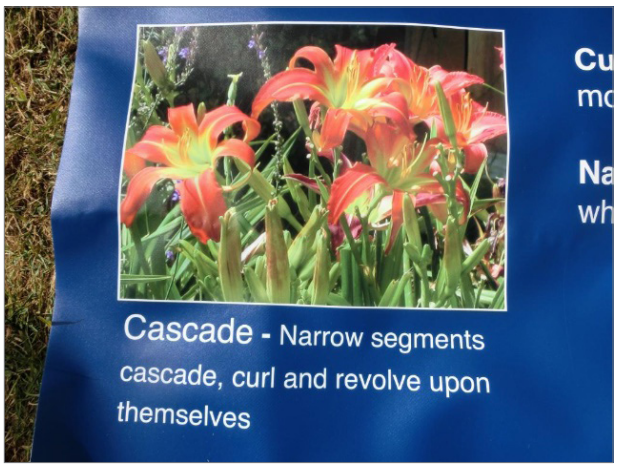


図 40　懸崖 .



図 41　捩じり摘まみ折られ形 .

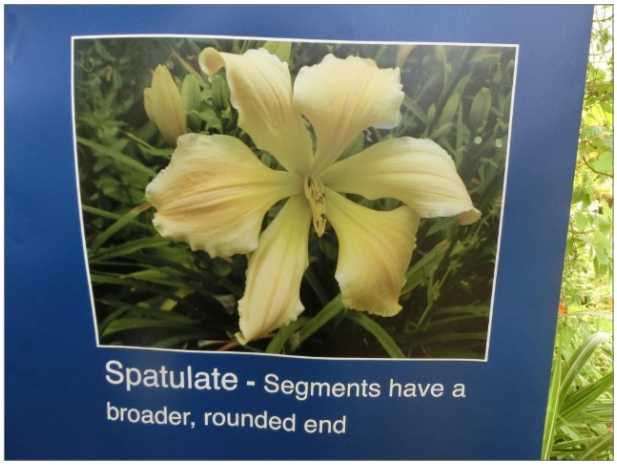


図 42　へら形 .

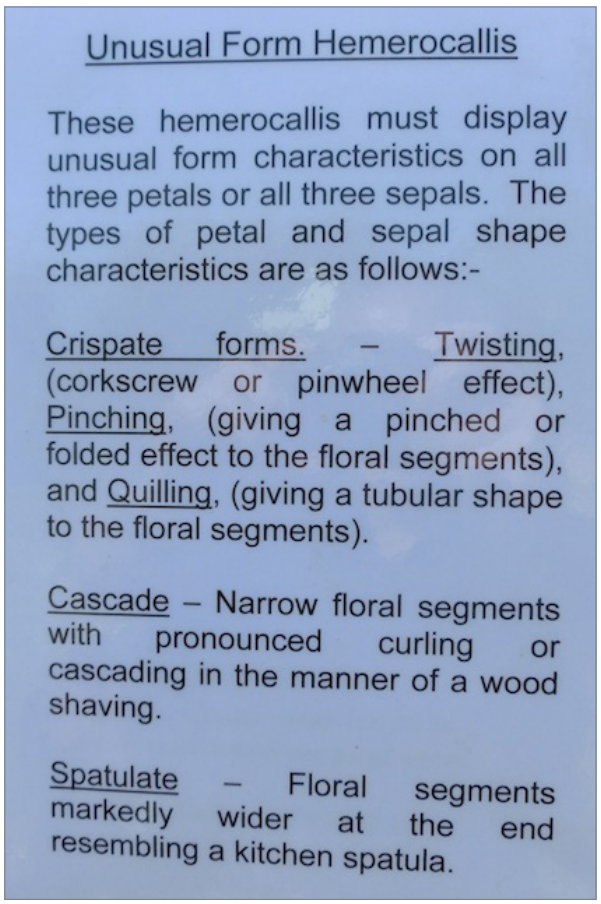


図 43　説明書 .



図 44　図版 .

表1　ヘメロカリスの公式花形分類体系（Official Classification system for flower forms）

名　　称			内　　容	容例
Round（丸形）			6つの花被全てが幅広で、花被間に隙間がない	
Double（二重形）			雄蕊またはし雌蕊が弁化した二重咲き	
Spider（蜘蛛形）			幅の最低4倍以上ある長さの花弁を持つ	
Unusual form（変奇形）	Crispate（捩じり摘まみ折られ形）	Twisting（左右に捻じれ）	花弁に螺旋の効果が現れる	
		Pinchng（摘み折られ）	花弁に摘み折られ効果が現れる	
		Quillimg（管状巻）	花弁に管状巻き効果が現れる	
	Cascade（懸崖）		著しく屈曲（curl）し、鉋屑のように垂れ下がる（cascade）細い花弁	
	Spatulate（へら形）		しゃもじのように末端が著しく幅広な花弁を持つ	

5．おわりに

日本の伝統園芸植物における趣味家は、それぞれ万年青なら万年青、春蘭なら春蘭のグループの中で、門外漢には一寸わからない独自の価値観、鑑賞視点をもっており、その中で「芸」を愛でている。所謂「好事家」である。

英国のヘメロカリスの趣味家（英国ホスタ・ヘメロカリス協会（BHHS）会員のうちヘメロカリスのコレクター）も、花のほんのちょっとした変化に価値を認め、鑑賞を楽しんでいる。これはまさに「芸」を評価していることに他ならない。今回の調査の収穫は、英国の園芸家も実は、「好事家」であることが分かったことだ。

王立ウィズリーガーデン

渋谷区ふれあい植物センター

宮内元子

1．王立園芸協会

エリザベス女王が総裁を務める英国王立園芸協会は、英国王立典法による特別公益法人で、1804年に実業家のジョン・ウェッジウッド、植物学者のジョセフ・バンクス、キューガーデン監督のウィリアム・タウンゼント・エイトン、育苗家で植物学者のジェームズ・ディクソン、海軍卿チャールズ・フランシス・グレヴィル、ケンジントン宮殿の庭園監督ウィリアム・フォーサイス、協会参事のリチャード・アントニー・ソルズベリーの７名によって設立されたロンドン園芸協会を前身とする団体である。本部は英国ロンドンのビンセントスクエアにあり、世界中に約 40 万人いる会員に園芸や植物に関する様々な情報を発信し、園芸普及のための活動を行っている（図 1）。主な活動は以下の４つ。

1. 園芸品種の収集・展示：世界中の植物の中から園芸品種の収集・調査と植物の特性に応じた植栽展示。ガーデンショーの開催。
2. 園芸教育活動：世界中からの園芸専門家のインターンシップ受入、児童向け学校教育プログラムの実施、愛好家の資格取得促進。
3. 研究推進：園芸科学に基づき、病害虫、植栽管理、同定など園芸に関わる問題点を分析。また庭園デザインなどの研究を実施。
4. 販売による普及啓発：植物や庭園に関する図鑑、参考書などの出版と、園芸用品や植物苗の販売促進。



図１　RHS 会長ニコラス・ベーコン卿（右）とジム・ガーディナー園芸ディレクター（左）.



図２　ウィズリーガーデン入口.

2． 概要

ウィズリーガーデンはロンドンの南西、ヒースロー空港から車で約 30 分のサリー州に位置している。英国王立園芸協会が管理する最古の庭園であり、敷地面積は 88ha、年間入園者数はおよそ 120 万人（図 2)。ウィズリーの他に園芸協会が所有するガーデンはローズムアガーデン、ハイドホールガーデン、ハーロウカーガーデンがある。

ナショナルコレクションは、カルーナ（*Calluna vulgaris*)、クロッカス属（*Crocus*)、ダボエシア属（*Daboecia*)、イカリソウ属（*Epimedium*)、エリカ属（*Erica*)、ルバーブ（*Rheum*）レッドカランツ（*Ribes rubrum*)、グーズベリー（*Ribes uva-crispa*)。

1878 年に、実業家・科学者・発明家・園芸家であったジョージ・ファーガソン・ウィルソンがウィズリーガーデンの元となるオークウッドの土地を買収し、「かしわの森実験園」が作られた。この園はユリ、リンドウ、日本のアイリス、サクラソウ、水生植物をコレクションし評判を得た。現在ウィズリーガーデン内の「ワイルドガーデン」がウィルソンの概念に基づいた庭園として忠実に維持されている。1902 年のウィルソンの死後、イタリアの実業家トーマス・ハンベリーが実験園と隣接している土地・農場を買い取り、1903 年に王立園芸協会に寄贈した。

3． 主な施設・区域

ウィズリーガーデンの広大な敷地は、主に 17 の区域に分けられておりそれぞれ、カントリーガーデン Country Garden、ミックスボーダー・ガーデン Mixed Borders、バラ園 Bowes-Lyon Rose Garden、見本庭園 Model Gardens、ハーブ園 Herb Garden、果樹園 Fruit Demonstration Garden、高山植物展示ハウス Alpine Houses・見本菜園 Model Vegetable Garden、ロックガーデン Rock Garden、高山草原 Alpine Meadow、壁面ガーデン Walled Gardens、ヘザーガーデン Pinetum & Howard`s Field、運河 Canal & Loggia、図書館 Garden Library、研究棟 Laboratory、温室 Glasshouse、栽培実験圃場 Trials Field である。

ナショナルコレクションはそれぞれの区域の中に植栽の一部として展示されており、カルーナ・ダボエシア属・エリカ属は園の北部にあるヘザーガーデンで、イカリソウ属はロックガーデンとワイルドガーデンで、クロッカス属は高山植物展示ハウスで、ルバーブ・レッドカランツ・グーズベリーを果樹園で見ることが出来る。

植物の説明は、王立園芸協会ホームページ https://www.rhs.org.uk/ で見ることができる。

ミックスボーダー・ガーデン

入口からラボラトリーを背にして左手のバトレストン・ヒルを横切る長い宿根草の混植花壇。南北に幅 5.5 m、長さ 130 mで一直線に配置され、宿根草・灌木類・蔓性植物で構成される。長期にわたって定点で写真が撮影され、植物の生育状況や色･形･テクスチャーの組み合わせ、管理方法が検討される。日本では高木として扱われるキリの木が花壇材料に使用されているのが印象的であった。葉の形が印象的で、背景に使うと緑色が美しいという理由で毎年、強剪定して樹高を低く維持するという説明があった（図 3，4)。



図３　ミックスボーダー．



図４　ミックスボーダー．

試験栽培圃場

協会の主な事業の一つであるガーデン・メリット賞（AGM：Award Garden Merit）を認定するため、園芸品種の植物の特性の比較栽培が行われる圃場である（図 5，6）。賞は毎年委員会で判定され、栽培試験の時期は種類によって様々で一年または数年間に及ぶものもある。試験結果の報告はレッドブックと呼ばれる冊子と協会のウェブサイトで公開される。多くの育種家が AGM 受賞を求めて、毎年多くの植物の応募がある。受賞品種はその後、入手可能であるか、またその品種よりも優秀な新品種が無いか定期的に再検討される。ガーデン・メリット賞の交付条件は次のとおり。

- 園芸業界で入手可能であること。
- 庭植えもしくはその他利用の植物として抜群に優秀であること。
- 性質が良いこと。
- 高度な栽培テクニックや、特別な生育環境を必要としないこと。
- 特定の病害虫がないこと。
- 隔世遺伝が不適切な程度に発生しないこと。

目新しい新品種ばかりを追うのではなく、優秀な品種を評価し維持していくことのメリットが、AGM の受賞を通して保持されるのは、生産者と栽培者のどちらにとっても良いことであり、ナショナルコレクションという文化を浸透させるのに一役買っているのではないかと感じさせられた。



図５　試験栽培圃場の解説板．


図６　スイートピーの試験栽培．

果樹園

ナショナルコレクションの内、100 品種のルバーブ（図 7）やレッドカラント（図 8）、グーズベリーのコレクションが植栽されている他に、700 種のリンゴ（図 9）、175 種のナシ・ブドウ、100 種のプラムなどを見ることができる（図 10）。多くの果樹の品種を楽しむ他に、様々な仕立て方が展示されている。第二次世界大戦直後には、果樹の膨大なリンゴのナショナルコレクションが保持されていたが、現在はレディング大学に移植されており、より優れた品種のみを選抜して栽培している。

温室

2004 年に協会創立 200 周年を記念して約 880 万ポンドをかけて建築された巨大なガラス製の聖堂のような温室は、面積 3000㎡で高さ 13 m。熱帯・温帯・乾燥帯の気候が再現され約 5,000 種の世界中から集められた植物が展示されている（図 11，12）。一つ一つのエリアが独立しないように繋がりを持たせた植栽展示が工夫されている。階段下の空間には暗さを利用した展示で地面の下について紹介された学習展示 Root Zone が設けられており、根や土の構造などについて学習することが出来る（図 13，14）。



図7　ルバーブ　ナショナルコレクション．



図 11　温室全景．



図8　レッドカラント　ナショナルコレクション．



図 12　サバンナゾーン．



図9　リンゴの仕立て見本．

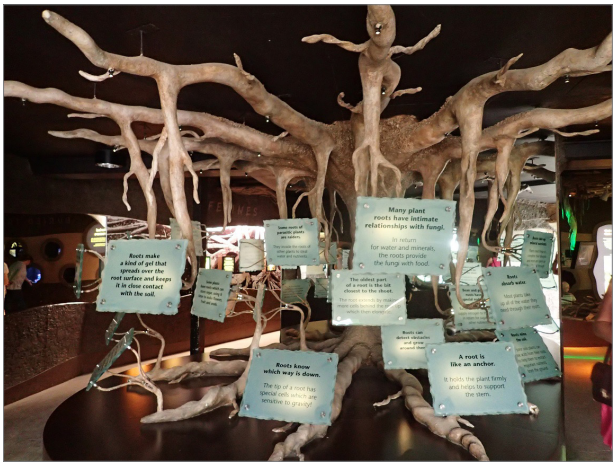


図 13　学習展示 RootZone．



図 10　果樹園全景．



図 14　学習展示 RootZone．

4．所感

王立ウィズリーガーデンは、王立園芸協会の「園芸や植物に関する様々な情報を発信し、園芸普及のための活動」という目的に対して的確に運営されていることが、展示や様々な事業内容、ガーデンショップの販売品等から実感させられた。英国を代表する文化である園芸は老若男女に浸透しており、多くの人が庭園を鑑賞する事・植物を育てる事・庭を作る事を心から楽しみ、更に自分のスキルを上達させたいと感じているのに対して、ウィズリーでは単なる植物の展示に留まらず、庭作りに関する様々な見本やアイデアが紹介されており、見学者のニーズを確実にとらえていることが分かる（図 15，16，17，18，19，20，21，22）。

ナショナルコレクションの取り組みに関しては、長期的な計画のもと国内にとどまらずヨーロッパ内での連携が密にとられていることに驚かされた。また英国の人々の情熱的な関心の高さも特筆すべき特徴であろう。その中で英国の庭園として確立された地位にある王立ウィズリーガーデンの存在は大きく、ナショナルコレクションの活動を牽引していく存在の一つである。公開している庭園の中で効果的に植栽することにより、統一感のある美しさやコレクションを保持することの楽しさをアピールすることが出来ていて、見学者の関心をさらに集めることに成功している。しかし一方で、限界を感じさせられる個人コレクターの取り組みを知ると、今後、コレクションの維持が公立の庭園や植物園への業務としてのしかかってくることも危惧された。日本の場合、趣味家や愛好会などの市民団体を精査し、コレクションへの責任が一人のコレクターにかたよることなく、植物園や行政、研究機関と連携して地域性を持った団体で保持するような方法も考えるべきだろう。

今後、日本の植物園がさらなる発展を遂げ、ナショナルコレクションに似た取り組みが計画される中で王立ウィズリーガーデンの体制や方法は大いに参考すべきであると感じた。

Royal Horticultural Society`s Garden Wisley
住所：Working,Surrey,GU23 6QD　UK
ホームページ：https://www.rhs.org.uk/gardens/wisley



図 15　ロックガーデン．



図 16　ロックガーデン　センペルビウム寄せ植え．



図 17　教育園の案内看板 .



図 20　芝生の模様刈り .



図 18　教育園 .



図 21　植栽解説 .



図 19　子供用アスレチック広場 .



図 22　Canal & Loggia .

Ⅳ．個別テーマ

英国でナショナルコレクションホルダー活動が盛んであることを考える

名誉会員

田中俊弘

今回の調査では、多くの個人や組織のナショナルコレクションホルダーに会うことができた。個人でコレクションを完成させること自体大変な努力が必要であり、さらにコレクションを優れた技術で活かし続けるには多くの苦労の積み重ねが必要となり尊敬に値する。でもこれを引き継ぎ持続させるには、更なる工夫と努力が必要である。英国の文化として地球規模の基準と連携組織を作るのは得意である。しかし、個人のコレクションでは拒むことのできない、オーナーの加齢という問題が致命的な条件になる。一方で国、公、企業などの大きな組織で構築したコレクションは、財政的には安泰であるが、経営主体の意向で経営が行われるのは当然であり、この経営主体に、理解を得るために永続的に説明を続ける必要がある。以上の観点から特徴的なコレクションホルダーを考えてみた。

Mr. J. Hogarth 邸

新しい場所に引っ越してきた際に邸に残されていたギボウシ属（*Hosta*）を育て、さらに収集を継続して多くの品種を集め、2 年前にナショナルコレクションに認定された。ギボウシは鉢植えが良いという彼の考えで、小型およびミニチュアの種類を庭の棚沿いに並べておられる。日本の建売戸建て住宅の 3 ～ 5 倍ほどの、日本からすれば広いけれど、周辺の住宅に比べれば普通の広さの庭に、所狭しと鉢植えが並べられている。様子を察するに、日本でいえば定年後しばらく経過した老夫婦だけの生活のようで、定年後にこの地に引っ越してこられたのではないかと察した。昨今日本で問題になっている定年後の過ごし方の、とくに知的な過ごし方の一つの見本であると思われる。

庭のコレクションを拝見した後で、家に招かれ、お茶とクッキーをいただいた。多分通常は老夫婦には広すぎるダイニングキッチンであろうが、個人の家に多人数で押し掛けたので狭くなってしまったテーブルを囲んで、手作りのクッキーと普段使いのカップでお茶をいただき、温かい感じがしたし、ナショナルコレクションホルダーとしての生活を楽しんでおられる感じであり、肩に力が入っていなくて長続きしそうな印象を受けた。寿命が永遠でありたいのは人の常であるが、老夫婦であることから、これを次の世代にどうやって引き継ぐのかが大きな課題となる。英国の貴重な伝統的な園芸植物の保存活動にこのような人たちの格別の協力が得られるということは活動にとって鬼に金棒である（図 1）。



図 1　Mr. J. Hogarth 邸のギボウシ（*Hosta*）コレクション .

Mrs. Anita Allen 邸

Devon 州にあるプライベートガーデンコレクション。邸の前で車から降りると、日本で言えばブナの葉が目に入った。種類が違うのかもしれないが、ブナにそっくりな樹木である。緯度から考えれば、この地は年間の平均気温や最高気温が低いことになっているが、年の最低気温が比較的高く、降水量も多いことで植物に有利な点も考えられる。ここでは、ブッドレア、マーガレットがコレクションされていた。17 年前に 200 エーカー（80.94ha）の農地を手に入れてこの地に移り住み、現在は息子さんが農業を営んでおられるようである。詳細は尋ねていないが、周辺には広大な放牧地が広がっている。200 エーカーのうちで 3 ～ 4 エーカーをナショナルコレクションやガーデニングに使用している。彼女は、幼少のころ家庭の事情もあって、マーガレットを摘んで花束にして街で売って自分の欲しいものを購入していた。それもあってか、現在のコレクションにつながっている。コレクションの、特に花の押し葉を作って植物全体の写真とともにアルバムに貼り付けて記録としているように、熱心なナショナルコレクション活動家である。

このたびのわれわれの訪問を受けるにあたって、掘っ立て小屋をしつらえ、シャンデリア風の電灯まで準備されようとした節があり、ナショナルコレクションとわれわれの訪問に対する格別の熱意を感じることができた。

一応の座学とガーデンの巡回の終わりに、ガーデンに案内された。図 2 の写真の印象では、英国のイングリッシュガーデンそのものである。さらによく見ると、すべてが栽培品種、あるいは外国から導入したような植物で作られている。話を聞くと、何年か前には谷川の流れる雑草の茂る場所、古い壁のはがれた家があったのを、このようなガーデンに仕上げたそうである。写真に写っている、剥がれそうになった壁を見ると、日本にもありそうな、雑草の茂る小さな渓流に立つ壁の落ちた古い小屋を想像した。この場所のビフォアー・アフターを考えるとき、その技術の素晴らしさを実感できる。言葉通り「古い壁の小屋」が、「古びた壁の小屋」になっている。日本で言えば「廃屋」が「古民家」になったようである。たぶんクライアントもなく、自分の創作エネルギーだけで作り上げることは、想像を絶する苦労が存在する。すばらしいナショナルコレクションを維持するエネルギーがここにあらわされている。マーガレットとブッドレアのコレクションのすばらしさもさることながら、これこそが彼女のエネルギーの源とであると感じることができた。大都会から地理的に離れており、多分訪れる人も少なそうな環境で、これほどのクオリティーを維持し、磨き上げようとする活動がコレクションを支えている。



図 2　Mrs. Anita Allen 邸のガーデン .

Bristol Community Plant Collection

この仕組みのリーダーは、Bristol Zoo Gardens の職員であるが、プライベートでナショナルコレクションの活動をされているようである。その一環として、動物園でもコレクション活動をされているようである。Hampton Court Flower Show での展示を拝見した内容から考察してみることにする。

説明と展示から推察すると次のようになる。日本語で言うとキンセンカと呼ばれる植物をコレクションするのに、個人や単独の組織ではなくて、この町に存在する小学校、公園、個人やガーデニングのグループなどが集まってナショナルコレクションホルダーを形成している。

今回調査を行った英国のホルダーは、ほとんどが個人、植木屋などの企業、公園や植物園などであった。注目する人は少なかったが、その中でもこの団体だけが異色であった。ナショナルコレクション活

動の継続性という点では、個人、企業、植物園のそれぞれに決定的な弱点が存在する。個人ではいかんともしがたいヒトの寿命、企業では採算性、植物園では Kew Garden の経費節減やリストラの苦しみに象徴されるオーナーの意志というのがそれである。それらの決定的な、重要なポイントがぼやっとしているのがこのネットワーク型の、あるいは市民活動型の活動である。ポイントがぼやければ、弱点もぼやけるわけである。しかしこの方法にも、いずれウイークポイントが焙り出されるかもしれないが、筆者の注目した活動として記しておきたい（図 3）。

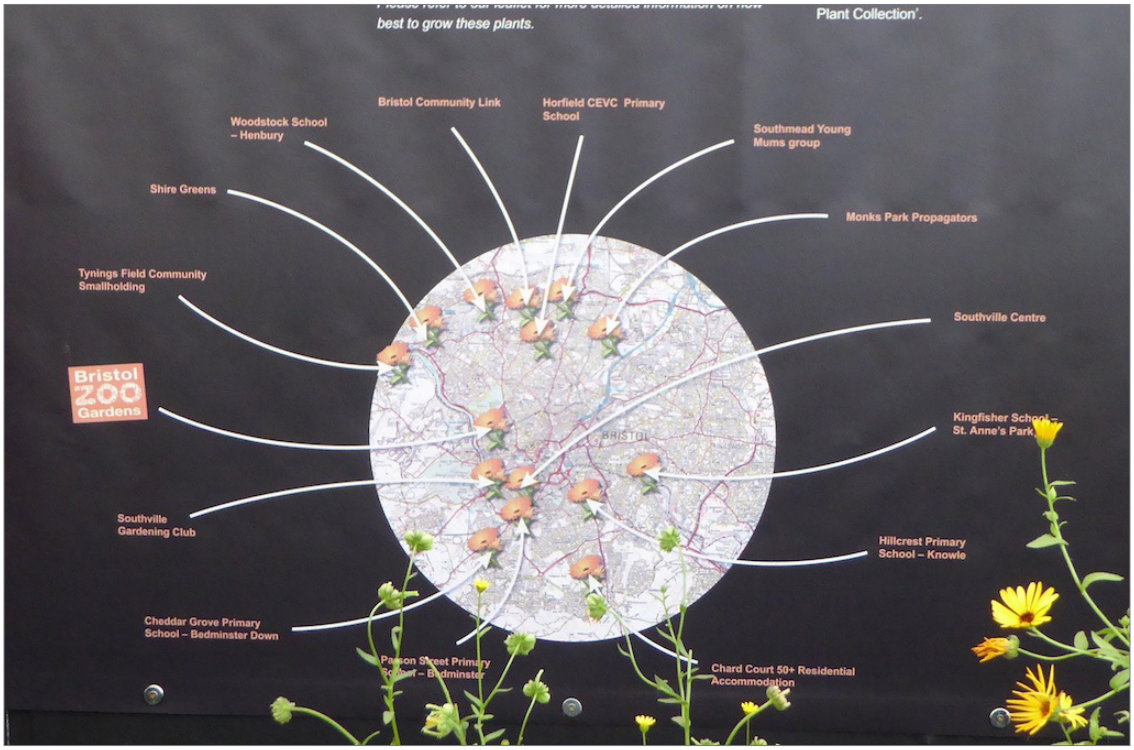


図 3　Bristol Community Plant Collection .

英国調査行でわかったこと

名誉会員

鳥居恒夫

1．参加の目的

私が今回のナショナルコレクション調査行に参加したいと考えたのは、学生時代に気がつきこれまで半世紀あまり見聞きし、考え、収集栽培に努めてきた栽培・園芸植物保存の考えと方法が、この分野の先進国と聞く英国の実情と同じなのか違うのかを確かめたかったからである。ただすでに退職して 15 年もたつ隠居なので、現役の人たちの邪魔をしないようにと、定員に余裕があればと考えて、締め切り期日まで申し出をしなかった。事務局に聞いてみると満杯だという回答だったので、ご縁がなかったと諦めていたが、事務局から隊長の倉重さん、英国でお世話をしてくださる老川さんのご努力で参加させていただけることとなり、得難い機会を得たことに感謝している。

77 歳の私が最高齢と聞き、6 月下旬の植物園協会 50 周年総会参加直後で準備不足、体調も充分とは云えない状態で出発したが、若い人たちのパワーをいただいて落伍もせず、元気になって帰国することができた。

私には調査の特別なテーマを与えられていなかったので、先にお話した私の考え方が英国の実情と合うのか合わないのかを考え、また全体にわたって気のついたことをまとめることとした。

2．ナショナルコレクションの問題点

ナショナルコレクションは、人類の文化である歴史的な栽培・園芸植物を収集保存するために始まったと理解している。英国ではこの制度が発足したことにより、植物園や園芸会社、個人の収集家がそれまで収集したコレクションに対して、公的な評価、格付けを与えられるということが、現時点では一番の眼目になっているように思われる。

従来から熱心で経済的にも力のある園芸愛好家は、自分の好きな植物の変異を収集、品種改良も行なってきている。このようなコレクションに対して一つのお墨付きが与えられることが、園芸家としてのステータスとなっているようにも感じられる。園芸会社や農場では、ナショナルコレクションの一つでも持つことが、その企業の格付け評価にもなるのであろう。

他人とダブラないように一つの植物を選び、その変異を短期間に収集する例もあるようで、長く栽培されてきた植物だけが対象になっているわけでもないように感じた。また、コレクションの内容は、1 種内の変異である品種に限らず、同属内の様々な種や交雑品まで含まれていることは、種間交雑による植物育成の盛んな欧州では当然のことと思える。

評価の定まった歴史的な品種ばかりでなく、新品種も数に入っていることには、はたしてそれでよいのかという疑問を感じる。しかし、あるヘメロカリスのコレクションでは、試験機関の栽培試験で評価を受けた育てやすい優良花を対象にしていると聞

き、歴史的な経過以外にも公的な評価を取得したものを対象にするという考えは、納得することができる。

保存栽培もさまざまで、農場や個人の庭園では、整然とした栽培は例外的で、この中にコレクションがありますというような、混植とも見える状態のものもあった。

このようなレベルも態勢も様々な多様なコレクションの実態を見聞きして、これを審査・指導することの大変さを思い、この制度はまだ試行の段階であると感じた。担当者との懇談では、コレクションを維持する後継者や運営を助けるボランティアの不足が提示され、若い世代の園芸離れは日本だけでなく、英国でも深刻な問題となっていることを認識した。

3．保存についての私の考え方は合格

参加の目的であったサクラソウで行なってきた私の品種保存の考えとやり方は、英国の実例を連日見聞するうちに、充分通用するという自信が膨らみ、旅の終り頃には確信を持つようになったことをご報告しておきたいと思う。日本でナショナルコレクションの制度が発足すれば、サクラソウの品種保存はすぐに認定される態勢が出来ているという私なりの結論を得ることができた。

ただこのような植物の保存栽培を行なってきた人たちは、いずれも高齢者が多く、早く発足しないと後継者への引継ぎができなくなる恐れがある。私自身としてもまだ動けるうちに、植物園活動の最後の仕事としてこれを実現させたいと覚悟を定めた次第である。

4．デボン州コレクターとの交流

RHS のローズムアガーデンでは、園内見学のあとで、デボン州の熱心なナショナルコレクション保持者に迎えられ、お茶をいただきながらの懇親の機会が設けられた。

私がお話を交わしたのは Penny Jones さんというご夫人で、サクラソウの収集家である。英会話ができない私には、同行の大木宣子さんがつききりで通訳をして下さり、そのお陰で意見を交換することができた。私はまず持参した「桜草」のカラー図譜を贈呈し、日本における現在の活動を説明した。これに多くの時間を費やしてしまったために、英国の状況については充分に理解することはできなかったが、英国にもサクラソウの園芸品種を栽培するコレクターが存在することがわかり、今後の文通による交流の糸口が付けられたことは大変な成果であった。

話の中で一つ明確にわかったことがあった。それはサクラソウの花形についての英国における評価の問題で、英国では日本で平咲と呼ぶ、花冠が平面に伸びるタイプのものが好まれ、抱え咲や掴み咲というような複雑な花形は評価されないという。Jones 夫人によればフラワーショウに、様々なタイプの品種を出展したところ、審査員にプリムラ・アウリクラ（*Primula auricula*）のコレクターがおり、アウリクラの審査基準に従って審査されたために、日本のタイプのサクラソウは評価を受けることができなかった。しかしそのような見方には納得できないので、改善されるように運動したいということであった。

私からは日本での桜草園芸は 300 年の歴史があり、多様なタイプの園芸品種が育成され伝えられており、私達のかけがえのない財産であり、現在 320 品種を特定して保存栽培して、品種改良も盛んに行なわれ、従来の品種を凌ぐ優良花を選んで新品種として評価していることを紹介した。また花期には 5 段の棚に花形と花色を考えて並べ、全体としての美しさを見せる伝統的な鑑賞法も引き継いでおり、植物だけでなく栽培や鑑賞方式も、一体として保存していることも話した。夫人からはこの「桜草花壇」の陳列法はぜひやってみたいと、非常に関心を示されたことも印象に残ることであった。

栽培中の品種の写真を送るので、同定して欲しいという申し出もあり、まずそのことから交流を始めましょうとお約束してお別れした。

5．緑溢れる田園

英国の旅は２度目であったが、都市の中心にはほとんど行かなかった今回は英国の本来の自然風土を満喫できた良い機会だった。首都ロンドンから車で 30 分も走ると田園に囲まれたウィンザー城があり、それに連なる森林と牧野の中にある石造りの Savil Court Hotel に 3 泊できたことは、生涯の思い出となった（図 1）。昔はこの地方の貴族の館だったのだろうが、広い草地にはオウシュウナラやヨーロッパブナの大木が枝を広げ、野ウサギが跳ねまわるという説話の世界、なかなか暮れない長日の明かりの下で、木や草の枝を取ってきてスケッチに励んだ（図 2）。一つ気がついたのはヒースロー空港を発着する飛行機の音が始終することで、その度に現代に引き戻される感じがした。

車が行き交う道路も、馬車の時代そのままかと思うほど巾が狭く、両側には雑木が茂り合ったヘッジ（hedge）が延々と続くのに驚き、あれは田園交響曲の世界であったかと後で思い当たった。

ロンドンの中心にも大きな公園や緑が溢れ、近郊にこんな自然豊かな環境が存在する英国では、日本で私たちが苦労して取り組んだ都市緑化の問題などは存在し得ないとも感じた。ロンドン近郊でもこの状態なので、さらに西南のデボン州まで行くと、丘陵が連なり雑木林に牧野、狭い道路にヘッジという景観に、日本の照葉樹の濃い緑の植生と異なる風土というものを深く感じた（図 3）。

6．キュー植物園

キュー植物園には始めての訪問で、私にとっては最初で最後の機会となったと思う。日本の植物園職員の訪問であることと、老川さんが培われた実績と人脈による特別な配慮により、主要な園地の案内だけでなく、バックヤードの栽培温室、図書室、標本庫まで見せていただけたことに感激した。園内はあまりに広くて回りきれず、ただ見てきただけに終ったが、まず亭々とそびえる樹木には長い歴史を感じ、私達の植物園にも歴史を物語るような銘木を育てなくてはならぬことに気づいた。

花壇や温室では改造工事が行なわれていて、やは



図１　森林の中にある Savil Court Hotel．

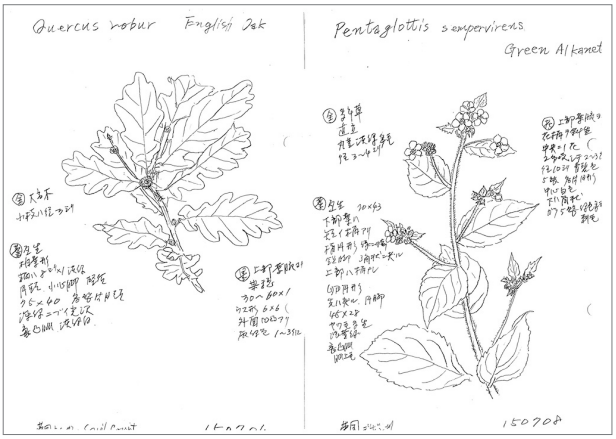


図２　イギリスで描いたボタニカルスケッチ（左：オウシュウナラ、右：ムラサキ科の野草）．



図３　南西部の光景　こんな地方に暮らしてナショナルコレクションを守る園芸家もいる．

り老朽化した施設や行き詰まった園地は、作り直す努力が必要で、それにより新たなフアンを獲得することができるのであろう。

ロックガーデンでは、昭和初年に日本人で最初にキュー植物園の研修生となられ、帰国後に小豆島で植物馴化園を開設された八代田貫一郎氏（故人）ことを思い出した。氏の著書には在園中にロックガーデンの改造が行なわれたことが書かれており、それから 90 年の歳月を経ていることを思いながら観覧し、ここでも無量の思いにかられた。

植物数もその分野も、研究の規模も、専門の職員の数も世界一という植物園を、たった一日観覧して印象を述べるなどおこがましいことだが、日本の植物園すべての園が糾合しても叶わない歴史と規模内容を持つこの植物園は、かって植民地を経営した国策によって発展したことを考えないと理解できない。兎も角現代の日本国では、国も地方も植物園の理解が不充分で、お金と人員を投資することなど考えられないことである。英国においてもキュー植物園の予算と人員が大きく削減されるということも聞き、規模が大きいだけにこれからの運営が難しくなることがうかがえる。

私達の日本の植物園は、どのように考えたらよいのであろうか。大きければよいわけではなく、何でも揃わなければならないわけでもない。規模は小さくてもそれぞれに専門分野を充実させて、全体として目的を果たせるように連帯協力することが、最良の方策といえるのではないだろうか。

7．王立園芸協会の二つの植物園

ウイズリーガーデンは２度目であったが、ローズムアガーデンは始めての訪問だった。どちらも園の全体を知り尽くしておられる方に案内していただけたこと、ここでも老川さんの培われた信頼関係の実績を感じた。

どちらの植物園でもそれぞれの園地で名前が出てくるデザイナーのことが、日本ではあまりないことが印象に残った。欧米では誰がデザインを考えたとか、プランを練ったとかいう事が建築などと同様に実績として評価されるのであろう。この場合それにもとづいて園地を造成し植物を植え付け、育成管理をした技術者の評価はどのようにされるのか気になるところである。プランが優れていて成功すればよいが、私達の経験では造成から管理の段階で、技術者が試行錯誤してよりよいものにしてゆくのが通例である。建築では図面通りに完成させることはできるが、生き物である植物が主人公の庭園園地では、植えて育ててみないとうまくゆくかどうかはわからない。ここではプランナーと園芸技術者の合作になるはずで、プランナーの功績だけが残るというのはどうかと感じる。

植えられた植物の種類とその量、よく育てられていることは感嘆の他はなく、どうしてそのようなことができるのかと考えた

まず気候風土。英国と比べれば日本ははるかに緯度が低い位置にあり、夏は熱帯地方の気候であるが、冬は寒くその気温差は 40℃にもなる。英国の気温は冬は氷点下に下がっても夏は最高気温が 30℃にはならず、夜間にはさらに低くなるので、ヒマラヤなどの高山植物や寒冷地のものも、致命的な障害を受けずに育ちそうだ。

夜間に気温が下ることで、昼間に植物が生産した栄養分が浪費されずに貯えられる利点がある。また雑草の繁茂がおさえられるために、除草にかかる労力を他の作業にまわせることは最大の利点だろう。日本の夏は日中だけでなく夜間も熱帯夜といわれる 30℃以上の高温で、雑草は昼間に生産した栄養を使って、夜の間に驚くべき成長をとげるのだ。私たちは夏の除草作業の過酷なことを身にしみて体験しており、夏の間除草に追われ、やっと追いつきそうになる頃には秋になっているわけである。

冬には大雪、夏には梅雨、秋にかけては台風の襲来や長雨、ことに近年の激しい気候の変動と常に向き合わねばならない。英国でも何十年に一度は強い寒波や、強風に襲われてこともあったようで、大きな樹木が失われたという話も聞いたが、毎年台風に見舞われるということは、日本という国土の宿命であろう。

ウイズリーでは園地が乾燥して、萎れた草花が見られたことには意外だった。地形の関係もあるのだろうが、夏になると気温も上がり、雨が十分降らないと水不足を起す土壌なのかと思った。

歴史が古く、運営のための組織が大きくしっかり

としていること、それを支えている園芸協会会員の数の多さには、日本との大きなちがいがあり、日本の状況を情けなく思う。日本人の園芸好きは英国人に劣るとは思いたくないが、個人レベルではなくしっかりした組織を作り、拠点となる植物園を設けて、長く継続してゆくという理念が育たなかったのだと思う。明治以後の富国強兵で欧米に追いつこうとする近代化が行なわれたものの、軍事的には大国となっても文化的なものへの投資が比べ物にならなかったということだと思う。

この植物園がいかにすばらしいからといって、これと同じような植物園を日本で実現できるものではないだろう。私たちはこれを参考としてよく学び、日本の気候風土を考え、国情に合った植物園を作り上げてゆくしかないのだ。

ウイズリーガーデンの入ってすぐの建物の前に、中国産 *Itea ilicifolia*（ズイナ属イリシフォリア）が、長い花穂を垂らして迎えてくれた（図 4）。実はこのユキノシタ科の常緑樹は、2 年以前に筑波実験植物園で枝を頂いてスケッチした旧知の植物で、一目見てそれと同定できたのが何より嬉しかった。やはりスケッチをやってきた効果があったのである。

ローズムアガーデンのバラ園では、最近の園芸品種ばかりで、意外な思いをしました。これは他の植物園でも同様であったが、新しい品種の試作と紹介を目的としているように感じる。ウイズリーでは 'Peace' が植わっていたが、私がバラを育てた中学生の頃に沢山あった、ハイブリッド・ティーのあの剣弁高芯タイプのものが見当たらないのだ。そのような品種を保存するところが別にあるのだろうと思うが、不思議であった。

私は神代植物公園でバラ園も担当したが、植替えのときには古い品種を無くさないように、苗を作って極力残した。その後国際バラ・コンクールの品種の花壇ができたが、従来の花壇には古い品種が残してある。図らずもナショナルコレクションを実行していたわけだが、新品種ばかりが植えられていた英国のバラ花壇に驚いたのであった。

ウイズリーでは残念に思ったことがあった。それは庭園の池に植えられたスイレンのコレクションで、周りが芝生になっていてそこへは立ち入れないために、花を近くで確認することができない（図 5）。神代植物公園にいた時代に、スイレンにも興味を持って 30 品種ほど集めて栽培していたことがあり、今でも強い関心を抱いている。ウイズレーでは前回訪れた時にも近寄れずに残念な思いをした想い出があるが、今回も同じだった。あの場所は池を中心とした庭園で、景観としては結構なものだが、園芸植物園としてはその品種が名称とともに近くではっきりと識別できることを望みたいと思い、最後に老川夫妻にこのことを申し上げた。



図４　ウイズリーガーデンの入口の中国産のズイナの仲間 *Itea ilicifolia*．



図５　ウイズリーガーデンのスイレン池。芝生には立ち入れない．

サクラソウ園芸品種を保存するために

名誉会員

鳥居恒夫

サクラソウ（*Primula sieboldii*）はシベリヤ南部より、朝鮮半島を経て日本の高原地帯に自生する多年草であるが、関東地方の荒川下流には上流から流されてできた群生地が存在した。江戸時代中期の初めころから、このサクラソウの栽培が始まり、たねまきを繰り返して多くの園芸品種が育成された。以来 300 年にわたる栽培の歴史には明治維新、関東大震災、太平洋戦争という社会の混乱期があった。戦争による危機は最も深刻なもので、桜草園芸は消滅の危機にさらされた。しかし愛好家たちの必死の努力で多くの園芸品種が絶滅を免れ、今日まで生きて伝えられてきた。その後の復活までの経緯を明らかにしたい。

桜草園芸の復活は、愛好者の組織として 1952 年に発足した「さくらそう会」を中心に行なわれた。筆者の鳥居は発会年以来の会員であり、後に東京都神代植物公園に勤務して、植物園のコレクション栽培と展示も経験し、サクラソウの保存普及活動にも努めてきた。

サクラソウの園芸品種は生命力が強く、現在も江戸時代から生きて伝えられたものが 100 品種も存在し、後の明治・大正・昭和前期と順に並べてみると、発展の過程を知ることができる資料であり、文化財であり、保存する意義のある植物である。

普及と保存のために実行した方策

サクラソウの品種は一部の植物園と趣味の愛培家のもとに辛うじて残され、これを探し出して集め、繁殖することから活動が始まった。

栽培の歴史が長く、混乱期をくぐり抜けてきたサクラソウには品種の間違いが多かった。そこで品種の整理統一をはかることが、会の一大事業と考えられた。

一方、会の最も重要な事業は、会員への品種苗の配布で、余剰のある会員が苗を拠出し、新しい会員に配布することで、少しずつ全国に栽培が広がった。春の開花時には東京で展示会を開催して、会員の栽培品を陳列し、観覧者への普及と新しい愛好者を勧誘した。苗の配布によって地方にも有力な会員が育ち、グループができて展示会がおこなわれるようになり、各地の植物園と連携がとれるようになった。

その他にも様々な活動を行っており、以下に事業をまとめた。

- 会員や一般の園芸愛好者を対象にした講習会を開催して、知識の普及や栽培法を紹介。
- 見学会や研究会を行なって、会員の交流や技術の伝承をはかる。
- 会報を発行して、知識や情報を紹介。
- 品種の収集、試作、調査を行ない、資料を集積。
- 混乱を整理して品種を確定し、保存すべき品種を選別。
- 保存する品種を認定品種とし、特性を記した一覧表を発表する。
- 配布苗や展示会での品種名は認定品種名で表示。
- 新しい実生花を評価して新品種として公表。
- 認定品種を収録したカラー図譜を発行。これで保存・普及活動が進むことになった。
- 植物園や栽培家を訪問して、品種同定をして、混乱の解消を図る。
- 植物園コレクションの補充に協力し、正確な品種の普及を図る。
- 遠隔地でも可能な、切花の送付による品種同定を行なう。
- 植物園コレクションの植替えボランティアで、職員と会員で技術研修をする。
- 品種の里親制度による保存（筑波実験植物園と筑波大学が行なっている）。
- 桜草用植木鉢の製作と販売斡旋。
- 江戸時代に創造された鑑賞法「桜草花壇」の復元製作。
- 関連資料・文献の収集

今後の課題

以上挙げたように、思いつくあらゆる手法を、可能なものから実行してきたことで、桜草園芸は復活し、絶滅を危惧する人はいなくなった。この活動は個々の愛好者とそれを糾合した「さくらそう会」、各地の植物園、研究者等の連携によって実現し、これからも継続してゆくことによって目的が叶えられる。

社会情勢の変動や好みの変化によって、消長盛衰も予想されるが、サクラソウだけの発展や保存を考えず、多様な植物の愛好者をふやすことが重要で、その活動の中でサクラソウも保存されるに違いないと確信している。

イギリスにおける *Bambusa* 属の栽培

賛助会員

田代 武男

イギリス南部地域は日本よりかなり北に位置するが、大西洋を流れる暖流、メキシコ湾流の影響を受けて比較的温暖である。

この地域の竹、ササの生育環境をみると、降水量は月平均 50rnrn 前後で、これではタケノコの発生時期は水不足になる。夏の最高平均気温は 20 度位で生育には問題ないとしても、冬の最低平均気温がマイナス 4 度とかマイナス 5 度というのでは、タケノコの発生温度を下廻っていて、竹、ササの在来種が自生できないという大きな問題をかかえている。

野外では、タケノコや桿の先端部分が寒害によって枯死したものが散見されるが、辛うじて生育しているものもお互いに身を寄せ合って寒さをしのいでいる様で、株立ちのように見える。

19 世紀以降に竹、ササはイギリスに移植導入されたと言われるが、住宅地の一角や庭園、公園といった場所に小規模植栽が今日まで続いている。そこに, キンメイチクや黒チク（ハチクが変異したもの）は見たが、モウソウチクは一株も見かけなかった。冬期に温度管理をしないとモウソウチクはうまく育たないようである。

竹の仲間は大きく、竹、ササ、バンブーに分けられる。温帯に生育する竹、ササには地下茎があり、その地下茎からタケノコが出て散生（単軸分岐型）する。地下茎には沢山の節があり、各節からは多くの根が出ている。

タケノコが伸びて竹の皮（桿鞘）が早期に離脱するのを「竹」、竹の皮が長期に付着したままのものを「ササ」と言っている。イギリス南部地域では、真っ白い竹の皮が付着していて耐寒性があるササが多く栽培されている。

公園の野外にキンメイチク（*Phyllostachys aureosulcata* 'Spectabilis'）が栽培されていた（図1）。このキンメイチク（金明竹）はマダケが変異したもので、日本でよく見かけるものと同じものである。

竹桿は三起源層からなっていると言われている。キンメイチクは、桿の第一層（一番外側の層）が緑色から黄色（黄金色）に変異したが、第二、第三の層（内側の層）は緑色のままである。節間の芽溝側（枝が出ている上側）は、第一層の層の厚さが薄くなっているので第二層、第三層の緑色が透けて見えるのである。そのため、地肌が黄色で芽溝側は交互に緑色となる。

キンメイチクは地下茎が地表面すれすれの地中を横走っているが、遠方から見ると竹桿全体が一塊になっている。

王立キュー植物園のパームハウス（温室）には、桿が斑入りのジャイアントバンブー（*Gigantochloa verticillata*）が植栽されている（図 2）。桿の第一層が緑色から黄色に変異し、節間に広狭様々な緑色の条斑がある。

熱帯地域に生育するバンブーには地下茎がなく、既に成長している桿の基部に養生している大芽が伸長して桿となり、株立ち（仮軸分岐型）となるので、キンメイチクにあるような、くぼんだ芽溝部がない。そのため二層、三層が透けて見えることもない。

しかし、斑入りのジャイアントバンブーの桿は黄

色地で、不規則な緑色条斑が多発することや葉にも小量の白条斑があることなどは、縦縞キンメイモウソウチク（モウソウチクが変異したもの）そっくりである。このように、斑入りの形式が酷似していることから、バンブーの桿も三起源層になっているのではないかと思われる。



図１　キンメイチク．



図２　キュー植物園のジャイアントバンブー．

植物園での盆栽展示

賛助会員

加藤昌一

1．ねらい

盆栽が「BONSAI」として世界共通語になって久しく、海外での盆栽人気は一時のブームから定着期にあるといえる。多数の国に多くの愛好家の存在が認められるようになった。

各国の植物園でも盆栽が展示されている。アメリカ合衆国ではブルックリン植物園、国立樹木園の盆栽は質の高い内容でよく知られている。盆景の長い歴史をもつ中国では、上海植物園で 1978 年に展示（盆景園）が始まっている（中国では盆栽ということばは使わず盆景という。日本には盆景という盆栽とは別の分野がある）。

こんな時代背景をもとに英国の植物園での盆栽展示について報告する。

今回、調査隊が訪ねた植物園は王立キュー植物園、RHS ウィズリーガーデンである。この 2 園は各園の方針なのか、英国内の盆栽店の協力により盆栽展示が始まったためか、展示の仕方に特徴があり前者は温室内、後者は野外の展示である。

なお、紹介する作品の写真説明の項目は日本での習慣にしたがい、樹種名、樹形、樹齢、鉢、コメントの順に記した。各項目はおもに各園の名札の表記を優先した。コメントは必要に応じて付した。コメント部分の「」内は展示掲示版の説明文（英文）から要約、引用した。それ以外のコメントは筆者による。

2．キュー植物園の盆栽

場所と温室

広いキュー植物園内で、BBC が家庭菜園のテレビ番組収録に使う菜園植物コーナーに隣接したところに「BONSAI　HOUSE」がある（図 1）。別の目的で造られたと思われる小型ガラス温室が展示場となっている。入り口に「盆栽はデリケートですから、近づきすぎないように、作品に警報器を設置してあります」と注意書きがある。

特徴

温室の入り口には教育的配慮から、植物園らしい「盆栽の歴史」「盆栽の日常管理」について簡潔な分かりやすい説明文がつけられている。

作品は日本から移入されたもののほか、英国で仕立てられた作品が含まれているようだ。展示・管理などは地元盆栽店が担当している。

温室入り口の説明版の解説によれば、キュー植物園には盆栽が 60 鉢あり、樹高が 10cm のもの（小品盆栽）から樹齢 180 年のものがある。訪問時、温室には 10 鉢が展示されていた。その樹高は 30cm から 50cm（目測）ぐらいで、日本でいえば中品盆栽の作品である。



図 1　キュー植物園の BONSAI HOUSE．



図２　イロハモミジ．

作品１（図２）
- イロハモミジ
- 樹形：双幹
- 樹齢：鉢上げ後 80 年
- 鉢:丸･釉薬（イギリス、ブライアン･アルバート作）
- 日本の藤樹園（さいたま市）から入手。「日本のモミジは樹形や大きさ、葉の大きさ、葉色、葉形はさまざまである。秋の紅葉はすごく美しい。」



図３　イロハモミジ．

作品２（図３）
- イロハモミジ
- 樹形：模様木
- 樹齢：100 年 (鉢上げ後 50 年)
- 鉢:丸･釉薬（イギリス、ブライアン･アルバート作）
- 日本の九霞園（さいたま市）から入手。「キュー植物園の盆栽ではもっとも大きい作品。」



図４　荒皮性イロハモミジ．

作品３（図４）
- イロハモミジ 'Arakawa'
  'Arakawa' は日本で「荒皮性」と称される樹皮の意味で、コルク質の樹皮が盆栽界では珍重される。
- 樹形：直幹
- 樹齢：実生、1967 年に日本から送られてきた。
- 鉢：長方・釉薬（窯は不明）
- 「モミジはキュー植物園ではぞくぞくするような美しさに紅葉するが、これはそのひとつである。」



図５　ヒメシャラ．

作品４（図５）
- ヒメシャラ
- 樹形：直幹
- 樹齢：記録なし
- 鉢：楕円・素焼き（窯は不明）
- 「ヒメシャラは多くの優美な花を着け、夏の終わりに実を着ける。樹皮は美しいシナモンレッド色で、薄くはがれる。葉は秋に美しい色に変わる。」



図６　イチョウ．

作品５（図６）
・イチョウ
・樹形：直幹風
・樹齢：不明
・鉢：丸鉢・釉薬（窯は不明）
・「最近、日本から輸入した。購入は森前誠二氏の助力により可能になった。」



図７　ヨーロッパカラマツ．

作品６（図７）
・ヨーロッパカラマツ
・樹形：直幹
・樹齢：50 年、英国で実生したものかどうかは不明。
・鉢：楕円（常滑）。「針葉樹盆栽で多く使う釉薬がかかっていない（素焼き）鉢」
・「ヨーロッパカラマツは（盆栽では）数少ない落葉性針葉樹のひとつ。自然では樹高 45 メートルに育ち、耐寒性があり、-50℃で生きられる。」



図８　ヨーロッパアカマツ．

作品７（図８）
・ヨーロッパアカマツ
・樹形：模様木
・樹齢：不明
・鉢：丸・素焼き（窯は不明）
・ヨーロッパで仕立てられた作品と思われる。



図９　イブキビャクシン．

作品８（図９）
・イブキビャクシン（*Juniperus chinensis* ‘Itoigawa’）
日本から渡ったものか。名札板で品種名扱いの‘Itoigawa’は日本では単に産地（糸魚川）を指す。
・樹形：石付き。若木を石に付けた作品。
・樹齢：名札に表記はない。まだ若木か。
・鉢：丸・素焼き（窯は不明）
・日本の盆栽界ではミヤマビャクシン（*J. chinensis* var. *sargentii*）とされ、盆栽名の真柏（シンパク）のほうがなじまれた名称であるため、以下の作品はミヤマビャクシン（真柏）と表記する。



図 10　キプロススギ .

作品 9（図 10）

・キプロススギ

・樹齢：盆栽に仕立てて 45 年以上。

・ 樹形：日本では珍しい樹形。中国の盆景の影響を受けた作品か。

・鉢：石板付け（石の種類は不明）

・「この木は傾斜した幹に仕立てられ、キュー植物園で作った芸術的な厚板（石）の上で育成されとおもわれる。厚板上では光や空気が根を固まり状に生育させ、小型に保つことができる。キプロススギはキプロス島山地に自生し、野生では珍しい種類。」



図 11　ゴヨウマツ .

作品 10（図 11）

・ ゴヨウマツ

・ 樹形：模様木

・ 樹齢：「100 年ぐらいに見積もられ、鉢上げ後 50 年、もとは野生の木。」

・ 鉢：楕円・素焼き（常滑）

・「1966 年に蔓青園（さいたま市）から購入。ゴヨウマツは日本の自然木のひとつで、材は建築や彫刻に使われる。」

＊掲示板によれば「キュー植物園の盆栽の多くはルース・スタフォードージョーンズから寄贈された。彼は日本を訪れ、日本語はできないにもかかわらず盆栽を学んだ」と記されていた。

3．RHS ウィズリーガーデンの盆栽



図 12　盆栽園の全景（2015 年 7 月 11 日）．

場所と展示場

正門入り口からほぼ直進し、左に現れる斜面を上り始めるとロックガーデンがある。その坂を上ってロックガーデンを過ぎたあたりに盆栽園がある（図 12，13）。

特徴

入り口に 2 つの説明版がある。1 つは「戸外、室内？」の見出しで「ここでは戸外展示をしている。室内展示には難しさがある。」とある。もう 1 つの説明版は超簡単な盆栽の栽培史と盆栽の管理のポイントが書かれている。説明版は（盆栽を提供したと思われる）盆栽店「ヘロンズ・ボンサイ」の名になっている。

筆者は 2007 年に日本植物園協会イギリス調査隊でここを訪ねたが、その当時とは展示場のデザインが変更されていた。

今回の調査時には 27 点の作品が展示されていた。

野外展示であり、樹高約 90cm から 150cm（目測）と大型の作品が多い。なかには手入れが行き届かず樹形が乱れた作品や、重複した種類が多数あった。それらを除きここでは作品 12 点を紹介する。



図 13　2007 年 9 月 8 日当時の盆栽園入り口。カツラがシンボルツリーとして植栽されていた ．



図 14　トウカエデ ．

作品 11（図 14）

- トウカエデ
- 樹形：石付け
- 樹齢：およそ 50 年。石とのバランスがよい。
- 鉢：楕円・釉薬（窯は不明）
- トウカエデはこのほかに 2 点の展示があった。



図 15　アキニレ.

作品 12（図 15）
・アキニレ
・樹形：斜幹
・樹齢：およそ 85 年
・鉢：長方・素焼き
・樹と鉢との調和がよい作品。



図 17　ヨーロッパブナ .

作品 14（図 17）
• ヨーロッパブナ
• 樹形：直幹
• 樹齢：およそ 50 年
• 鉢：楕円・素焼き（窯は不明）
• 根張りがよく、樹形が整った作品。英国で仕立てられたものか。



図 16　ブナ.

作品 13（図 16）
• ブナ
• 樹形：寄せ植え
• 樹齢：名札ではおよそ 50 年とあるが、詳しくは不明。
• 鉢：楕円・素焼き
• 寄せ植えされた木の幹の太いもの、細いもののバランスがよい。



図 18　イロハモミジ .

作品 15（図 18）
・イロハモミジ
・樹形：模様木
・樹齢：およそ 80 年
・鉢：長方・素焼き（窯は不明）
・イロハモミジはこのほかに 3 点の展示品があった。



図 19　イチョウ．

作品 16（図 19）
・イチョウ
・樹形：株立ち
・樹齢：およそ 45 年
・鉢：丸・釉薬（窯は不明）
・2007 年の調査時にも展示があった作品。



図 20　レバノンスギ．

作品 17（図 20）
・ レバノンスギ
・ 樹形：寄せ植え
・ 樹齢：およそ 30 年（寄せ植えしたときからの年数か）
・ 鉢：楕円・素焼き（窯は不明）
・ 白い幹の色が印象的な作品。



図 21　オオシュウクロマツ ‘Beuvronensis’．

作品 18（図 21）
・オオシュウクロマツ ‘Beuvronensis’
・樹形：直幹
・樹齢：およそ 55 年
・鉢：長方・素焼き（窯は不明）
・盆栽らしい樹形であるが、のびすぎた枝の調整が必要。



図 22　オオシュウアカマツ．

作品 19（図 22）
・ オオシュウアカマツ
・ 樹形：文人木
・ 樹齢：およそ 40 年
・ 鉢：丸・素焼き（窯は不明）
・ 樹種からヨーロッパでの創作品と思われるが、やや凝った樹形に仕上がっている。しかし、鉢と根鉢との大きさのバランスを正したい。



図 23　ゴヨウマツ .

作品 20（図 23）
- ゴヨウマツ
- 樹形：模様木。枝先の手入れが必要と思われる。
- 樹齢：およそ 80 年
- 鉢：長方・素焼き（窯は不明）
- 根張り、立ち上がり、枝順は一応整っている。ゴヨウマツはこのほかに 2 点の展示があった。



図 24　クロマツ .

作品 21（図 24）
- クロマツ
- 樹形：ごつごつした厚い樹皮が特徴。日本では錦松と称されている。荒皮性の一種で岩石性という（名札では Corticosa Group と表記）。
- 樹齢：およそ 70 年
- 鉢：長方・素焼き（窯は不明）
- 樹形が乱れているが、英国では珍しい樹種と思われるので紹介した。日本から渡ったものか。



図 25　ネズ .

作品 22（図 25）
- ネズ
- 樹形：シャリ幹が見どころ。シャリとは木質部が朽ちて白骨化したもののこと。シャリは松柏類の真柏、トショウでは見どころのひとつ。
- 樹齢：およそ 150 年
- 枝が整理されるとこの作品の特徴がさら現われると思われる。

＊展示されていて紹介できなかった作品は、ケヤキ（1）、ミヤマビャクシン（真柏 3）、イヌカラマツ（2）、名札なし（3）である。
＊日本での盆栽培養場は通常は戸外やハウス内であり、冬季には室（むろ）に取り込んで保護をする。観賞にあったっては室内の席飾りでたのしむ場合もある（図 26）。広い庭を置き場としている場合は戸外で培養と観賞を兼ねることもある。



図 26　日本での席飾りの一例（さいたま盆栽美術館）.

4．ハンプトンコート宮殿フラワーショー
英国においての盆栽人気がうかがえる賑わい

今回の調査団は英国到着の翌日に、有名なハンプトンコート宮殿フラワーショウ（第 25 回）を見学した。入場口から人があふれ、各会場の人込みに圧倒された。フラワーショーを見学しながら、英国人は花の栽培を生活習慣とし、多くの人が植物とともに生きていると感じた。

会場のひとつに、きわめて大型のテント（「フローラル・マーキー」）があり、あらゆる植物が購入できる（図 27）。テント内には、現代英国で楽しまれている植物がほとんど入手できると思われるぐらいの園芸店（300 店ぐらいか）が営業していた。

どのお店も作品（見本）展示コーナーと商品コーナーがあり、展示作品や飾り付けはコンテストの対象となっていた。審査の結果は小さなボードに「金賞、銀賞」などの表示があった。

その中に 3 店の盆栽専門店があった。その様子を写真で紹介するので、英国での盆栽人気についてご想像願いたい（図 28–35）。



図 27　大型テント「フローラル・マーキー」の入り口．



図 28　各盆栽店には、作品展示コーナーのとなりに素材と若木コーナーの売り場がある。この店での値段は 1,600 円から 23,000 円ぐらい．



図 29　店主（右）と交渉する女性の盆栽ファン．



図 30　熱心に品定め。盆栽の素材になる木の根張り、幹の味わい、枝配りを確かめているのか．



図 31　売店の作品。 ミヤマビャクシン（真柏）‘Itoigawa’、石付け .



図 32　売店の作品。サツキ‘Kato’（?）、模様木 .



図 33　売店の作品。サツキ‘Kaho’（華宝？）、模様木。名札では最初の樹形作り（鉢上げ）は 1965 年となっていた .



図 34　売店の作品。ブナ、直幹 .



図 35　盆栽店名とコンテスト銀賞受賞の表示 .

5．結び

日本の植物園では、イベントとしての盆栽展示はあるものの、常設の盆栽展示場を備えたという植物園の話題は聞いていない。国立、公立の盆栽美術館は小さいながら 1 件ずつある（特別な例では「皇居の盆栽」がある）。

盆栽は歴史的には千年前に始まった中国の盆景が始まりといわれている。日本では絵巻物『春日権現験記』（1305 年奉納）の一場面に現れて以来、のちには中国の盆景の影響を受けながら、盆栽は日本人が培ってきた植物の栽培技術である。いわば日本人の感性が盆栽を磨き上げ、作り上げてきた。個々の作品の観賞価値は生きた芸術の域にあると関係者は力説する。

そこで盆栽を収集し、盆栽研究、作品の保存と展示を本格的に手がける植物園が日本に現れることを期待したい。

日本の盆栽は日本の自然を代表とする樹木と草ものを主材料としている。盆栽の樹形づくりでは日本人が生活する山野での樹姿、草姿が手本である。盆（鉢）のなかで栽培する一木一草が自然景観を連想させる造形であることを理想とする。植物を植え付ける鉢は、形、色、大きさ、焼きの味わいを生かして盆樹と調和するものを選ぶ。ときには石、古材が植え込み容器として使われる。

また、日本の盆栽界では、主木の盆栽に添え（草ものや小品盆栽）をあしらった席飾りなどの展示法で、盆栽を楽しむ豊かな空間を作り上げてきた。

英国の「ナショナルコレクション」の規定には栽培技術は入れられていないようであるが、日本での独自の規定をもうけ、「ナショナルコレクション」の中に盆栽を加える英知が必要と考える。

イギリスにおけるバラ栽培

宇治市植物公園

鈴木茂登子

1. はじめに

2015 年の海外事情調査ではイギリスにおけるナショナルコレクションの調査を目的とし、16 箇所のガーデンやナーセリ、大学などの視察を行った。

イギリスにおける植物遺伝資源の保存しているナショナルコレクションホルダー（特定の植物をコレクションして保持している個人または営利、非営利団体）の実態や、それを組織している団体（プラントヘリテージ）の活動を知り、日本における植物遺伝資源の保存を検討するうえでとても有意義な機会となった。また、本調査では本来の目的以外にも数多くの収穫があり、おそらく書籍や画像を見るだけでは知ることができなかったイギリスのガーデンを直接肌で感じ、風土にも触れることができた。

筆者は職場でバラ栽培の担当をしていることから、バラの本場であるイギリスでどのようにバラを栽培しているのか、特に公園においての管理方法に強い興味を持っていた。今回の調査をコーディネイトしていただいた老川順子さんの計らいにより、バラ園を所有するガーデンでは、バラ栽培に関して質問をする機会を特別に設けていただけたので、その内容を報告する。また、英国王立キュー植物園では、バラの管理作業をされていたボランティアにもお話しを伺えたので、あわせて報告する。

2. ウィンザー　ザビルガーデン

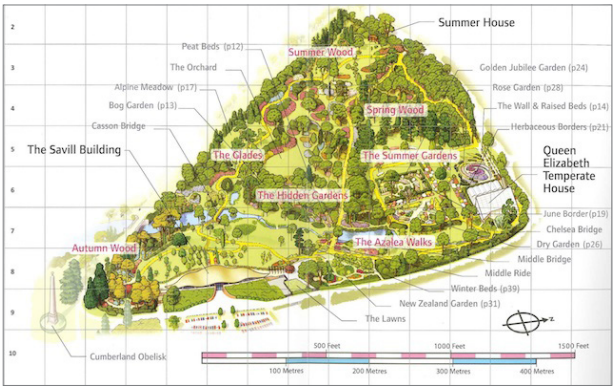


図 1　サビルガーデンの園内地図 .

ロンドン近郊、ウィンザー城を囲むように広がるグレートパーク内にザビルガーデンは位置する（図 1）。約 14ha に広がる園内は起伏のある地形と自然を最大限に生かしたとても美しいガーデンである。ハーベイ・スティーブンス氏に園内を案内していただき、ローズガーデンでは何点かの質問をする機会を得たので、以下に報告する。

バラはイギリス人にとって文化的にも歴史的にもとても重要な植物であり、ザビルガーデンにおいても例外ではなくバラ園は特別なエリアとして位置づけられている（図 2）。

約 7 年前よりはじめられた園全体の長期的なマネージメントプランの中で、1950 年に造成されたバラ園のリニューアルが計画された。集客力があるとされるバラ園の存在が今のままでは古臭く将来的な展望が見えないとの判断で新しく造成に踏み切ったとのことである。

本来園内のデザインは全て園の職員で行っていたという経緯があったが、今回は初めて外部のデザイ



図２　サビルガーデンのバラ園（パンフレットより転載）.



図３　壁により異なったバラ園の景観を楽しむことができる.



図４　バラ園に植栽されたグラス類.

ナー（アンドリュー・ローソン）を登用した。リニューアルされたバラ園は 2010 年にエリザベス女王によって開園され今年で 5 年目を迎える。

スティーブン氏によれば、デザインにおいて重要視されていることは「どのように人が歩いていくのかを考えながらその目線の先を見ていく」ことだそうだ。そのとおりにバラ園はバラの花を模写したように中心に向かって渦を巻いたフォルムになっている。所々に壁ができており、来園者は足を進めるにつれ異空間を旅した気分を味わえる（図 3）。

また、品種は「香り」をテーマにしている。色の流れを作るため 1 品種ごとに 100 株、計 25 品種 2500 株のバラが植栽されている。花色はアプリコットとタンジェリンオレンジそして深い紅、ソフトピンクに移り変わり、色の流れを作っている。

さらにバラ園では珍しくグラス類が混栽されており、美しい流れを演出している（図 4，5）。特にデザイン上、最も特徴的な箇所になる「中心の高台」から眺めると、その効果は極めて引き立っており、グラス類が紅葉する秋の季節にもまた異なった美しさを演出する。また、この他にもロイヤルファミリーの名前がついたバラを収集し植栽している（図 6－ 8）。

中心の高台は船首をイメージしている。緩やかなカーブを描きながら少しずつ上昇し（図 9）、船首からはバラ園の全体を見渡すことができ（図 10）、また風に乗った香りを堪能することができる。床はメッシュ状になって真下も見ることができる。園で植栽しているバラは園内のショップにてすべて購入することができる。余談だが、一番人気のバラは園内で 2 品種しかない香りのないバラだそうだ。

バラ園の土はとてもふかふかしており、堆肥の塊がところどころに見えた（図 11）。花壇に使っている堆肥は全て自家製で、園内で作っているものであるとのこと。同時にバラの冬剪定の跡を確認した（図 12）。

生えている雑草も日本ほど多くはなく、訪問時には草抜を行っていた。バラの栽培管理は委託業者を使わず全て職員で行っている（図 13）。

バラは来園者が直接に花を手に取り、香りを楽しむ植物であること、特にこのガーデンは香りをテーマに選んだ品種であるので、庭園管理を行う上で薬剤散布をどのように考え、実施しているのかを尋



図５　流れを感じらえるグラス類の植栽．



図６　ロイヤルファミリーにちなんだバラ
‘Royal William’．



図７　エリザベス女王の名がつけられたバラ
‘The Queen Elizabeth’．

ねた。イギリスの気候であっても薬剤散布は欠かすことができないものであり、４月の中旬から８月上旬まで以下のように６週間のインターバルで行うそうである。
①黒星病とアブラムシ駆除効果のある薬剤３種を混合したものを散布→１週間→②液肥→
１週間→③別の液肥→１週間→①に戻る。ここでの液肥は葉面散布。

　弱ってきた品種をどのように養生しているのかを伺ったところ、少しでも弱ってきた品種は全て新しい品種と交換するそうである。リニューアルから５年目の中で２品種を新品種に交換した。美しいバラを見せることがとても重要だとお話しされていた。また、温暖化により国内でバラの栽培が難しくなる事も想定して他のエリアではドライゾーンなどの計画が立てられている。



図８　キャサリン妃の名がつけられたバラ
‘The Catherine Rose’．



図９　園路は緩やかにカーブしながら上っている．



図 10　船首をイメージした高台から園内を一望できる．



図 12　バラの冬剪定の跡．



図 11　バラ園に利用される堆肥．



図 13　バラの栽培管理は職員が行う．

3. 英国園芸王立園芸協会 ローズムアガーデン

デボン州北部にある英国王立園芸協会の所有するガーデンの一つであり「西のウイズリー」と呼ばれる美しい庭園。1988 年までの牧草地から、約 20 年かけて開発されてきた。各庭はイチイやブナなどの生垣で仕切られており、その空間は連続性を持ちながらも各テーマを持っている。また自然林を生かしたスペースも混在し、来園者はさまざまな空間を渡り歩き、探究心を持ちながら散策できるようになっている（図 14）。

ローズガーデンは The Shrub Rose Garden と The Queen Mother's Rose Garden の 2 箇所である。

デボンの地では空気がきれい過ぎて、またとても湿潤な土地だったために「バラは育たないだろう」といわれてきたが、ローズムアはそれを反証した。それは、都市などから流れる二酸化硫黄を含む大気がバラの生育に問題となる黒点病の発病を抑制させることや、もともと粘土質だった土壌に暗渠処理を行い、有機物質をすきこむなどの土壌改良を行ったこと、さらに植栽するバラの品種を病気に強く、成長旺盛な物を選んだことでとても美しいバラ園が造られている。植栽後に 60%の品種が適応できていることや植栽されたバラは約 10 年の寿命であることがわかったそうだ。

2002 年に The Queen Mother's Rose Garden のバラ園が先立って開園した。ハイブリットティーローズ（大輪）とフロリバンダローズ（房咲き）に加え、中央のあずまや、オベリスクにはツルバラを這わせている。約 60 品種のバラが植栽され、バラのみでデザインされた庭である（図 15 － 17）。

2 年後の 2004 年には The Shrub Rose Garden が開園した。130 種類のバラと宿根草で構成され、両園合わせて 200 品種、2000 本のバラを見ることができる（図 18 － 20）。また、ボーダーガーデンやスパイラスガーデン、レディアンガーデンでもバラが処々に植栽されていた（図 21）。

ローズムーアガーデンで栽培を担当されているフィリップ・スコット氏にお話を伺った。ここでもバラの栽培管理は全て職員が行っており、フィリップス氏は 2 箇所のバラ園の他に the potager、herb

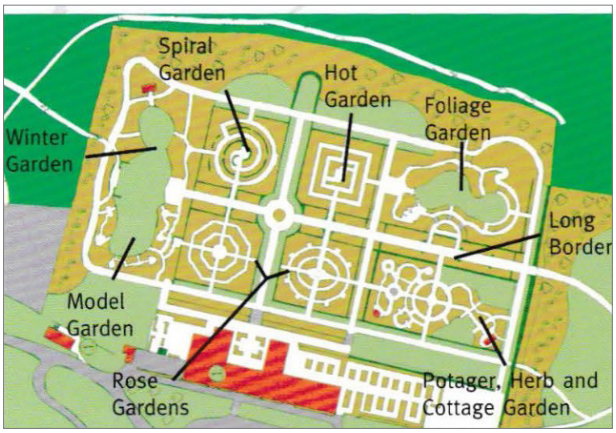


図 14　ローズムアガーデンの園内地図 .



図 15　The Queen Mother's Rose Garden .



図 16　バラ園中央部のオベリスク .

garden、cottage garden と The fruit field の栽培も担当している。主に一人で管理しているが、補助としてもう一人とも作業をすることもある。しかし、冬の剪定などの管理作業は間に合わないので、多くの職員の方に協力により一斉に行う。

ザビルガーデン同様、薬剤散布について尋ねた。ここでも薬剤散布は欠かせないが、大切なのはバラ自体を健康（体力や免疫力）で衛生的に保つことだと仰っていた。土の健康、風の通り、栄養を与えるこが重要であり、薬剤散布は補助的な事と捉えており、その工夫もガーデンの中で見ることができた。しかし、特別に減農薬化に取り組んでいることはないそうである。

薬剤散布は葉が出始める頃から開始し、この時期がとても重要である。筆者が勤務する園でも同時期の薬剤散布を重要ととらえ行ってきていたことから、改めてその重要性を再確認した。また、薬剤散布のサイクルは以下のように 4 週間のインターバルで実施する。

①黒星病と褐斑病、病害虫に効果のある薬剤を混合したものを散布→ 1 週間→②強い液肥（栄養剤：システイン）→ 1 週間→③耐病性がつかないように薬剤の種類は変えるが同じ効果のあるものを散布→ 1 週間→②強い液肥　を繰り返し行う。ここでの液肥は主に葉面散布。

肥料は別に施す。2 月に寒肥として有機肥料（魚骨など）を施し、真夏は液肥、他の季節は、適宜に化成肥料を施す。

使用する堆肥は全て自家製で、デボン州は酸性土壌でありローム層であるので、落ち葉堆肥（1 年寝かせたもの）と鶏糞 1 割＋チップ 3 割＋木くず 3 割に 2 種類の堆肥を調整して使用する。生成された堆肥は冬のマルチングにも使用する（使用量：15 ｔ～ 16 ｔ）。2004 年にはバラ園の土を全て入れ替えた。自然に水の流れができるように勾配をつけて排水処理を行っている。

弱ってきた株をどのように養生されるのかを伺ったところ、バラはとても人気があるので弱ってきた株はどんどん新品種に交換することのことで、毎年新しい品種を植栽している。また、植栽されるバラの品種は、耐病性がある、香りが強いかを主な基準として選出している。



図 17　ツルバラで覆われたあずまや．



図 18　The Shrub Rose Garden では、クレマチスやフランネルソウ、ラムズイヤーなどの宿根草とバラが混植されていて大変美しい．



図 19　様々な宿根草とバラが組み合わされている．

The Shrub Rose Garden はバラと宿根草を混植したガーデンで、とても美しく管理されている。当園のバラ園はバラのみで構成されており、兼ねてから宿根草との混植を考えていたことから、疑問に思っていた事柄を質問した。

バラには定期的に薬剤散布をするので、土壌の劣化や他の植物への薬害などの影響が出ないのかを伺ったところ、影響はないとのことであった。しかし、病気が発生しても蔓延しないように、（減農薬化につながる）ガーデン内にいくつかの工夫をしている。

1. 植栽している宿根草はこの土地で強健に育つ種類を選別している。
2. こぼれ種で密植になるのを防ぐ。実生はすぐに抜き取る。
3. 空気の流れができるように、また管理ができるようにバラの株元には植栽しない。
4. バラとバラの間に宿根草を植栽することでバラの病気が伝播していくのを防ぐ
5. 病気に強い原種のバラ（モスローズなど）も取り入れる。
6. 花柄つみは丁寧かつ小まめに行う。

それでもやはり、病気になったり、弱ったりするバラや宿根草はあるとのことだった。しかし目の前の美しいガーデンを見ると「健康的に衛生的にバラを育てる」ことが管理者の愛情であることが伝わってきた。

The Queen Mother's Rose Garden では、お客様に見ていただくための工夫も教えていただいた。実は外側のバラは少し浅く冬剪定を行い、中心に向かって深く剪定している。品種ごとにシュートの伸長差はあるが、調整を行ってバラ園全体を見渡せるように仕立てられている。

また、フィリップス氏と花柄つみや、夏剪定を仮定した軽い剪定もさせていただいた。



図 20　バラ園のところどころに置かれているベンチ．



図 21　レディアンガーデンに植栽されていたハマナス（*Rosa rugosa*）．

4． 英国王立キュー植物園

ロンドン郊外、テムズ川沿いに位置する。敷地面積は約 120ha あり、保有植物種は約 4 万種、標本は約 800 万点となる知識の公庫として世界的に重要な役割を持つ植物園である（図 22，23）。

偶然にも管理作業をしているボランティアに出会えたが、あまり時間がなかったため、薬剤散布の事のみ質問した。

薬剤散布は行っており、通常は年に 4 回散布だが、今年は 2 回とのこと。バラの状態はあまりよくないように感じたが（図 24）、たくさんのボランティアが作業をされていた（図 25）。

今回の調査で公園におけるバラの管理について直接管理をされている方にお話を伺えたことは大変貴重で有難い機会であった。イギリスの気候と日本の気候の違いを肌で実感しながら、訪れたガーデンの植栽を見ると多くの植物が上品に生育しているように感じた。必然的に管理作業の質も異なるのだろうと推測したが、気候や風土が異なる中でバラを愛し、栽培していく気持ちは同じであるのだと感じた。また日本での栽培方法と基本的には同じであったことから、バラ栽培での問題や課題は共通しているのではないかと考えた。



図 23　キューガーデンのパームハウス．



図 24　キューガーデンで栽培されていたバラ．



図 22　キューガーデンの園内地図．



図 25　ボランティアによる剪定作業．

謝辞

忙しい中でこのような機会を作っていただいた老川順子氏と昼休みの時間をいただいて質問に答えいただき、作業実習を共に行っていただいたローズムアガーデンのフィリップ・スコット氏に心より感謝いたします。私にとってかけがえのない大切な時間となりました。ありがとうございました。

イギリスにおけるロックガーデン
形態と展示法・植物の栽培法

六甲高山植物園

三津山咲子

1．王立キュー植物園

王立キュー植物園では、アルパインハウス、ロックガーデン、圃場の 3 ヶ所で高山植物を栽培、管理、展示している。

アルパインハウス

最初にこの植物園で一番新しく小さなガラス室である 2006 年にオープンしたデーヴィス・アルパインハウスを見学した（図 1）。イメージしていた伝統的なアルパインハスではなく、斬新で近代的なデザインの建物だった。入口の前には石製の飼い葉桶型のトラフガーデンがいくつも並べられていた（図 2）。また入口の左右には、カラー写真入りの説明板が設置され、高山植物の生態や自生地の様子、また圃場の様子が、美しい写真とともにわかりやすく説明されていた（図 3，4）。中に入ると、満開のヤマユリが目を引いた。来園者も匂いを嗅いだり写真を撮ったりして、まず興味を引かれるようだった。日本特産のヤマユリが歓迎してくれているようで、うれしかった（図 5）。

このアルパインハウスに冷房はなく、主な機能は雨から植物を守り乾燥を保つことで、外の通風口から入った風が地下を通って、中の数か所のパイプから出る仕組みになっていた（図 6）。風を循環させ、風通しをよくすることが大切との説明を受けた。また、気温が高くなったり陽射しが強くなると、自動的にシェードが天井を覆う仕組みにもなっていた（図 7）。

ここで展示されている植物は、定植しているものと圃場から鉢を持ってきているものとあり、1 週間に 1 回は大幅に展示替えするそうだ。状態を見て、隔日で替えることもあるとのことだった。鉢植えのものは、*Gethyllis oliverorum*（図 8）、*Eucomis humilis*、*Haemanthus humilis* subsp. *hirsutus*（図 9）、*Campanula fragilis* var. *hirsuta*（図 10）など、どれも花の状態がとてもよかった。展示は、中央の通路の左側と右側で趣が異なっていた。片側は平石を積んだ乾燥した場所を好む植物を植えるドライウォール（図 11）、もう片側は湿った場所を好む植物を植える軽石を積んだウェットウォール（図 12）になっていた。軽石の間には *Saxiflaga* の仲間や *Dionysia* の仲間、*Draba* の仲間、*Primula allionii* などが植栽されていた。排水のいい砂利混じりの土を使用していた。場所によっては少々水もちのいい土も使用していて、樹林帯に咲く *Arisaema ciliatum* var. *liubaense* なども植栽されていた。

全体的に端正で、狭い空間の中にも変化をつけて、多種多様な植物を一堂に展示していた。アルパインハウスだけでも高山植物の魅力が十分に味わえるほど充実した展示だった。



図 1　デーヴィス・アルパインハウス .



図２　トラフガーデン．



図６　通風口から地下を通って風を送るパイプ．



図３　自生地の様子の説明板．



図７　シェードがかかった状態．



図４　圃場の説明板．



図８　*Gethyllis oliverorum*．



図５　ヤマユリ．



図９　*Haemanthus humilis* subsp. *hirsutus*．



図 10　*Campanula fragilis* var. *hirsuta*．



図 12　ウェットウォール．



図 11　ドライウォール．

ロックガーデン

アルパインハウスを出たところに大規模なロックガーデンがあり、正面に滝が見えるような設計になっていた（図 13）。滝はそのまま小川になり、そのまわりはボグガーデンで湿地の植物が植栽されていた。クリンソウも花は終わっていたが植栽されていた。水は、広いロックガーデンの至るところに流れていた。どこにいても水音が聞こえ、上手く利用していると感じた。立体的で見やすい展示だが、直線的で大きな石を階段状に組んでいるので、人工的な感じもした。園路もコンクリートなので管理はしやすいと思うが、自然の高山帯を模すというより、整然とした人工的な植物生体見本園という印象だった（図 14）。

植栽はヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカと地中海と 4 つの地域に分けられていた（図 15）。地域別のカラー写真入りの分かりやすい説明板がここにもあり、見ごたえのあるものだった（図 16）。ラベルもシンプルで見やすかった。最も高いところに植えてある植物のラベルは見えにくいので探していると、見えやすいところに数株ほどを植える工夫がなされていた。ただ、*Verbascum nigrum* は、背が高く、自生地では道路際などに生えるため、頂上部にそびえたつ姿に違和感を覚えた（図 17）。また、ウッドランドガーデンにも植栽されていた 1m 以上もある *Aconitum lycoctonum* subsp. *neapolitanum* などもあり、ロックガーデンには不要ではないかと思った。

休眠中の球根も少し見せてラベルが表示してあるので、別の季節に咲く花も想像できた（図 18）。種子採取用に袋がけしているものには、イラスト入りの説明の札がついていて、分かりやすかった（図 19）。ハクサンオミナエシ、オオビランジ、キキョウ、ハコネコメツツジなど日本の植物がたくさん植栽されていた。

植物の種類が多いので、4 つの地域を丁寧に見て回るのはかなりの時間を要した。1 種ばかりがそれほど広がらないように、生育旺盛なものはかなり抑制しているのだろう。石と石の間に植栽されているものも多く、空間があるのでラベルもその間にはさんでいた（図 20）。



図 13　ロックガーデンの滝 .



図 14　ロックガーデン .



図 15　ヨーロッパ地域の植栽 .

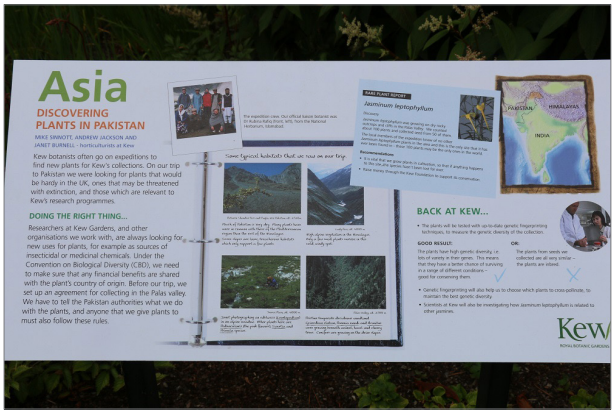


図 16　地域別の説明板 .



図 17　*Verbascum nigrum* .



図 18　休眠中の球根 .



図 19　種子採取用の袋がけと説明 .



図 20　石と石の間の植栽 .

圃場

圃場は、特別にイギリス在住のコーディネーターの老川さんの紹介で、Curator の Richard Wilford 氏に案内してもらった。その広さと整った設備と管理の合理性に何より驚いた。4 人で、2,500 種もの植物を管理していた。毎日よく観察して、花の咲いているものをアルパインハウスに持って行くそうだ。もちろん、ロックガーデン用の植物もここで栽培されている。

Roscoea と *Sempervivum* の素焼鉢が並んでいるトンネルがあり、*Roscoea* の鉢は砂利に埋められていた（図 21）。*Sempervivum* の鉢は、雨を避けるのが一番大事ということで、覆いがかかっていた。（図 22）。

囲いのない屋根だけのガラス室もあり、日陰を好む植物には日除けのシェードがかかっていた（図 23）。腰丈ほどの棚に鉢が並んでいるので、水やりも楽そうだった。霜にあててはいけない植物は、4 ～ 5 度以下にならないように湯の通ったパイプのあるガラス室内で注意深く管理されていた。ただ、あまり手をかけすぎず、植物の力にも頼って管理するのが重要だと言われた。気をつけているのは、温度よりも空気が滞らず循環している状態を保つことだそうだ。

球根類は雨が当たらないようにガラス室の中に並んでいた。同じ大きさの長さ 15㎝ほどの素焼鉢に入っていて、砂と砂利に埋めていた（図 24）。こうすることで、温度を下げるとともに、水やりの回数も減らせる。休眠中は水やりせず、芽が出てからは軽く水やりするそうだ。また、種子をまいて 2 ～ 3 年はそのままで鉢あげしないとのことだった。

Saxifraga や *Dionysia* に水やりしていた圃場の管理者の 1 人、Graham Walters 氏にもいろいろ教えてもらった。*Dionysia* は上から水をかけてはいけないが、生育期は意外と水が必要で常に砂が濡れている状態にするそうだ。*Dionysia* の鉢の間に横になった空鉢が置いてあった。中には生物的防除のシートがあり、天敵の虫を食う虫の卵が中にいるそうだ（図 25）。

イワヒバの鉢の下に黒いビニールが敷いてあったので尋ねると、下はフェルトのような生地になっていた。保水性の高いシートを敷くことで、水切れも防げる。休眠中の植物には下のマットにだけ水やりするそうだ（図 26）。

最後に貴重な *Tulipa* と *Iris* のナショナルコレクションを見せてもらった（図 27）。世界一のコレクションで大切にしていると言われた。前園長はナショナルコレクションに理解があり、重きを置いていたそうだ。維持することが大事だし、認定されたことに価値があると力をこめて語っていた。ナショナルコレクションの鉢は、毎年全部植え替える。9、10 月に植え替えると翌年の生育がいいそうだ。それぞれよく見て、生育のよくないものや枯死したものは捨てる。個体を健全に保つことに注意しているそうだ。見学したときは休眠中だったが、これほどのコレクションが満開の春は見事だろう。

整理整頓の行き届いた圃場を見て質問したが、やはり増えすぎたものや研究に使わないもの、展示に使わないものは、思い切って捨てているそうだ。貴重な植物の保全が重要だと言われた。王立キュー植物園といえども現地に種子を採集しに行くのは難しいらしく、種子交換で種子を得ているとのことだった。種子から育ててコレクションを増やして、ここで栽培している植物の種子も採取するよう心がけているそうだ。砂利に鉢を埋めるもの、砂利の上に鉢を置くもの、マットの上に鉢を置くものと、それぞれの植物の性質に合わせて管理していて、その結果、あまり手をかけずに合理的に管理できるのではないかと思った。この充実した圃場があるからこそ、表の展示も充実しているのだと分かった。



図 21　砂利に埋められた *Roscoea* の鉢 .



図 22　雨避けの覆いをして植栽される *Sempervivum* .



図 26　保水性の高いフェルト様シート .



図 23　屋根だけのガラス室 .



図 27　*Tulipa* のナショナルコレクション .



図 24　球根の入った素焼鉢 .



図 25　生物的防除のシート .

2．ウィズリーガーデン

ウィズリーガーデンのロックガーデンは高低差のある斜面に広範囲に広がっていて、上っていくと、頂上部に 2 つのアルパインハウスがあった。下の方の水の流れに沿ったボグガーデンの *Sarracenia* の展示はボリュームがあり、真似したいものだった（図 28）。上っていく途中の樹齢 200 年ほどの日本のカラマツも紹介してもらった。

アルパインハウスの後ろには、新しくできたロックガーデンがあった。ギリシャの山を模したもので、平石を横に並べたデザインのクレヴィスガーデンだった（図 29）。設計者の地元の山の石組みに似せて作ったそうだ。平石と平石の間に砂利を入れて、水分も保てるので、そこに植物を植えていた。植物の生育はよさそうだった。前後左右と角度によって見え方が違い、植栽されている植物も多様だった。石の組み方も、自由奔放な感じで面白かった。

アルパインハウスは、前がウェットウォールになっているものとドライウォールになっているものと 2 つあった（図 30, 31）。ウェットウォールには、*Phyteuma comosum*（図 32）や *Ramonda myconi* が植栽されていた。かなり年季が入っていて、植物がなじんでいた。ここもアルパインハウスの前にはトラフガーデンが置いてあった。アルパインハウスは、1 年中いつも見ごろにしておかないといけないと説明された。1㎡の展示につき、10 倍の 10㎡の圃場が必要とも言われた。ウィズリーガーデンの中に居住している老川さんは、ここのアルパインハウスを「植物の宝石箱」と形容していた（図 33）。



図 28　ロックガーデンの *Sarracenia* の展示．



図 29　クレヴィスガーデン．



図 30　アルパインハウス前のウェットウォール．



図 31　アルパインハウス前のドライウォール．



図 32　ウェットウォールの *Phyteuma comosum*．



図 33　アルパインハウスの内部．

3．そのほかのロックガーデン

ナショナルコレクションホルダーの個人邸にもトラフガーデンがあり、乾燥を好む *Sempervivum* を植えたもの、湿地を好む *Sarracenia* を植えたものと様々だった。

サビルガーデンには、レイズドベッドがあった（図 34）。高さ 20㎝ほどのレンガくらいの大きさの石を少しずつずらして 3 段ほど積み上げ囲いを作り、その上の平らな部分が植栽スペースになっていた。囲いのドライウォールの部分の石の間にも *Sempervivum* などが植栽されていた。石の積み方はきっちりではなく、大きさもいろいろなので、石と石の間に空間ができ、植栽しやすいようになっていた。高さは 60㎝ほどで見やすかった。

ローズムアガーデンには、レストランに併設してアルパインハウスとレイズドベッドがあった。最近できたそうだ。食事をしながら高山植物が楽しめるようになっていた。アルパインハウスの中の植物も外からも見えるように、鉢を縁までぎっしり並べていた（図 35）。テーブルの上はすべて、*Sempervivum* の鉢だった。



図 34　レイズドベッド．



図 35　アルパインハウスから見たレストラン．

4．所感

アルパインハウスと外のロックガーデンがあるところは、アルパインハウスに今が見ごろの植物を集約して満足度を高め、外の植栽はまばらな感じのところもあった。また、王立キュー植物園の職員もウィズリーガーデンの職員も圃場の大切さを力説していた。圃場の充実なくして、表の展示はできないと分かった。

7日間のイギリスの調査で、様々なタイプのロックガーデンを見た。植栽されていた植物も多彩で、ロックガーデンの形態も新しいものを取り入れているようだった。日本の植物が多く植栽されていたのも印象に残った。また、日本の植物の情報を欲している人も多かった。日本の山は植物の宝庫で、ロックガーデン向きの植物も多い。それらを種子から増やして栽培管理できる種類を増やすことが、これからのロックガーデンの充実につながるのではないだろうか。ただ、高山植物の種子は許可なく採取できないものが多いため、手続きを踏んだうえで採取、栽培できたら、より多様で魅力的なロックガーデンができるだろう。栽培できる植物の種類を増やすためには、栽培技術の向上も必要だと感じた。

イギリスは、高山植物を栽培するためのロックガーデンの垣根が日本よりも低く、より身近に気軽に楽しんでいるようだった。植物園や庭園によってデザインも異なり、自由な発想で新しいものを作り出しているように感じた。植物の展示法も自然を模すだけではなく、魅力的な高山植物を、色や形のとりあわせや、デザイン重視で展示しているのも多く見受けられた。このことは日本にも応用したらいいのではないだろうか。家庭の庭が以前より狭くなった現代では、家庭で小さなロックガーデンを作り、身近に高山植物を楽しむというのも1つだろう。そのお手本になるようなロックガーデンを植物園で作り、見本園としての役割が果たせたら、たくさんの人がロックガーデンに親しむきっかけとなるだろう。植物園、庭園、または家庭や街角と、ロックガーデンもその規模や用途に合わせてデザインを変えたら、より可能性が広がるのではないだろうか。日本では一部の地域を除いて、北緯50～60度のイギリスに比べると気候的に高山植物を栽培するのは難しい。しかし多様なロックガーデンによって高山植物を栽培できる環境のすそ野が広がれば、これからの命題でもある高山植物の種の保存にもつながるのではないだろうか。

本調査は平成27年度公益財団法人カメイ社会教育振興財団（仙台市）の助成によって行われた。

キュー植物園の標本庫で閲覧した標本と園内で観察した植物

賛助会員

橋本光政

英国王立キュー植物園（Royal Botanic Gardens Kew）には 2009 年に訪問して数時間にわたって *Pitosporum*（トベラ属）と *Hamamelis*（マンサク属）等の標本を閲覧させていただいていたので、今回の調査では時間が許せば再調査を希望していた（図 1）。

園内での植物観賞に続いて、館内でたいへん貴重な古書についての話を興味深く聞かせていただいた。その中でも一番に印象強く私の脳裏に残ったのは拙著「兵庫県花の歴史探訪」に引用したケンペルが江戸参府に出かけたときの行列を描いた図の原著である「ケンペルの日本植物誌」であった（図 2）。また、案内していただいた日本人植物画家の山中麻須美さんから我が知人の植物画家である丸山きみよさんの作品も 4 点がキュー植物園に購入されて納められていると聞いて尚親しみを強めた（図 3，4）。



図 1　キュー植物園の貴重図書や標本の展示．
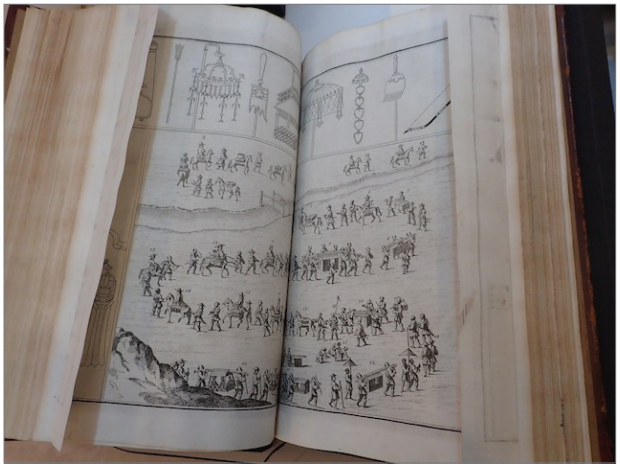


図 2　ケンペルの日本植物誌（原著）江戸参府時の行列を描いた図．



図 3　キュー植物園に収納されている丸山きみよさん筆のハチク（*Phyllostachys nigra* f. *henonis*）．



図４丸山きみよさん筆のヤクタネゴヨウ（*Pinus armandii* var. *amamiana*）.



図５　キュー植物園標本庫の標本ケースの陳列例 .



図６　標本ケース内の標本保管例 .

続いてキュー植物園の誇る標本庫の詳細がウイリアム博士によって説明された後、標本の閲覧をさせていただいた（図 5，6）。目下研究の対象としているコヤスノキ（*Pittosporum illisioides*）（図 7 － 9）とヤハズホオノキ（*Magnolia officinalis* var. *biloba M. biloba* 説もある）の閲覧であった（図 10）。

前種は前回の訪問時に全てを閲覧していたので、その後新たな標本が収納されているかの確認であったが、2009 年時とほぼ同じであった。日本以外では中国と台湾にしか分布していないので納得であった。

後種のヤハズホオノキは掲載されている新聞記事の通り、昨年兵庫県下でたいへん興味深い個体を発見しその追究中であるので（図 11 － 13）、当標本庫内の収納標本全てを閲覧したかった。時間がなく気になったが、幸いと言っていいか同種の標本は 6 点のみであったので全てを写真に納めた。興味深い標本も 1 点含まれており、今後の検討にたいへん有益なものであった。

尚、ヤハズホオノキは最終日の英国王立園芸協会ウィズリーガーデン（Royal Horticultural Society's Garden, Wisley）での生体観察を期待していた。その公園での解説はまったく予期していなかった「MAGNOLIAS」の著者 James M. Gardiner さんだった。園内を詳しく解説いただいた最後に *Magnolia officinalis* がこの園内に植栽されているかを尋ねた。そしてパンフレットの概略図でその場所である Battleston Hill を教えていただいた。

自由散策になり、その Battleston Hill に入った。そこは各種の高木が植栽され、その林床には亜高木、低木、草本が野生風に植栽され自然探索の気分が味わえる工夫がされているすばらしい丘だった。探索し始めてすぐ、もう一つの目的であったマンサク属（*Hamamelis*）に出会い、角度を変えて観察し始めると、季節外れの花が一部咲いていた。全て黄色であった。ラベルには *Hamamelis* × *intermedia* 'Savill Starlight'（図 14–16）とあり、葉の表面はほとんど無毛で、裏面は星状毛で満ちていた。同時に果実が何個も目に入った。*Hamamelis* 2 種の雑種であろうが、親の解説はなく興味は残った。その株は雑種によく見られる不稔ではなく、果実が満載なので少し首をかしげながらの探索であった。

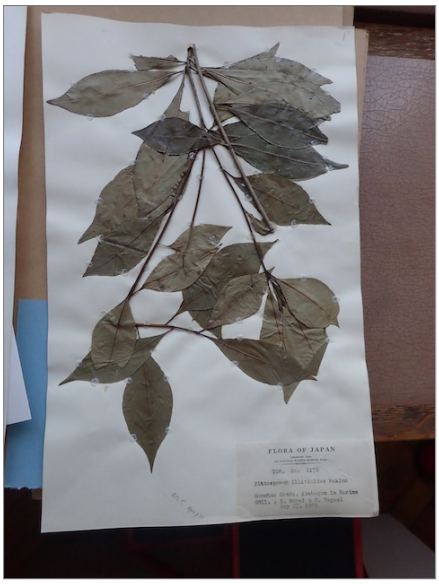


図７　コヤスノキの標本．兵庫県赤穂郡上郡町大枝、Coll. 室井 & 富樫、1955.5.27．

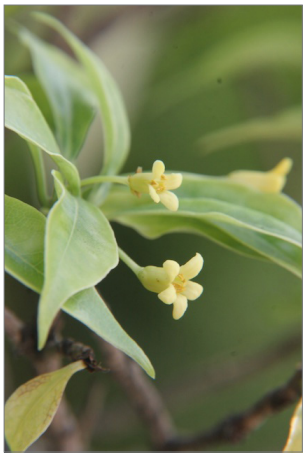


図８　我が庭で咲いたコヤスノキの雄花．

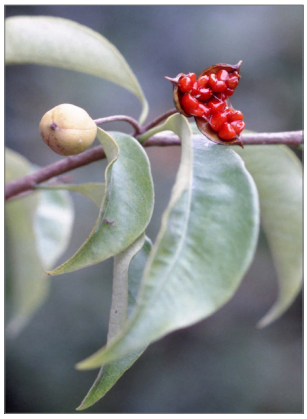


図９　我が庭で結実したコヤスノキの果実．



図 10　キュー植物園標本庫に収蔵されていたヤハズホオノキ（*Magnolia officinalis* var. *biloba*）．

続いて、何種もの *Magnolia* が登場するが、*M. biloba* ではない。その内、別種らしい *Hamamelis* が目に入った。ラベルには *H. mollis* とあるが、この株の葉は前株に比べると葉の毛は少なく、日本で観る *H. mollis*（シナマンサク）に比べると葉が小さい。花がないので葉の両面の写真を撮影して、*Magnolia* 探しに動いた（図 17）。ユーカリの林に入ったのでそこを避けて、再度違った観察路を歩いて探し求めるが *M. biloba* には出会えなかった。集合時間が迫り、結局見つけられずに研修棟に戻った。ところがそこで、金沢大学の佐々木陽平先生から落葉をいただいた。なんと *M. biloba* そのものの葉であった（図 18）。花は乳白色と書いてあったと聞いた。自分では探し当てることはできなかったが、確かに植栽され花の色まで聞くことができた。何故私が本種にこだわったかというと、本稿でも参考のために掲載している新聞（図 11）と花の近接写真（図 12）の通り、昨年来その *M. biloba* の変異株を何本か兵庫県下で観察しているからである。目下、染色体や DNA 等の調査を準備して東京大学博物館の池田博博士とその結果を待っており、また種子発芽を観察しながらその個体のフェノロジーに強い関心を持っている。典型的な *M. biloba* との比較調査が目下の小さな夢である。


神戸新聞　2015.6.18

赤い花咲く〝ホオノキ〟正体は？

専門家が現地調査

中国の希少種　未確認の変種か

波賀の野外施設

赤い花が咲く珍しい〝ホオノキ〟が4本見つかった兵庫県宍粟市波賀町上野の野外レジャー施設「フォレストステーション波賀」にこのほど、東京大学総合研究博物館准教授の池田博さん（54）＝植物分類学＝らが調査に訪れた。中国原産の希少種ヤハズホオノキであることなどが分かってきたが、ホオノキと同様、「ヤハズ」も赤い花を付ける例はこれまで確認されておらず、研究者の関心を集めている。（吉根川淳也）

これまでの調査で、葉の先がハート形に割れる特徴から、ホオノキの仲間で中国原産の「ヤハズホオノキ」と判明、中国でも希少種となっており、日本では宮崎と東京などわずか所の植物園にしかないという。

だがホオノキと同様、ヤハズホオノキの花も白く、赤い花を咲かせた例は確認されていない。中国の図鑑にも載っておらず、ヤハズホオノキの変種や、人為的に改良された園芸種の可能性もあるという。

宍粟市の同施設は約300㍍の丘陵地にあり、約20年前に県が広葉樹の苗木を植樹。周辺では白い花が咲く通常のヤハズホオノキも15本見つかっており、いずれも当時植えられたという。ただ、どこから苗木を購入したか記録は残っておらず、中国の希少種が混入した理由も分からない。

池田さんは「植えられた経緯などが分かれば面白い。遺伝子を調べ、中国の研究者に現地の事情を聞いてみたい」としている。

図 11　2015 年 6 月 18 日の神戸新聞の記事．



図 12　ヤハズホオノキ（*Magnolia officinalis* var. *biloba*; *M. biloba* 説もある）の赤花株の花（2014 年兵庫県）.



図 15　同品種の果実.



図 13　2015 年調査時の関係者のスナップ写真.



図 16　同品種の葉の両面.



図 14　*Hamamelis* × *intermedia* 'Savill Starlight' の狂い咲きの花.



図 17　ウィズリーガーデンに植栽されていた *Hamamelis mollis* 'Wisley Supreme' の葉の両面.



図 18　佐々木陽平先生によってウィズリーガーデンで拾われた落葉（左）と、兵庫県で発見したヤハズホオノキの変異体の標本（右下は落ちた花弁や雄しべ）.



図 19　ハンプトンコート園内で見つけた *Hamamelis*．花芽がたくさん付いており、その開花が見たい．

以上のようにイギリス視察中の 2 種 *Hamamelis* と *Magnolia* を日本国内での観察と比較しながら述べてきたが、両属とも日本人はもちろんのことイギリスにおいても非常に関心の高いこと、そしてその歴史の深いことを強く感じた。特に *Hamamelis* については、植物園、庭園等の各所で観察でき、ラベル表示があるもの（図 19）、また PLANT HERITAGE 刊行の冊子において見る限り、それぞれ栽培品種名が付いていて、特徴が解説されていた（図 20）。種間雑種は由来を詳細に記録し、園芸植物としても楽しまれていることに、イギリス人の感受性の繊細さと豊かさを感じた。

最後に、イギリスでは全般をコーディネートいただいた老川順子博士には度々各種様々な質問をさせていただいたにもかかわらず、いずれも丁寧に答えて教えていただきましたこと、各観察地点で適切な解説をいただいた方々、そして視察団の倉重祐二隊長始め隊員全ての方々から親切なお教えを請うことができた事をここに改めて感謝の意を表します。有り難うございました。今後もこの両種の追究と共に植物の観察・調査を続けたいと思いますのでご指導のほどよろしくお願いします。

最後の最後に、私ごとではあるが、訪園記念にキュー植物園のディレクターである Barkley 氏に拙著「兵庫県の樹木誌」を差し上げた時の記念写真を載せさせていただきます。同時に鳥井恒夫さんは自著「色分け花図鑑・桜草」を寄贈され三人の記念として写真を撮らせていただきました（図 23）。本当に素晴らしく楽しかった旅行の思い出です。



図 20　冊子 PLANT HERITAGE vol.50 に掲載された *H.* x *intermedia*　'Rubin'．



図 21　左から鳥井恒夫氏、キュー植物園園芸ディレクター Barkley 氏と著者．

参考資料

日本植物園協会誌第50号：68-73；2015

有用植物を保全する－日本版ナショナルコレクション構想

Promoting the conservation of useful plants–programs of the Japanese version of the UK's National Plant Collections

倉重 祐二
Yuji KURASHIGE

新潟県立植物園
Niigata Prefectural Botanical Garden

要約：日本植物園協会ナショナルコレクション委員会は、有用植物の保全システムの構築と保全の実施を目的として2015年に設置された。ナショナルコレクション制度は、植物園、個人や団体が保有する有用植物のコレクションをナショナルコレクションとして認定し、保存、育成、増殖、記録することで有用植物の保全を図るものである。本稿では委員会が設置されるまでの経緯と、ナショナルコレクション制度やその問題点、また将来の目指す姿について述べた。

キーワード：イギリス、ナショナルコレクション、日本植物園協会、保全、有用植物

SUMMARY：The National Collection Committee of Japan Association of Botanical Gardens was established in 2015 for the purpose of implementation of the conservation and construction of conservation system of useful plants. The system called national collection is to certify the collection of useful plants held by botanical gardens, individuals and other organizations as a national collection for conservation through preservation, cultivation, propagation and documentation of those useful plants. In this paper, a brief history of the committee establishment is described. The national collection system and its problems are also discussed with appearance that aims of the future.

Key words：conservation, Japan Association of Botanical Gardens, National Plant Collections, UK, useful plants

ナショナルコレクション委員会は、公益社団法人日本植物園協会（以下、植物園協会と略記）植物多様性保全委員会から独立して、今年度設置された。本委員会は、「植物多様性保全2020年目標」に掲げられたミッション「わが国のすべての野生植物種の生息域外保全と、有用植物の系統保存の中核として貢献する」および、「コレクション構築、保存、継承の方法を標準化し、さまざまな主体が連携したナショナルコレクションを確立する」の目標を実現するために、有用植物の保全システムの構築と実際の保全を行うものである。

本稿では本委員会が設置されるまでの経緯、ナショナルコレクション制度や将来の目指す姿について述べる。なお、植物園協会のナショナルコレクション制度の参考にしたイギリスのナショナル・プラント・コレクション（National Plant Collections）の実際については、平成27年度の海外事情調査報告書（イギリス）を参照されたい。

ナショナルコレクション委員会設立までの経緯

1）日本産絶滅危惧植物の保全事業の開始

植物園の保全活動に対する国際アジェンダ（International Agenda for Botanic Gardens in Conservation）で、「植物園は科学的研究、保全、展示、教育を目的とした記録を伴った生きた植物を有する施設である」と定義されるように、植物園は憩いの場を提供するという機能以外にも、教育活動や調査研究を行い、さらに近年は多様な植物を系統的に保有してきた植物園の特徴をいかした植物多様性の保全も重要な使命だと認識されている。環境省の第3次生物多様性国家戦略でも、植物園は生息域外保全の場として位置づけられ、多様性保全施設としての役割を果たすことが求められている。

2000年、環境省から「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 植物Ⅰ」が出版され、日本産の維管束植物約7,000種類のうち、25種類が絶滅（EX）または野生絶滅（EW）し、絶滅危惧（CR、EN、VU）として1,665種類

〒956-0862　新潟県新潟市秋葉区金津186
Kanadzu 186, Akiha-ku, Niigata-shi, Niigata 956-0862
ykurashige@greenery-niigata.or.jp

が選定された。それに伴い、植物園協会植物多様性委員会では、加盟園に対して2003年に絶滅危惧植物の保有調査を行った。その結果、保有されている絶滅危惧種は695種、そのうち3個体以下しか保有されていない種が459種もあり、さらに保全に利用できる自生地由来の植物も非常に少ないことが明らかになった。このことから、日本の植物園の絶滅危惧植物の保全施設としての基盤はきわめて脆弱であり、植物園協会として本腰を入れて保全事業を進める必要があるとの認識に至った。

この状況に鑑み植物多様性保全委員会では、2006年に全国各地域の植物園が保全の拠点となって市民団体、行政や研究機関等と連携して効率的に絶滅危惧植物の生息域外保全を進める「植物多様性保全拠点園ネットワーク」を組織した（図1）。自生地での種子採集や栽培環境を考慮して全国を10地域に分割し、それぞれの地域で絶滅危惧植物を収集する「地域野生植物拠点園」（23園）、特定の分類群や水生植物や高山植物など各園が得意とする植物を集中して収集する「特定植物保全拠点園」（19園）、また収集した種子を長期に保存する「種子保存拠点園」（1園）を設置した。

同時に、世界植物保全戦略（GSPC）」の目標に準じ、「日本の植物園において日本産絶滅危惧植物種の60％（1,014種類）を保有する」という2010年目標を掲げた。その一方、効率的に収集を進めるために危急度の高い種、植物園で保存されていない種等の条件でそれぞれの種についての優先度を定めたターゲットリストを作成した。

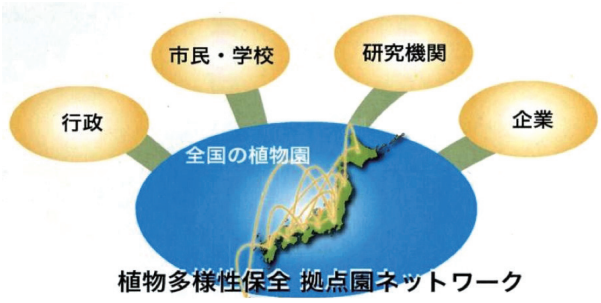


図1　植物保全拠点園ネットワークの概念図.



図2　環境省生息域外保全モデル事業として行ったオキナグサの保全（新潟県立植物園）.

2）植物多様性保全拠点園の成果と2020年目標

環境省、地域の保護団体や行政機関等の協力を得ながら、全国の保全拠点園が自生地での種子採集を精力的に行った結果、2010年には「2010年目標」を91種上回る1,021種（60.4％）を保有するという成果を上げることができた。一方、普及・啓発活動として、展示、シンポジウム、ワークショップ、保全ニュースレターの発行、「日本の植物園における生物多様性保全」の出版などの事業を行った（図2-4）。

その後、名古屋で2010年に開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）で示された「世界植物保全戦略2011-2020年」に基づき、植物園協会では「植物多様性保全2020年目標」を定め、2020年までに日本産絶滅危惧植物種の75％（1,335種）の生息域外保全を達成すべく活動を推進している。2015年6月の植物園協会の50周年総会において、植物多様性保全委員会から第3回保有状況調



図3　小学生の環境学習プログラム（東京都神代植物公園植物多様性センター提供）.



図4　ヤンバルの貴重な植物展（国営沖縄記念公園熱帯・亜熱帯都市緑化植物園提供）.

表1　日本植物園協会の加盟園による日本産絶滅危惧種の保有状況.

西暦	環境省選定絶滅危惧種数	植物園協会保有種数	保有率(%)
2000	1,665		
2003		695	41.7
2006	植物多様性保全拠点園事業の開始		
2007	1,690	849	50.2
2010		1,021	60.4
2012	1,779	1,115	62.7
2015		1,073	60.3

査中間報告として1,076種の絶滅危惧植物を保有していることが報告された（表1）。

3）有用植物の保全　日本産の園芸植物の置かれた状況

このように10年を要して、やっと日本産絶滅危惧植物の生息域外保全事業が緒に就いた感があるが、2020年目標のミッション「わが国のすべての野生植物種の生息域外保全と、有用植物の系統保存の中核として貢献する」にあげられている有用植物の系統保存については、まだ手がついていない状態である。植物園協会ではこの「有用植物」を定義していないが、多くの国公立園や私立園、薬用植物園が加盟する植物園協会では、観賞用園芸植物や薬用植物が大きな比重を占めることが予想される。

園芸植物を考えた場合、野生種とは異なりほとんどが栄養系であることから植物体での保存が必須なことや、多くの品種群でこれまで何が作出され、保存されているのかもほとんど調査されていないこともあり、絶滅危惧植物と同様に危機的な状況にあることが想像される。

特に江戸時代より綿々と続いてきたサクラソウやツツジ、ボタン、カエデ等々の日本独自の園芸植物は重要な遺伝子資源であるが、あるものは生産が続き、または一部は伝統園芸植物として愛好家によって栽培されてきているが、その多くは失われてしまっている。江戸時代のボタンの園芸品種はすべて失われ、また大正時代に栽培されていたツツジの品種についての調査では、半数が現存するに過ぎないことが判明した（倉重・小林、2008）。近年の園芸品種であっても販売されなくなった植物は、生産者であっても保存しつづけることは困難であり、毎年かなりの品種が発表されている以上に消えている植物は多いと思われる。品種の販売サイクルが短い現代にあっては、流行が終わり、生産がされなくなったとたんに、原木も消えて行く運命であると言えるだろう。私の所属する新潟県立植物園では、アザレア（Indian Belgian azalea）を収集しているが、戦前に国内で作出された品種はほとんど見つけることはできなかった。アザレアは明治から昭和初期にかけて西洋花木として人気を博し、コレクションの対象にもなったが、現在では収集家は皆無、生産者も保存しておらず、唯一発見されたのが佐賀県のアザレアの栽培・育種家であった野口寅雄氏のコレクションであった（現在はぐんまフラワーパークが所有）。このように、生産はされているが収集の対象から外れた植物だけではなく、ザクロ（花石榴）や葉を観賞するゼラニウム（天竺葵）などは、多くの園芸品種が存在したこと自体も忘れられつつある（図5-8）。

生きた文化財ともいえる園芸植物が、何が存在したかも知られることもなく消えるのは、人類にとって非常に大きな損失と言っても過言ではないだろう。実際、サツキやアザレアの花に枝変わりが出やすく、咲き分けや絞り、八重などの形質は、すべて江戸時代の流行期（17世紀後半）に改良、収集されたツツジの変異が元となっている。さらに伝統園芸植物は、栽培が難しい種類が多く、保存基盤が個人や愛好会などに限定されていることが多いため、優先的に保全を進める必要があると考えられる。



図5　江戸時代を代表するツツジ‘本霧島’（石川県珠洲市）.



図6　明治後期に新潟県で作出されたボタン‘四方桜’.



図7　昭和初期に日本に導入されたアザレア‘Albert Elizabeth’（日本名：王冠）.



図8　ヤブコウジの園芸品種は、新潟県と島根県で100品種以上が保存されている（‘日之司’）.

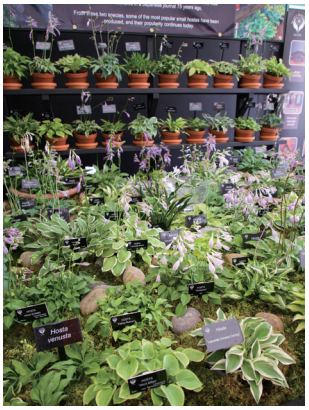


図9　ハンプトンコートフラワーショーで展示された小型ギボウシのナショナルコレクション.



図10　Marwood Hill Gardensのチダケサシ属（*Astilbe*）ナショナルコレクション.



図11　アレン氏のシャスタ・デージー（*Leucanthemum ×superbum*）ナショナルコレクション.

ナショナルコレクション構想

ここで参考になるのが、イギリスで行われているナショナルコレクション（National Plant Collections）である。これはイギリスで栽培される野生種や園芸植物を保存、育成、増殖、記録する制度で、プラントヘリテージ（Plant Heritage）という民間団体によって運営されている。分類群（属）や歴史的な背景等によって収集された植物を保有する植物園や大学、個人や特定の植物を専門に生産しているナーセリー、市町村など600以上がコレクションホルダーとして登録され、一般にもコレクションを公開している（図9-11）。情報は「The National Plant Collections Directory」として毎年出版され、これを見て時期限定で公開されるコレクションと美しい庭園を訪れる愛好家も数多い（詳細は http://www.nccpg.com/National-Collections.aspx を参照）。

このイギリスのナショナルコレクションを参考にし、絶滅危惧植物を保全してきた実績を活かして有用植物の保全を行おうというのが、植物園協会の日本版ナショナルコレクション構想である。

多くの植物園が保有する園芸植物などの価値が明らかになることで、保全の意義が高まり、一般にも植物や植物園をアピールする効果も期待できる。

日本版ナショナルコレクション

イギリスのナショナルコレクションを参考としても、それをそのまま日本でスタート、運用するには数々の問題があり、日本に適した制度に改める必要がある。そこで植物園協会では、2013年3月にナショナルコレクションに関するワークショップを開催し、同年4月から2015年3月まで2年間にわたって外部有識者を含めた「ナショナルコレクション構築に関する分科会」を組織し、問題点や短期および中長期的な構想について検討した。一方、植物多様性拠点園会議や植物研究会を利用して加盟園との意見交換を行った。

2014年1月に保有するコレクションや広報の希望に関するアンケート調査を110の全加盟園に対して行った。44園の回答からは、35園が一定のまとまりのあるコレクションを有し、薬用植物園は情報を一般に公開することを希望する園が少なく、国公立園では多いことが明らかとなった（ナショナルコレクション構築に関する検討会 2014）。

薬用植物は観賞園芸植物や栽培品種の概念とは区別して扱う必要があるという意見がナショナルコレクション分科会でもあったことから、以下は観賞用園芸植物の保全を中心として、これまでの議論や私見も含めて、事業の内容や問題点を述べていく。

1）コレクション保有状況調査

絶滅危惧植物については環境省、県や市町村によって調査が行われ、危急度や分布、個体数等が公表されているが、

園芸植物については現在どのような品種が栽培されているのか、またかつてどのような品種が存在したのか、どの程度危機的な状況なのかは、全くと言って良いほど知られていない。

まずは現状を知ることが必要であるが、最初からすべての植物を対象に調査することは不可能なため、まずは植物園協会の加盟園に保有コレクションに関するアンケートを行い、さらにモデルケースとして、保全の重要性をアピールしやすい身近なサクラやカエデなどの特定の分類群についての調査を行ってはと考えている。どこの植物園に行けば、こんなサクラが見られるのかが分かれば一般の人も楽しいであろうし、思いがけず珍しい品種が植えられていることが評判になる可能性もある。

園芸植物だけでも、その数は膨大になることが予想されるため、江戸時代に作出された、また日本独自の園芸品種である等、遺伝子資源としての重要性や文化的な背景を考量した基準をつくり、調査や保全対象とする分類群の優先順位を決める必要がある。

2）ネットワークの形成

園芸植物の保全を進める場合は、植物多様性保全委員会や特定植物保全拠点園等と連携することはもちろん、大学や試験場等の研究機関、コレクションを有する愛好家団体、個人や生産者ともネットワークをつくり、情報を収集する必要がある。その一方で、農業分野に関わる穀物や作物等を中心とした遺伝子資源を保有する農林水産省の農業生物資源ジーンバンク（登録点数21.5万）との連携や役割分担も必要となる。その他にも薬用植物園が多く加盟する植物園協会にあっては、厚生労働省などとの連携が考えられる。

一方、ナショナルコレクション事業には、多くの個人や団体が関わるため、シンポジウムやワークショップの開催、出版、コレクションの公開などを通じて、一般市民に対しても有用植物の保全の重要性について広く理解を得る必要もある。

3）コレクションホルダーの認定

絶滅危惧植物の生息域外保全が自生地で種子を採集して行われるのとは異なり、ナショナルコレクションは個人や団体等がすでに保有していているコレクションを認定する制度である。このため、認定されたコレクションが社会的に評価されることが必須であり、ステータスを与えることができる権威ある認定機関が必要となるだろう。将来の認定機関は、植物園協会だけではなく、関連学会や代表的な植物関連団体、国など多方面の組織で構成されるべきだと考える。

また、認定基準づくり、認定作業、その後のコレクションの保有状況や利用状況のチェックやサポート、次世代に貴重なコレクションを確実に引き継ぐ仕組みづくりなども含め、事業が本格化すれば多くの人員と予算が必要になることが考えられる。

4）データベースの構築

現在植物園協会で収集した絶滅危惧植物の中には、ラン科をはじめとした、栽培が難しく、育成や繁殖についての十分な知見を持っていない種が数多くある。また、植物園の植物育成業務を取り巻く環境も悪化しており、技術の開発と継承は危機的な状況に陥っている。こうした状況のもと、絶滅危惧植物の特性情報を集約し、広く技術と知見を共有し次世代に継承する仕組みをつくるために特性情報をデータベース化する事業を植物多様性保全委員会で進めている。

これを有用植物にも適応させることで、比較的容易にナショナルコレクションの品種名の総覧や所有者、栽培方法について情報を集約できると考えている。情報のデータベース化を通じて、個体やDNAの保存、資料へのアクセス、技術的なサポート他、さまざまな情報共有が可能になり、一方ではコレクションの継承、危険分散、受け入れ（セーフティネット形成）に貢献することもできるだろう。また、情報公開のガイドラインを作成し、差し支えない情報については、インターネット上で公開することも必要だと考えている。

5）日本全体の植物を守る

植物のコレクションは、個人、団体にかかわらず関わっている人間と命運を共にすることが多いようだ。今後、ナショナルコレクションのネットワークが充実すれば、さまざまな情報を共有、発信することが可能となり、特に基盤の弱い個人のコレクションを次の世代に橋渡しすることもできると考えている。

日本版ナショナルコレクションについては、課題も多く、検討もはじまったばかりであるが、まずは危機に瀕した有用植物の移譲先を探す「橋渡し事業」や協会内での認定作業を早期に開始することが重要であると考えている。

今後、広く関連団体、市民、行政等の協力を仰ぎ、生きた文化財とも言える園芸植物をはじめとする有用植物を守り、後代に伝える事業を展開するとともに、植物多様性保全委員会の保全事業とナショナルコレクション事業が統合され、植物園協会が日本全体の植物を保全する存在になるこ

とができればと考えている。

引用文献

倉重祐二・小林伸雄 (2008) 発見された神奈川県立農事試験場 “躑躅類調査” にみる大正時代のツツジ園芸品種と育種傾向の推察. 園学研 (Hort.Res.Japan) 7(2): 323–328.

ナショナルコレクション構築に関する検討会 (2014) 日本植物園協会の保全活動と日本版ナショナルコレクション構想 植物園コレクション意向調査アンケート. 日本植物園協会 (編). 絶滅危惧植物の特性情報の集約に向けたプラットフォーム作り. 45-46. 日本植物園協会.